

デビルメイクライ 4

DEVIL MAY CRY®

-Deadly Fortune-2

森橋ビンゴ

原作/カプコン

小説ストーリー協力/安井健太郎

大人気ゲーム、完全ノベライズ!

# ダンテ VS 神!

スニーカー  
文庫

魔剣教団の“神”に、デビルハンター、ダンテが挑む。  
神の内部に囚われたネロ、そしてキリエの命運は!?

●森橋ピンゴ

2002年から4年間、株式会社カプコンに在籍、「デビルメイクライ」シリーズの開発に関わったかわら、小説執筆活動を行う。現在はカプコンを退社し、フリーランス。

東京移住から3か月、いまだに部屋にテレビも冷蔵庫も洗濯機もない。でも慣れた。人間って大概の事はどうにかなるんだと思う。

カバーイラスト/THORES柴本  
カバーデザイン/中デザイン事務所



デビルメイクライ4

DEVIL MAY CRY

-Deadly Fortune-2

森橋ピンゴ

原作/カプコン

小説ストーリー協力/安井健太郎

角川スニーカー文庫

森橋ピンゴ  
カプコン 原作  
安井健太郎 小説ストーリー協力



デビルメイクライ4  
-Deadly Fortune-2

角川スニーカー文庫



9784044192235



1920193005714

ISBN978-4-04-419223-5

C0193 ¥571E

定価：本体571円(税別)

「さあ……おはようの時間だ、坊や！」ダンテの声に、ネロは目覚めた。フォルトゥナの上空に屹立する、“神”の体内で——。ついにその野望を露わにした魔剣教団、そして教皇サンクトゥス。巨大な人型兵器、“神”を起動する鍵としてその体内に囚われたネロとキリエを救い出すべく、デビルハンター・ダンテは、悪魔を蹴散らしながら疾駆する！全世界を魅了した大人気ゲーム、シリーズ最新作の完全ノベライズ、第2巻登場！

デビルメイトライク4

# DEVIL MAY CRY

-Deadly Fortune-2



ダンテ



魔剣士スパーダと人間の間に生まれた、凄腕のデビルハンター。魔剣教団の正体を探りに来たこのフォルトゥナの街で、思わぬ「身内」との出逢いを果たすことに。

トリッシュ



かつては魔帝に仕え、現在はダンテの相棒として行動をともしている悪魔。魔剣教団に「クロリア」として潜入し、その正体を探っていた。ダンテの母によく似た美貌を持つ。

レディ



デビルハンターを生業とする人間の女性。ダンテとの出逢いは敵として、だったがのちに和解。現在は商売をもつにする仲間である。厄介ごとをキム・ダンテの所に持ち込んでくる。

ネロ



魔剣教団に所属する若き戦士……だったが、教団の真の姿を知り、幼なじみのキリエを救うべくたったひとりで戦いを挑む。悪魔を扱えるなど、悪魔との関わりを思わせる能力を持つ。

# デビルメイクライ 4

-Deadly Fortune-2

著/森橋ビンゴ

原作/カプコン

小説ストーリー協力/安井健太郎



角川文庫 15768

---

---

## C O N T E N T S

---

STAGE 00-1	.....005
STAGE 12	.....022
STAGE 00-2	.....032
STAGE 13	.....041
STAGE 00-3	.....060
STAGE 14	.....071
STAGE 15	.....090
STAGE 16	.....112
STAGE 17	.....131
STAGE 18	.....155
STAGE 19	.....183
STAGE 20	.....216
あとがき	.....236



# *DEVIL MAY CRY*

—*Deadly Fortune*—2

---

---



STAGE 00-1



一人の女が、その小柄な体軀には不似合いの巨大な銃器を携え、とある埠頭に立ち尽くしていた。

彼女がそこを訪れたのは、彼女の狙う獲物がその場所を根城にしているという情報を事前に得ていたためだった。

しかし、いざ足を運んでみるとそこには悪魔の気配などからきしない。「ガセネタ掴まされた、って事……?」

咳きながら、彼女は短いながらも艶やかな黒髪を掻き上げる。そして小さく嘆息すると、弦月の浮かぶ中天を仰いだ。

ともすれば、そこに狙うべき獲物がいるのではないかと考えたのだ。

彼女が狙う獲物とは、鳥や獣ではない。ましてや人でもない。

口絵・本文イラスト THORES 柴本  
口絵・本文デザイン 中デザイン事務所

本来ならばこの世界にはいてはならぬ、しかし時折この世界に迷い込む異形。人はそれを悪魔と呼ぶ。

そして彼女——レディが執拗に追い続けるのは、そうした悪魔と呼ばれる生物であった。

上空に鳥一羽さえ飛んでいない事を確認したレディは、落胆しつつ息を吐き、後方に停めてあるバイクの方に戻ろうと振り返った。そして異変に気付いた。

何か、金属が擦れ合うような音が微かに耳に届いたのだ。

そしてその音は徐々にレディの方に近付いてきている。どうやら眼前にある曲がり角の向こう側に音の主がいるらしいとだけは理解できた。

レディは腰を僅かに落とし、携えていた巨大な銃器を構えた。大型の銃剣を備えたそのミサイランチャーは、対悪魔用に彼女自身が設計した物だ。

しかしそれを構えてはみたものの、相手が何者なのか、それが分からない事には引鉄を引くわけにもいかない。

音の主が人間である可能性は限りなくゼロに近いとは言えた。彼女に近づくその音には人の気配が伴っていない。もっと無機質な、機械を思わせるような音だ。

しかしもしその見当が外れて音を発しているのが人間であれば——警告もせずにミサイクルによる射撃を敢行するわけにもいかない。

悪魔に対してはいくらでも無慈悲な殺戮者たりえるレディとて、分別のない殺人者にはなり

たくはない。

「……誰かそこにいるの？」

音の聞こえてくる方向にレディがそう問うと、規則的な調子を保っていた音が一度そこで途切れた。だがすぐにまた再開し、彼女の方に近付いてくる。

「あんたが人間なら……悪い事は言わないわ、そこで止まりなさい。そのまま近付いてきて私に姿を見せるなら、あんたが何者だろうとブツ放すわよ」

その警告も空しく、音は止まる事なくもう間もなく曲がり角から姿を現すというところまできている。

レディは引鉄にかけた指を緊張させた。

未だ姿の見えぬその相手に、言葉が通じていないのか、それとも通じていながらなお近付いてきているのか、その事を考えていた。

相手は人ではない。

もはやそれは長年の経験から断言できる。人間ならば彼女の放った警告に対し、幾許かの混乱や恐怖を感じる時間があるはずだ。

だが今近付いてくる相手にその様子はなかった。ほんの一瞬间、静止し、そしてまた動き出しただけだ。

では相手は何者か。それが問題だった。



人ではない何か。

仕事柄、レディは人ではない存在を幾度となく相手してきた。だがその彼女の経験からも、今まさに相対しようとしているのが何者なのかをはっきりと断ずる事ができない。

悪魔なのか。

だとしても、彼女が追っている獲物とは違う。今レディが追っているのは翼を持った犬面の悪魔だ。歩くたびに金属質の音を立てるような事はないし、なんらかの事情でそうなっていたとしても彼女の警告を受ければ逃走するだろう。非常に警戒心の強い悪魔だと聞いている。

「オーケー……決めたわ。相手が何だろうと吹っ飛ばす……」

自分に言い聞かせるように呟き、レディは正面方向、今まさに音の主が姿を現そうとしている曲がり角を見据えた。

カチャリ、カチャリという金属音は、どうやら足音らしい。その足音が近付いてくるのを確認しながら、レディは心の中でカウントを開始していた。

3、2、1……。

カウントゼロと同時にそれは姿を現した。

「発射！」

その姿の詳細を確認するよりも早く、彼女は引鉄を引いていた。

発射口から勢い良く飛び出したミサイルが、対象目掛けて一気に加速を開始する。

その対象——音の主——の異様な姿にレディが気付いたのはミサイルがまさに着弾しようとする寸前の事だった。

「鎧……？」

それは人のように見えた。まるで中世から現れたかのような、鎧を着込んだ騎士のような姿だった。巨大な槍と、巨大な盾とを手にしている。

騎士は己に向かってきたミサイルに対し、何ら動揺する素振りも見せず、半身を隠す程の巨大な盾を機械的に前に突き出した。

ミサイルが盾に衝突し、弾けた炸薬が巨大な爆炎を生み出す。

濛々と上がる黒煙が晴れた後、レディは己が目を疑うよりなかった。

鎧騎士は傷ひとつ負った様子もなく彼女の正面に立っていたからだ。

確かに盾で防ぐような動きは取っていた。だが彼女のミサイルランチャー——カーリーナリアンは生半可な悪魔なら一撃で四散させてしまう威力を秘めている。

レディは苦笑し、カーリーナリアンを担ぐと肩を竦めた。

「どっかの仮装パーティから迷い込んできた……ってわけじゃなさそうね」

レディの言葉に対し、騎士は何も言葉を発しない。

レディは騎士の周囲を回るようにゆっくりと歩き出してみた。騎士は移動したレディを目で追うように首と上体とを捻らせる。

「……喋れないの？ それとも喋れないの？ 私が何を言ってるか理解できてる？」  
 そう問いながらも、レディはさして騎士からの返答がある事に期待してはいなかった。言葉  
 を投げ掛けているのは、あくまで相手の能力を測るためだ。

騎士はレディの姿を追うように体勢を変えている。それにより、視覚、乃至それに近い能力  
 を持った器官を有している事が分かる。そしてレディの言葉に対し、完全に無反応というわけ  
 ではない。言葉こそ返さないが、レディが言葉を発する度、騎士はほんの僅かにではあるがそ  
 の動きを硬直させる。聴覚もまた有しているという事だろう。

そしてカーリーナリアンのミサイルを受け止めるだけの強度を持った盾。断定はできないが、  
 騎士のまとった鎧もまた同等の素材でできていると考えた方がいいだろう。

騎士は依然、レディを見つめるだけに留まっていた。敵意はないのかもしれない。普通に考  
 えればレディの方から攻撃を仕掛けて以上、反撃のひとつもしてきそうなものだ。

打ち倒すべき存在か否か、レディはその事を考える。

騎士がこの世の物ではない事は明らかだ。カーリーナリアンの一撃を受けてなお平然としてい  
 られるような生物はこの世界にはいない。

だとすれば何か。

悪魔なのか。

しかし悪魔にしてはどこかおかしい。その事が、レディに次なる行動を取る事を危ぶませて

いた。

人間には害をなさぬ類の悪魔かもしれない。

そんな思考がふと頭を過ぎり、レディは苦笑した。

昔の自分なら、そんな事を思い付きもしなかっただろう。悪魔などは全て世界に仇なす存在  
 と信じて疑わなかったあの頃なら。

だがレディはその後、出会ってしまった。

人の言葉を喋るだけでなく、軽口さえ叩き、心を持った悪魔と。

そこまで考えて、レディは舌打ちをする。

「やだやだ……下らない事考えちゃったわ」

吹き、髪の毛を掻き上げると、レディは太股のホルスターに納めている折り畳み式のボウガ  
 ンを引き抜き、それを展開させた。

「ガラじゃないのよね、悩むのって……」

レディがボウガンに矢を番えている最中も、騎士は動かない。本当に敵意はないのかもしれ  
 ない。だが騎士は攻撃を受けてなおこの場に留まっている。弁解などもしない。言葉を解さな  
 くとも身振り手振りでいくらでも意思は伝えられるはずだ。それさえしらない。

であれば、狩るべき存在と認識するのが妥当だ。相手が人ではない以上。

矢を番え終わったレディは、ボウガンに向けて小さく微笑んだ。

「そういうわけで、私に出会ったのが不運と思ってね！」  
飛び退りながら、レディはポウガンの引鉄を引き絞った。

それを察知した騎士が身構える。三方向に拡散するように射出した矢のうち、一本は騎士の盾に阻まれたが、残りの二本は狙い通り、騎士のまとった鎧の関節部分に突き刺さった。

面による攻撃では巨大な盾が邪魔をして効果的なダメージを与えられない。そう考へての武器選択だった。

だが騎士は、矢が突き刺さった事にさえ怯む様子がない。苦悶の声すら上げなかった。ようやくレディを敵と認識したのか、騎士は腰を落とし、手にした槍を構える。

その槍が、唐突にバイクのエンジン音を思わせるような轟音を上げた。

直後、騎士のまとっている鎧の一部が展開し、翼を思わせる形状に変化する。

後方に跳躍しながら矢を番えていたレディは、言い知れぬ危機感から、着地と同時に右手方向に転がっていた。

そのレディの体を掠めるように、槍を突き出した騎士が突進してきていた。

およそ重厚な鎧を着ているとは思えぬような速度。

振り返りすれ違った騎士の姿を目で追ったレディは、その速度の理由を理解した。

騎士は宙を舞っていた。展開した翼のような部位から青白い炎のようなものが噴出している。

「ジェット搭載？ いいモノ持つてるじゃない」

レディは肩を疎める。空を飛ぶタイプの悪魔には何度も遭遇した事があるが、炎を噴き出しながら飛ぶような悪魔を目にしたのはそれが初めてだった。

宙に浮いたまま、騎士が再度槍を構える。槍はまた轟音を立てた。その槍からも、青白い炎が吐き出されている。

随分人間臭い兵器だ、とレディは思った。

俗に魔具と呼ばれるような魔力を有した兵器が存在する事もレディは知っていたが、騎士の持つ槍は、それら魔具とはどこか違うように思える。

そんな事を考えるうちに、騎士の再びの突進が迫っていた。

だが速度こそあるものの、極めて直線的で単純な動きだった。一度目になっている今となっては避けるのは容易い。

騎士の突進を回避し、振り向きざまにポウガンを撃ち込むと、今度は三本の矢全てが鎧の隙間に命中する。

だがやはり騎士には応えた様子もない。深々と突き刺さった具合から見ても、矢の先端は確実に鎧に包まれた本体に傷を与えているはずだ。しかし、矢の突き刺さった箇所から血や体液が流れ出したりなどもしない。

「鎧自体が本体か……」

レディは得心したように呟いた。

己の肉体を持つ悪魔は、人間界では実は希少な存在に他ならない。

悪魔の棲む魔界と人間界とを繋ぐ道は、基本的に閉ざされている。その道が何らかの異変により開かれてしまった結果、悪魔が人間界に現れるわけだが……肉体を持った悪魔が出入りできるような巨大な道はそうそう開かれるものではない。故に、人間界にやってくる多くはガスのような実体を持たぬものが多い。そしてそういったガス状の悪魔は、人間界で活動するため様々な物質を依代として肉体の代替品を生み出す。

古びた人形や処刑道具のような、人の感情に触れてきた物質は特に依代として好まれやすい。そういう意味において、目の前の鎧騎士の存在にレディは驚きはしなかった。

以前目にした事のある、砂を寄り集めて肉体を生み出していた悪魔の方が驚きがあった程度だ。しかし腑に落ちない点もいくつかはある。

特に鎧の強度だ。

どこの博物館に置かれていた中世の鎧に悪魔が取り憑いた、という現象自体はいかにもありそうな話だ。だが大した製鉄技術のない時代に生み出された鎧が、レディの数度の攻撃を受けてなお無事でいるとは考えにくい。

かと言って、現代技術で生み出した鎧に悪魔が宿るかと言えばそれは微妙な話だった。あり得ない、とは言いい切れない。しかし可能性はおそらく低い。

そして騎士が持つ盾に刻まれた紋章。

その紋章に、どこか見覚えがあった。だが詳細がどうしても思い出せない。

レディの眼前では、騎士が再度の突進の準備を開始していた。

それを見て、レディはカーリーナアンを手に取り、銃口の下に備えられた銃剣を地面に突き立てる。

「ちょっと調べてみたいし……そろそろおとなしくしてもらおうわ」

そうレディが口にするのと同時に、騎士の三度目の突撃が敢行されていた。

レディは慌てる事もなく、カーリーナアンの二つ目の引鉄に指を掛けた。

カーリーナアンには三つの引鉄が存在する。

ひとつは前面の銃口から大型ミサイルを発射するための引鉄。

そしてもうひとつは、カーリーナアンの銃身後部のポッドから無数の小型ミサイルを発射させるための引鉄だ。

「消えなさい！」

レディが引鉄に指を掛けると、ポッドから十六基のミサイルが一斉に上空へと舞い上がった。それに気付いた騎士が、一瞬ではあるが上空を気にするような素振りを見せる。

「見てる、ってよりは熱を感じしてる、ってとこみたいね……」

上昇したミサイルが弧を描きながらその進路を騎士の方に修正していくにつれ、騎士は突進を中止させ、上空に向けて盾を構えた。

「無理よ。それじゃ防げない」

レディはほくそ笑んだ。騎士の持つ盾がいかに巨大であろうと、空中で一度拡散し、それから収束して標的を狙う小型ミサイル全弾を防ぎ切る事は不可能だ。

想像通り、ミサイルのいくつかは盾に阻まれはしたものの、残り十発近くは騎士の無防備な箇所命中し、爆ぜた。

それでも騎士のまとう鎧にはさしたる傷はない。しかしレディにとって重要なのは、ミサイルを受けた衝撃で騎士の体が大きく傾いだ事、ただそれだけだった。

地面から銃剣を引き抜いたレディは、カーリーナIIアンを騎士に向けて構えていた。

そして指を掛けているのは残された三つ目の引鉄。

それは、巨大な銃剣を発射する装置を起動させるためのものだ。

「こういう強引なやり方は好きじゃないんだけどね、あいつみたいで！」

叫びながらレディが引鉄を引き絞ると同時に、ワイヤーを伴った銃剣が一気に前方へと射出される。ポウガンの矢も鎧のもろい箇所には突き刺さった。鋭い銃剣の刃が鎧を通らぬ道理はない。

硬い手応えと共に、騎士の胸部に銃剣が深々と突き刺さった。

よろめく騎士をよそに、レディが絞り続けていた引鉄を解放すると、銃剣後部から伸びているワイヤーが瞬時に巻き上げられていく。刃部分に幾つもの隆起を持つ銃剣は、鎧に食い込み、

離れない。そしてワイヤーが巻き上げられる事で、騎士の体が少しずつレディの方に引き寄せられていく格好になっていた。

体重の軽い悪魔なら、有無を言わず強引に引き寄せてしまう事もできるのだが、騎士の重量の大きさに加えて、鎧の背部の推進装置が起動しているせいで、一時、綱引きのような均衡状態に陥った。

レディは溜め息を吐き、

「そんなに私の傍に来るのが嫌？」

返答も期待せぬ問いを投げ掛けた後で、

「じゃあこっちから行くわ」

そう告げて自ら踏ん張っていた足で地面を蹴り付けた。

緊張していたワイヤーが一気に巻き上げられ、レディの体は先程の騎士の突進さながらに滑るように騎士に向かい飛んでいく。

その勢いのままに騎士の傍に着地すると同時に、銃剣がガツチリとカーリーナIIアンの銃身に組み込まれる音がした。

それを確認すると同時に、レディは上方に跳躍すると、すぐさまカーリーナIIアンの銃把に着地する。レディの体重を乗せた事により、鎧に突き刺さった銃剣は火花を上げながら騎士の鎧を引き裂いていった。

体の中央から二つに裂かれた騎士は、一度嗚咽にも似た声のようなものを漏らし、そのままがっくりと膝を突いた。そのまま力なく倒れた騎士の鎧には、レディの予想通り、人はおろか悪魔と思しき生命体すら存在していない。ただ青白い人魂のようなものだけが仄かに輝き、そしてそれも霧のように消え去っただけだった。

「……さて、と」

呟き、レディはその場に跪くと、鎧の残骸を拾い上げようとした。この素材を調べれば何か分かるかもしれない。そう考えての行動だった。

だが破片に触れようとした瞬間、レディはその手を止めた。

止めざるを得なかった、と言った方が正しい。

周囲を取り囲まれていた。その事に気付いたからだだった。

「……お仲間、つてわけね」

立ち上がり、レディは周囲を振り返る。レディを取り囲んでいるのは、先程まで自分が対していた鎧騎士と瓜二つの騎士。しかも一体や二体ではない。

戦うという選択肢は、もはやレディの中になかった。

この騎士達とは相性が悪すぎる。

レディの持つ武器の多くは一人でも多数の悪魔を相手にするためのものだ。それ故に、点ではなく面で攻撃する類の武器が大半を占めている。だがこの騎士達を相手にするには一点突破

の強大な攻撃力が必要になる。隙を作って鈍剣を撃ち込み、そのまま鎧を切り裂くなどというやり方は、あくまでその場凌ぎの奇襲に過ぎない。何度も通用する手段ではないし、何より、複数を相手にして安易に使える方法でもない。

若い頃の自分なら――。

レディは考える。

こんな状況に置かれた時、むしろ強気になって相手に向かって行っただろう。母の仇を執拗に追い続けていたあの頃の、負ける事など想像もしなかった自分なら、これだけの多勢を相手にも果敢に立ち向かおうとしただろう。

だが今の自分は違う。

積み重ねた経験と知恵があるからこそ、自分の実力を過信しない。この騎士達を相手にするには、今の武装では分が悪い。それを認めるだけの殊勝な心は持っている。

騎士達はまだ間合いの外にいた。だがゆっくりとレディを追い詰めるように歩を進めてきている。その騎士のうちの二体が、まるでズダ袋でも引きずるようにして手にしていたモノに、レディは気付いていた。

それは悪魔だった。

レディが仕事として追いかけていた、翼を持った犬面の悪魔。その死骸だ。

理由は分からぬが、騎士達はその悪魔を狩ったのだろう。人ではないこの騎士達は、やはり

悪魔と呼ぶべき存在ではないように思えた。そして相手が悪魔ではなく、また自分が狩るべき悪魔すら「先を越された」状態にある以上、レディの取るべき行動はもはやひとつしかない。

「悪いけど……これ以上タダ働きはごめんだわ」

そう言って、レディは上空にカーリーナリアンの銃口を向けた。

そのまま上空にミサイルを発射すると、騎士達がそれに反応して一様に足を止める。

その隙に、レディは続けざまに銃剣を自分のバイクの方角に向けて射出していた。

銃剣をバイクの傍の地面に撃ち込み、ワイヤーを巻き上げるとレディの身体は瞬時にバイクの傍に運ばれる。騎士達はレディの行動に気付きその進路を変えようとしていたが、レディがバイクに飛び乗り発進させる方が速かった。

騎士達が飛行能力を持つ事は知っているが、自分のバイクならその速度にも負けないという自負があった。そのバイクもまた、悪魔に対抗するために様々な改造を施してある。

事実、数分もせぬうちに、レディは騎士達の追手から逃れる事に成功していた。

しかしそれがあまりに容易であった事が、逆にレディにとって気に食わない。

あの騎士達の能力なら、もう少し執拗にレディを追って来ても良いはずだった。しかしすぐに諦めてしまったかのように思える。まるで最初からレディになど興味がないとでも言わんばかりに。

そしてあの騎士達が悪魔を狩っていたという事実。騎士が持つ盾に刻まれた紋章。

キナ臭さを感じながら、レディはその場を後にしていた。



## STAGE 12



夢なのか、現実なのかも分からなかった。

身体を動かさそうとしてみても、俺には動かすべき身体がない。あるのはただ意識だけだ。そしてその意識もかなり曖昧で、ぼんやりとしている。

ただ、それが不快かと言えばそうでもなかった。

陽に照らされてまどろんでいるような穏やかな心地良さがある。けれどその心地良さに完全に身を任せてしまう事が、怖かった。

このまま意識を閉ざしてしまえば、二度と戻って来られないような気がした。

理由は分からない。俺にはもはや自分が誰なのかという記憶さえもないのに、自分を完全に失う事の恐怖だけは、はっきりと感じている。

俺は、誰だ。

声を出す事すらかなわぬ身で、俺はそう自問する。

何も思い出せない。

ただ、何か大切な物を失ってしまった気がする。

愛する人か。自分の一部か。それともその両方か。

それを取り戻さなくてはならないという事だけ、どうにか思い出せた。

けれど今の俺には、何もできないのだという事も。

「叫ぼうとしても、声は出ない。けれど俺は叫ぼうとし続けた。

誰かの名を。

誰の名だろう。

大切な誰かの名。

愛する人。

「――！」

俺は彼女を救わなくてはならない。

何よりも大切な彼女を。その無垢な笑みを。

そう考え続ける事で、俺はどうにか意識を保っていた。

そして待ち続けるしかなかった。



今の俺を、誰かがここから解放してくれる事を。  
情けないとは思いながらも。



教団の建造した神は、ネロを取り込むと同時に轟音を上げながら上空へと飛び立っていった。トリッシュの内偵でもその詳細を掴む事ができなかった神の存在であったが、こうしてその姿を目の当たりにしてみれば、すぐに理解できる。

巨大な人型兵器。

ただそれだけの事だ。

上昇していく神の姿を見上げながら、ダンテはかつて相對した魔帝の事を思い出していた。魔帝モンドゥス。

強大過ぎる力を持つが故に、モンドゥスはこの世界に実体を伴って顕現する事ができなかった。そのモンドゥスが依代として選んだのは神を象ったと思しき巨大な石像である。今ダンテが目になっている神と、その時のモンドゥスの姿とが、どこか重なって見えた。

「どうも、あくどい連中ってのは考える事が似てるらしいな」

そう呟くと、遙か上空の神の背に、巨大な翼状の器官が展開する。

それを見て、ダンテは思わず噴き出していた。

「おい、見ろよ！ 羽が生えた！ 羽が！」

隣にいるトリッシュにそう語りかけると、トリッシュはややうんざりした様子で溜め息を吐いてみせた。

「……悪趣味なデザインとしか言いようがないわ」

元を辿ればモンドゥスに生み出され、部下として仕えていた彼女にとってさえ、神のデザインはおよそ麗しいものとは思えぬものらしかった。

神の行方を目で追ううち、ダンテの背後から微かな、くぐもった呻き声が耳に届く。

視線を向けると、先程教皇の手によって深手を負ったクレドという男が、意識を取り戻していた。

ダンテは彼の元に歩み寄ると、飛翔する神の方を親指で示しながら問うた。

「おい、あれはどこに向かっている？ 完成したとか何とかぬかしてたが……」

敢えてクレドの身体の安否を気遣うような言葉は吐かなかった。どう労わったところで、彼がもう助からぬ事をダンテは察していた。クレドもまた、敵対する己に同情は掛けられたくはあるまいとも思った。この男は誇り高い男だという事は付まいで分かる。

クレドは胸の傷を押さえながら、震える身体で瓦礫を支えにして立ち上がると、ダンテとトリッシュに視線を送り、荒い息のまま答えた。

「教団の目的は……理想郷の建設だ……選ばれし者だけが住まえる、神の楽園……。今の腐敗した世界を根本から変えるためには……そうせねばならないと……。そして、新たな世界の創造のためには、まず大いなる混沌をもつて、この世界を破壊せねばならない……」

クレドの言葉を受けて、トリッシュュは得心したように、「だから閻魔刀が必要だったのね……」

と呟いた。

閻魔刀。スバーダが魔界を封じするために用いた魔剣。人と魔を分かつ刀。そしてそれは、この地に存在する地獄門を解放するための鍵でもある。

教団が閻魔刀を執拗に求めていたのは、即ち、閻魔刀によって封印されている地獄門を開放するためだろう。その結果、無数の悪魔がこちら側に渡ってくる事になる。

クレドのいう混沌とはそれだ。

悪魔の蔓延の荒廃した世界。

そしてそれを救う救世主の役目を、教団は演じようとしているのだろう。

「お定まりのバターンだな」

ダンテは肩を竦めた。

かつて似たような事件に出くわした事がある。魔に魅入られた人間が生み出した巨大な塔。その塔は、魔界と人界を繋ぐトンネルのような役割を果たしていた。あの時もまた、悪魔の力

を欲し、神にならんとした男が封印を解いてしまったのだ。

だが所詮は人の生み出した装置だ。封印が解かれても大惨事に至る事はなかったし、魔界との道が開かれていたのも僅かな時の間に過ぎなかった。

その経験があるからこそ、ダンテは特に教団の目的を聞いたところで動じる事もない。ただ、純粹な欲望よりも、救済や救世といった建前に包まれている分、教団のやろうとしている事が方々が悪いように思った。それだけの事だった。

クレドはそんなダンテを見て、何故か小さく微笑んだ。

「神の力は強大だ……しかし、もし、あの神を止められる存在がいるとしたら……それは貴方なのだろうな……魔剣士スバーダの息子、ダンテ……」

それはあまりに不器用な挑発だった。苦笑したトリッシュュは、やれやれといった様子でダンテに視線を送る。

「期待されてるみたいよ」

「……らしいな」

人に何かを命じられる事を、ダンテは好まない。それとなく仕向けられる事も同じだ。自分でやろうと思っていた事でも、人に命じられればやる気を削がれてしまった、という経験も一度や二度ではなかった。

だがそんなダンテでも、クレドのその言葉を否定する気にはならなかった。

おそらくは誇り高いであろうこの男が、死に瀕している際に、必死でダンテの事を煽ろうとしている。ダンテはその健気を、どこか尊く感じた。

その行動は、あまりに人間らしすぎた。

この男は、悪魔の力を手にしながらも、人の心を失っていない。その事実だけで、ダンテはクレドの言葉を素直に受け止める事ができた。

何度も咳き込み血を吐くクレドを、ダンテは見つめていた。もはや立っている事すら危うい状態だった。だがそれでも、ダンテはクレドに手を貸さなかつた。クレドもまた、それを請うような素振りすら見せなかつた。

「こんな事を言えた義理ではないのは、理解している……しかし、それでも、頼む……キリエと、ネロを……救ってやって欲しい……もはや私には、それは——」

言い切らぬうちに、クレドは不意にダンテの方に倒れ込んでくる。既に事切れたのだと知つたダンテは、そつとクレドの身体を支えた。

クレドの亡骸が、仄かな白い光に包まれ、儂い泡のように消えていく。

それはまるで天使の最期を思わせるような死に様だった。

悪魔の力を手にした者が、皆そのような死に方を迎えられるわけではない。奇跡のような偶然の産物か、それともクレド自身が望んだが故の結末なのか、ダンテには分からなかつた。

腕に預かつていたクレドの体重が完全に消え失せた事を確認して、ダンテは小さく溜め息を

吐いた。

「遺言じゃ、なおさら聞いてやらないわけにはいかねえ……」

そう呟いて、ダンテはトリッシュと視線を合わせる。トリッシュもまた、同じ気持ちであるようだった。元はと言えば、退屈凌ぎで始めたような仕事だった。それ故に、ダンテにもトリッシュにも、どこかこの仕事に対して侮りのようなものが生まれていたのは事実だ。

悪魔は憎い。それを利用してしようとする人間もまた憎むべき存在だ。

しかしそれに心底腹を立てる程には、もうダンテは若くなかつた。あまりに多くの敵を相手にし過ぎた故だった。

クレドの死に様は、そんなダンテの心を打った。ダンテは、教団が強い憎しみの心をもって狩るべき相手である事を、再認識させられていた。

「少し、やる気が出てきた」

ダンテは小さく微笑み、指を鳴らす。

ダンテの様子を見て自身もまた微笑を浮かべたトリッシュは、

「じゃあ、私は住民の避難をさせるわ」

そう言って歩き出した。

「おい！」

ダンテは思わず、トリッシュを呼び止める。既に最初からの決定事項であるように、役割分

担<sup>お</sup>ざれている事が気に入らなかつたのだ。しかも今回の一件に関して言えば、トリッシュの行動<sup>いさま</sup>が些<sup>ち</sup>か事態<sup>じたい</sup>を混乱<sup>こんらん</sup>させている。

「……何？」

振り返<sup>か</sup>ったトリッシュは小さく首<sup>くび</sup>を傾<sup>か</sup>げた。

「元<sup>もと</sup>はと言えばお前<sup>まへ</sup>がスパーダを持ち出<sup>だ</sup>したりするからこんな事<sup>こと</sup>になつてゐるわけだろ？ それで解決<sup>かいげつ</sup>は俺<sup>おれ</sup>任せ<sup>まかせ</sup>か？」

ダンテがそう告<sup>つ</sup>げると、トリッシュは即座<sup>すくま</sup>に肩<sup>かた</sup>を竦<sup>すく</sup>め、

「じゃあ交代<sup>かいたい</sup>する？ 私は別にそれでもいいけど」

と答<sup>こた</sup>えた。つまりトリッシュが神<sup>かみ</sup>を追<sup>お</sup>い、ダンテが住民<sup>じゅうみん</sup>の避難<sup>ひなん</sup>をさせる、という図式<sup>ずしき</sup>だ。

ほんの僅<sup>わずか</sup>かな時間<sup>じかん</sup>その様<sup>よう</sup>を想像<sup>さうざう</sup>した後<sup>のち</sup>で、ダンテはトリッシュの二<sup>ふた</sup>の句<sup>くご</sup>を固辞<sup>こじ</sup>するように掌<sup>てのひら</sup>を突き出<sup>だ</sup>した。

「いや……やっぱりこっちでいい」

トリッシュは呆<sup>あき</sup>れたように小さく溜<sup>ため</sup>め息<sup>いき</sup>を吐<sup>つ</sup>いた。

「考え<sup>かんが</sup>えもなしにとりあえず否定<sup>ひてい</sup>するその癖<sup>くせ</sup>、直<sup>ただ</sup>した方がいいわよ」

言い残<sup>のこ</sup>して、トリッシュは去<sup>さ</sup>っていく。その背<sup>せ</sup>を見送<sup>みおく</sup>りながら、ダンテは何<sup>なに</sup>となく居心<sup>いこころ</sup>地の悪<sup>あく</sup>さを感じ<sup>か</sup>髪<sup>かみ</sup>を掻<sup>か</sup>き上げた。

まるで子供<sup>こども</sup>扱<sup>あつか</sup>いだ。しかしトリッシュの言う事<sup>こと</sup>も正論<sup>せいろん</sup>ではある。

「まず<sup>まず</sup>は身体<sup>からだ</sup>を動か<sup>か</sup>せて事<sup>こと</sup>だな……」

「まず<sup>まず</sup>は身体<sup>からだ</sup>を動か<sup>か</sup>せて事<sup>こと</sup>だな……」

独<sup>ひとり</sup>り言<sup>い</sup>ちながら、ダンテはトリッシュの向<sup>むか</sup>かう先<sup>さき</sup>とは別<sup>べつ</sup>方向<sup>かうきやう</sup>に歩<sup>あ</sup>き出<sup>だ</sup>した。



## STAGE 00-2



悪魔<sup>あくま</sup>を狩る事を生業<sup>なりわい</sup>とするレディにとって、悪魔についての知識は何よりも重要なものだ。

しかし悪魔は、「一般的には「存在しないもの」として扱われている。そのため悪魔について書かれた文献<sup>ぶんげん</sup>の類<sup>たぐい</sup>は、嘘<sup>うそ</sup>だらけの価値のない文書と見なされているものが多くを占める。そのため、権威ある書物はひとしきり収められている巨大な図書館にすら、そういった本は置かれていない。

レディがその日、足を向けたのは、オカルトめいた様々なグッズを蒐集<sup>しゅうしゅう</sup>する好事家の邸宅<sup>ていたく</sup>だった。既に何件かの心当たりを訪ね、自分の求める情報がない事を確認<sup>かくにん</sup>した上でそこを訪れたのは、その好事家をあまり好ましく思っていないせいだ。

ヨハンという名のその男は、レディの突然<sup>とつぜん</sup>の来訪<sup>らいぼう</sup>を快く迎えてくれた。

しかしその満面<sup>まんめん</sup>の笑みを湛<sup>たな</sup>えた態度からしてレディには不愉快<sup>ふゆかい</sup>なものだという事を、当の本

人は気付いていない。

「それで……今日は何の御用<sup>ごよう</sup>ですか、ミス・レディ？」

応接室にレディを案内した後、青白い骸骨<sup>がいこつ</sup>のような頭を小刻みに震<sup>ふる</sup>わせながら、ヨハンは尋ねてきた。レディは上着のポケットから一枚の紙片<sup>しへん</sup>を取り出し、ヨハンの前に差し出した。それは先日遭遇<sup>うしご</sup>した騎士<sup>きし</sup>達の盾<sup>たて</sup>に刻<sup>き</sup>まれていた紋章<sup>もんじょう</sup>を、記憶<sup>きおく</sup>を頼<sup>たの</sup>りに書き起こしたものだ。

ヨハンはその紙片をひとしきり眺<sup>なが</sup>め、「ほう」「ふん」などと言葉を数回漏<sup>も</sup>らした後、

「勿論<sup>もちろん</sup>知っていますよ」

と言った。しかしそれ以上、答えようとはしない。ヨハンはいつもそうだった。

言葉でその詳しい内容を話さよう促<sup>うなが</sup>したところで、無駄な事だ。それを知っているからこそ、レディは何も言わず、紙片を取り出したのとは反対側のポケットから赤い液体で満たされた小瓶<sup>びん</sup>を取り出してそれをヨハンに向けて放った。

「これは……何ですか？」

ヨハンの問いに、レディは、

「悪魔の血」

と答えた。ヨハンはそれを聞き、苦笑<sup>くすぶ</sup>すると、レディに向けてその瓶を突き返してくる。

「冗談<sup>じょうだん</sup>を……ミス・レディ。私にそれくらいのが分らないとでも？」

そのヨハンの態度に、レディはうんざりしてしまふ。ヨハンに限らず、何かを蒐集する人間

というのは得てして自分の知識をひけらかし、他者よりも自分が優れているという事を誇示したがるものだ。そういう人間の傲慢な態度に、レディはどうしても苛立ちを覚えてしまう。父親の事を思い出してしまふからかもしれない、と一瞬そう考え、レディはすぐに思考を中断した。父親の事など、もはや思い出したくもない過去の一部に過ぎない。

レディが予想していた通り、ヨハンは滔々と自らの知識を語り始めた。

「悪魔の身体に流れる血は、液状のままでも保持するのは不可能だという事くらい知っていますよ。確かに悪魔には血が流れているものも存在する。しかしそれが肉体の外に排出された後に液体であるのはほんの一瞬の事で、すぐに蒸発してしまふ。仮に蒸発を免れたとしても、そのまま水晶のような結晶に変化するのです。そちらの結晶の方なら、うちにも幾つかコレクションがありますからね……」

そんな事を偉そうに話しながらもその実、ヨハンが悪魔と出会った事すらもない人間だと知っているだけに、レディはヨハンをその場で殴り倒したいような衝動に駆られた。

ヨハンがレディが悪魔を狩る事を生業としてしている人間だと知ってはいる。しかしおそろくそれを信じてはいない。そんな嘘の肩書きを自称して自分より優位に立ちたいのだからとしか考えていないだろう。だからレディに対しても隙を見付けては悪魔に関する知識をひけらかさそうとする。自分の方が上だろうと言わんばかりにだ。

なおも喋り続けようとするヨハンを手で制し、レディは小瓶を手を立ち上がった。

「そう……いらぬのならいいわ」

あっさり引き上げようとするレディに、ヨハンの表情が一変した。それを見て、レディは内心ほくそ笑み、

「それを知っている貴方だからこそ、コレの価値を分かってくれると思っただけ」と呟いた。

そのままレディが部屋を去ろうとすると、ヨハンは腰を浮かせた。

「ちょっと……待ってくれ！ それは……本物なのか？ しかし……どうやって……」

まったく面倒な男だ、とレディは思う。悪魔を研究しながらもその実悪魔に出会った事などないから、そんな理屈をいちいち説明しなくてはならない。

「石像に穢れた血を注ぐ事で悪魔を生み出す術があるのは知ってる？」

言葉を失ったヨハンに、レディは説明を続けた。特殊な条件下で石像に穢れた血を注ぎ、儀式を行う事で、その石像と血液が混ざり合い、液状となって悪魔化する。ブラッドゴイルと呼ばれるその悪魔は熱に弱く、火などに触れる事で身体が元の石像に戻ってしまうのだが、レディが持参した小瓶に詰められているのは、そのブラッドゴイルの肉体の一部である、と。

「まあ、元は石像なんだから、悪魔の血という表現には語弊があるかもしれないけど……試しに火にくべてみたら？ 石に戻るから」

レディがそう提案すると、ヨハン是小瓶とレディの顔とを見比べ、

「そ、そんな事をしたら二度と戻らないのでは……?」

と不安げな表情を見せた。さっさと信じて目的の情報を教えればいいのに、と思いつつ、レディが頭を振った。

「時間が経てばまた血液状に戻るわ」

それを聞いたヨハンは慌てた様子で小瓶を火にかける準備をし始め、結局レディは求める情報を得るためにそれを黙って見守っていかなくてはならなかった。小瓶の中身が本物だと分かるまでヨハンが何も話さないつもりなのは明白だった。

結局は、ヨハンのその「実験」は十分程で終わった。小瓶の中身がレディの言う通りのものであると知ると、ヨハンは途端に態度を急変させ、

「素晴らしい! これは素敵なものを下さった!」

と、レディの手を取り目を潤ませる始末であった。レディにしてみれば、それ程大層な品ではない。たまたま仕事で遭遇したブラッドゴイルを石化させ、その身体の一部を削り取っただけのものだ。ヨハンとの交渉に使えろと思いついたのだが、ここまで感動させてしまうとは思っていなかった。

「大事に保管させて頂くよ……これでまた私のコレクションが充実する……」

いそいそと小瓶を自分のコレクションの保管室に持っていくヨハンが戻ってくるのを、レディはまた見守っていなくてはならなかった。

本当に面倒くさい男だ、とレディは思う。

しかしヨハンの蒐集する品の中には確かに価値のある逸品も存在するのである。レディ自身に蒐集癖がないからこそ、ヨハンのような存在は貴重ではあった。必要な時に必要な情報だけを与えてくれるからだ。ただヨハンの場合、見返りを要求する面と、生半可な悪魔の知識をさきりに披露したところが煩わしい。だからこそ、件の紋章について調べるのに、ヨハンを訪ねるのは敬遠していたのだ。

暫くして、保管室から戻ってきたヨハンは、一冊の分厚い古書を手にしていた。

「先程の紋章の件ですがね……」

言いながら、ヨハンはレディに古書の表紙を示す。そこには確かに、レディが目にした紋章と同じものが刻印されていた。

「……その本は、何?」

掠れてしまっている表題を読もうとレディは目を細めたが、どうやら自分には理解できぬ文字で書かれているらしいとしか分からない。

ヨハンはその古書をパラパラとめくり始め、

「これは魔剣教団の教典です」

と言った。

「……魔剣教団?」

「フォルトトゥナという小都市のみで確認されている宗教でして……魔剣士スパーダを神として崇めています。魔剣士スパーダが魔界を封印した後、彼の地で領主を務めていた、という伝説が残っているのです。おそらくはそれを背景に宗教化していったのではないかと」

ヨハンのその解説を聞き、レディは何故自分があの紋章に見覚えがあったのかを理解していた。

おそらくは幼い頃、父親の書齋で目にしたのだ。

レディの父親は、いつ頃からか悪魔に魅了され、悪魔に関する研究を熱心に行っており、殊に、魔界を封印人間を救ったという魔剣士スパーダに関しては重点的に調べていた。あの男の書齋なら、その紋章が載っている書物があってもおかしくはないだろう。

その書齋も今はもうなく、父親も既にこの世にはいないが、その事をあれこれ考えたくはなかった。

レディはひとまず自分の中のひとつの疑問が晴れた事に納得をし、ヨハンに礼を告げた。

「ありがとうございます……ところで、その宗教があったのっていつ頃の話？」

古びた教典に書かれているのは、おそらく中世の古代文字だろう事から、四、五百年前くらいものだろうと考えながらレディがそう尋ねると、ヨハンはすぐさま答える。

「この教典は中世の物ですから古びていますが、魔剣教団そのものはまだ存在していますよ」

レディは一瞬、言葉を失った。

魔剣教団の話が聞かされた時点で、あの鎧騎士の正体は魔術的な技法で生み出した鎧であろうとレディは内心見当を付けていた。一般的な製鉄技術だけではあの鎧の強度は生み出せないだろうが、そこに魔術が絡めば話は別だ。スパーダに関連する土地であれば、いわゆる錬金術じみた技法がある時期存在していたとしても何ら不思議はない。

しかし言われてみれば数百年前の鎧にしては真新しい質感だった。

錬金術の類は、もはや現代では失われた技術だという先入観に捉われていたが、必ずしもそう決め付ける理由はない。現に、レディの父親は古代の技術を復活させ、魔界への道を開こうとした。

「今も、存在している……?」

魔剣教団が今なお存在しているのだとしたら、あの鎧騎士を生み出したのが現在の教団であるという可能性が出てくる。過去の、オカルト的な思想が世界を支配していた時代ではなく、科学隆盛の現代において、あのような鎧を生み出す理由は何か。

「現在の教典も取り寄せる事は可能ですよ。いくつかつテはありますので……手配しましょうか?」

いつもなら言い出さないような事をヨハンは口にした。よほどレディの持参した土産が気に入ったものらしい。

「ええ。お願いできる?」



自分の予想以上に、これは大きな思惑が絡んでいるのかもしれない。  
これまでの経験から、レディはそう感じていた。



## STAGE 13



無事、神の完全なる起動を終了し終えたアグナスは、神胎内を移動すると教皇サンクトゥスの元に向かった。サンクトゥスがいるのは神臓部と呼ばれる、神を操るための中枢機関室である。神にある程度自律行動をさせる事は可能なのだが、やはり複雑な挙動を取らせるためには操作者の存在は欠かせない。それを考慮した上で、アグナスは設計段階から神の内部に神臓部を設けていた。

神臓部を訪れたアグナスは、そこで初めて、帰天したサンクトゥスの真の姿を目にした。

それはアグナスの想像とは異なり、極めて人間に近い体躯であった。と言うより、肉体のベースはサンクトゥスそのものでしかない。そのサンクトゥスに、巨大な角と翼が生えている。

様々な人間を帰天させ、悪魔の力と融合させてきたアグナスにとって、サンクトゥスのその姿は拍子抜けする程、無力な存在に見えた。帰天そのものは失敗したわけではない。しかしア

グナスやクレドに比べれば、それはあまりに元の姿と変わり映えのせぬものだ。帰天後の姿に影響を与えるのはその素体となった人間の精神性である事をアグナスは知っている。それ故に、サンクトゥスの姿を見て、落胆にも似た感情が湧き起こった。

教皇は既に老齢だ。帰天にしろうじて耐えられたものの、うまく悪魔の力を取り込み発現させる事ができなかったのではないか——そんな疑問が頭をよぎりさえた。

「……御苦労だったな、アグナス」

アグナスの姿を見たサンクトゥスは、小さく微笑みそう告げた。アグナスはその言葉に、サンクトゥスの前に跪く。

そのアグナスに、サンクトゥスはゆっくりと歩を踏み出し、近付き始めた。

アグナスはそこでようやく、自分の身体が微かに震えている事を知った。だがその理由が分からず、困惑するよりない。

「どうした……もうじき我らの夢が叶うのだ……何を怯えている……？」

サンクトゥスのその言葉に、アグナスは自分の身体を震わせるものが恐怖に似た感情であるのに気付かされた。しかしその恐怖は何に対する恐怖だというのか。自分は何に怯えているのか。

サンクトゥスが、そっとアグナスの肩に触れる。

アグナスは思わずサンクトゥスを見上げていた。肉体が触れて、初めてアグナスは、サンク

トゥスの肉体に凄まじい魔力が充ち満ちている事を理解したのだった。そしてそれを感じ取っていたからこそ、自分の肉体が反応し、恐怖に似た感情を生み出していたのだ。

アグナスは、ほんの僅かな瞬間だとしても、教皇の力に疑問を抱いた自分を恥じた。

帰天には素体の人間性が左右する。

クレドはおそらく、強く健全なる肉体を望んだが故にあのような姿になった。対するに、サンクトゥスは強靱な肉体など求めはしなかったのだ。

教皇は、魔力だけを求めた。

ただひたすらに、絶大なる魔力だけを。

それ故に、人の姿を多く残したままなのだ。

こうして真の姿のサンクトゥスを間近に感じているからこそ、アグナスにはそれが理解できた。同時に、その魔力の偉大さも。

アグナスは、決して敬虔な信徒ではない。魔剣士スパーダを心の底から崇めた事など一度たりとてなかった。アグナスにとって重要なのは、悪魔についての研究を重ねる事、ただそれだけであった。サンクトゥスにつき従ってきたのも、クレドのようにその理念に純粹に共感したからではない。自身の欲望を満たすために他ならない。

だがそのアグナスに、今や純粹なる信仰心が湧き起こりつつあった。サンクトゥスの持つ絶大なる魔力。圧倒的で純粹な力。それに対する畏敬の念が。

「教皇様……！」

いや、教皇などという呼び名は、もはや適さないかもしれない。そう考え、アグナスは次の言葉を発する前にその口を閉じた。

もはやサンクトゥスは魔剣教団などという小さな組織の長ではないのだ。

魔界すらも含めたこの世界を統べるべき存在。ならばそれに相応しい呼び名でなくてはならぬ。

「教皇様……いや、魔皇様……！！ 何なりと次の御命令を……！！」

アグナスの言葉に、サンクトゥスが再度、小さく微笑んだ。自分が微かに抱いた疑念など、サンクトゥスには承知の上なのかもしれない、とアグナスは思った。

サンクトゥスがゆっくりと手をかざすと、神臓部の壁面から闇魔刀が出現し、それはゆっくりと飛来してサンクトゥスの手の中に収まる。サンクトゥスは闇魔刀をアグナスの方に差し出しながら、口を開いた。

「地獄門の封印を解くのだ、アグナス……墮落した世界を大いなる混沌で包むために……」

サンクトゥスから恭しく闇魔刀を受け取ると、アグナスは小さく一礼した。

地獄門を解放するための装置の在処は既に分かっている。

そこに赴くのもさしたる手間ではない。

しかしアグナスには、ひとつの懸念があった。

「魔皇様……ダンテの事はいかがするおつもりで……？」

アグナスの問いに、サンクトゥスは目を細め、何かを思案している様子であった。

「神が完成した今、ダンテを始末するのは容易い事ではありますが……やはり計画の方を優先なさいますか？」

アグナスはそう続けた。ダンテを放っておけば何かと煩わしい事になるのは明白だ。しかし計画の前にダンテを追うべきかどうか……その点に関してはアグナスには判断し切れぬ問題だった。

サンクトゥスは答えた。

「まずは神の降臨を住民に知らせねばなるまい……」

そしてその上で、ダンテに全ての罪を負わせ、ダンテとの決着を付ける、と。

「確かに……その方がより計画を美しく盛り立てるでしょう」

だがダンテの力が決して侮れぬものである事はアグナスも承知している。おとなしくまっすぐ神に向かつて来れば良いが、アグナスには理解できぬ行動パターンを持ち主であるだけに、放置しておく事に些かの不安があった。

「しかしもし私が先にダンテと接触した場合、ダンテを始末しても宜しいでしょうか？」

アグナスはさらにサンクトゥスに問うた。

ダンテの力は強大だ。あの男を捕らえる事が難しいと判断したからこそ、サンクトゥスもネ

口を捕らえる方法を選んだのだ。  
だがアグナスには勝算があった。

数時間前の自分なら、そこまでの自信は持ち得なかっただろうが、今の自分の手には閻魔刀がある。閻魔刀があれば地獄門を解放できる。それが大きいのだ。その要素があれば、自分の能力ならダンテとも対等に戦えるはずだ。

アグナスはそう考えていた。そしてその考えを見透かしているように、サンクトゥスは、  
「かまわぬ……その時は他の悪魔に罪を被せれば良からう」  
そう許しを出してくれた。

クレド亡き今、自分はサンクトゥスの絶対的な信を得ている。  
その自負が、アグナスにさらなる自信を与えていた。

「それでは……全ては魔皇様の御心のままに……」  
アグナスの言葉に、サンクトゥスは三度目の笑みを浮かべた。



教団本部を後にしたダンテは、すぐにその足を止め、空を見上げた。

来る時には晴れ渡っていたはずの空が、黒い雲に覆われていた。何気なく周囲を振り返って

みると、黒雲に覆われているのは自分の上空の一部だけで、遠方の空はやはり晴れ渡ったままの状態だった。

「妙な天気だな……」

雨が降るといふ様子もない。ダンテは数度、鼻を鳴らした。

「それにこの臭い……」

何度となく悪魔との戦いを繰り広げてきたからこそ分かる悪魔特有の臭いが、あたりに漂っている。臭いの元を辿るため、ダンテが神経を集中させようとした直後、臭いの主自らが遠方で金属が擦れ合わさるような不快な叫び声を上げた。

目をやると、巨大な橋の欄干に、一匹の悪魔が立っている。見た事もない種類の悪魔だった。トカゲのような質感の皮膚は、かつて出会った事のあるブレイドと呼ばれる悪魔のそれに近い。しかし頭部の形状はまるで似ていなかった。

「トカゲちゃんの親戚か何かか……?」

いずれにせよ、出会った以上は狩るだけだ。

そう思いその悪魔に近付こうと足を上げた直後、悪魔が再度咆哮を上げる。同時に、黒雲から放たれた稲妻が、悪魔を打った。

つんぎくような激音と共に、落雷の衝撃で欄干が爆ぜ、濛々と白煙を上げる。

気にせず歩を進めようとしていたダンテだったが、白煙の晴れた後、欄干の上から悪魔の姿

が消えている事に気付くと、歩みを止めざるを得なかった。

上空の黒雲が、呻くような低い音を放ち続けている。

そして何度か、ダンテの周囲に稲妻が走った。

初めは遠くの方で。

そして次第にダンテに近付くように。

ダンテはその様子を、黙って眺めながら、鼻を突く悪魔の臭いが濃くなっているのを感じていた。

そして数度目、ダンテの背後に落雷した時、ダンテはその気配をしつかりと捉えた。

「そんな電撃作戦みたいな移動しかできねエのか？ 近所の連中から苦情が出るだろ、そんなんじや……」

振り向かぬまま、ダンテはそう呟いた。

背後にいるのは、欄干の上にいた悪魔だ。

この悪魔はおそらく、体を雷光に変えて瞬時に移動する事ができる。何度となくダンテの周囲で見られた落雷は、その移動の足跡だろう。一見すれば便利そうな能力だが、雷光に変じる際に激しい音が出るし、あまり長距離には移動できないものらしい。

ダンテは長年の経験から、即座に分析していた。

悪魔がダンテの背後で吼える。

ダンテはゆっくりと身体を悪魔の方に向けながら、

「やるか、ブリッツ野郎……近所迷惑にならない程度のマナーぐらいは教えてやる」

そう言って手招きした。

それを受け、ブリッツが爪を振り上げる。

背中に担いでいる大剣——リベリオンの柄を手に取り、ダンテはその爪の一撃を受け止めた。

と同時に、剣を通じて電流が、ダンテの身体を走り抜ける。

「お……っと！」

すぐさまブリッツの身体を押し離し、ダンテは飛び退いた。

「なるほど……常にビリビリしてやがるわけか……」

ブリッツがそのダンテの言葉に反応して再度、飛びかかってくる。

剣で斬りかかっても、ブリッツの身体が帯電している以上、こちらもいくらかダメージを負う結果になる。無難に仕留めるには銃を使うべきだろう。

そう考え、ダンテはブリッツの攻撃を跳躍して回避し、距離を取った。

着地と同時にエボニーとアイボリーと名付けている。二丁の拳銃を抜く。

ブリッツに銃口を向けた直後、ダンテはブリッツの様子がおかしい事に気付いた。

ダンテが真正面にいるにも拘わらず、ブリッツはダンテの姿が見えていないかのように周囲の様子を窺っているのだ。

最初は、他に何者かの気配がするのかと、ダンテも周囲を振り返った。しかし誰でもない。いればダンテが気付かぬはずもない。そのうちブリッツは、最初に見せた電撃移動が嘘のように、のろのろとした動きで這うように移動し始めた。

悪魔には様々な種類がいる。ダンテもこれまでの人生の中で無数の悪魔と出会い、それを退治してきた。傍目には目や鼻のような器官がなくとも、実際には何がしかの器官が視覚を生み出しているという類の悪魔も目にきてきている。

そんな事を考えながら、ダンテは這っているブリッツを眺めた。

その頭部には、目らしき器官があるようには見えない。

そして今のブリッツの行動からしても、確実に、ブリッツは見た目通り視覚を有していない悪魔という事なのだろう。悪魔としては珍しいタイプではある。

「進化してんのか退化してんのかよく分かんねエ奴だな……」

呆れてダンテが小さく呟くと、その声に反応してブリッツが顔を上げる。

「ま、耳はいいらしいが！」

声を追うように飛び込んでくるブリッツに照準を合わせ直したダンテは、引鉄にかけた指に力を込めた。

「仕事の時間だぜ、相棒！」

二丁の銃にそう呼びかけながら、ダンテは凄まじい速さで幾度となく引鉄を引いた。即座に銃口から矢継ぎ早に弾丸が射出される。

エポニーとアイポリーで悪魔を相手にする時、ダンテは時折一人の女性の事を思い出す。

ニールリゴールドスタインという名のその女性は、稀代の名工と呼ばれた銃職人だった。

「普通の人間はね、拳銃をマシンガンのように乱射したりはしないんだよ」

彼女はそう言って苦笑したものだ。

そんな彼女がダンテのために設計してくれたのがエポニーとアイポリー、二丁の銃だ。

秒間十数発の連射にも耐え得る強靱な銃身など、おそらくはダンテ以外には無用の長物かもしれない。それだけの速さでハンドガンの引鉄を引ける人間など、この世には存在しない。悪魔の血を引くダンテだからこそ可能な芸当だ。

そしてその芸当を可能にするために生み出された銃こそが、エポニーとアイポリーだった。

ニールリゴールドスタインが設計し、ダンテ自身が組み上げたその銃は、ダンテにとって最も愛着のある武器であり、信頼できる相棒でもある。

エポニーとアイポリーから瞬時に放たれた十数発の銃弾は、ブリッツを怯ませるに充分な威力を有していた。しかしブリッツの身体は決して小さくはない。エポニーとアイポリーだけで仕留めるのは骨が折れる相手なのも事実だった。

ダンテはよろめくブリッツの前に、エボニーとアイボリーを納め、コートの内側に手を差し込んだ。コートから吊るすようにして携帯しているもうひとつの銃器に手を伸ばす。

コヨーテ・Aと名付けたばかりの大型の散弾銃。

「新しい兄弟の初仕事といくか……」

ダンテはコヨーテ・Aにそう呟いて、その銃身をブリッツに向けた。

元来、ダンテはエボニーとアイボリー以外の銃器を持ち歩かない。エボニーとアイボリーさえあれば、殆どの悪魔は駆逐できる事を知っているからだ。仮にそれだけでは通用しないとしても、大剣リベリオンも持ち歩いているから事足りる。仕事の際に現地調達で他の銃器を使う事は往々にしてあるが、わざわざ持ち歩こうとは思わない。

だが今回の仕事にはコヨーテ・Aを持参していた。

とは言え、特に深い理由があるわけではない。

フォルトウナを訪れる一カ月ほど前、暇を持って余っていたダンテはガンシヨップでシヨットガンを購入し、それを対悪魔用に改良するという作業を戯れに行っていた。そしてそれが完成したのがたまたま今回の仕事の直前だった。それだけの事だ。

「貴方、時々そうやって思い付きで行動するわね。コヨーテみたい」

改造のためにシヨットガンをいじりまわしている時、トリッシュは呆れたようにダンテにそう言った。

「コヨーテ？」

何故そこで犬のような獣の名が出てくるのかダンテは分からず、トリッシュに問い返した。

「知らないの？ インディアンのお話よ。コヨーテは気まぐれでいたずら者なの」

それでダンテは、完成したシヨットガンにコヨーテ・Aと名付けたのだった。気まぐれの中の気まぐれで生み出された銃。次の仕事で使うかどうかさえ、ダンテ自身分からない。

呻くブリッツにゆっくりと歩き距離を詰め、ダンテはコヨーテ・Aの弾丸を放った。

巨大なシェルに詰め込まれた細かい散弾が、拡散し切る前にブリッツの身体に全弾命中すると、衝撃でブリッツの身体が大きく仰け反る。それを見て、ダンテは小さく笑った。

並のシヨットガンによる射撃でも、至近距離で放たれば大概の悪魔は衝撃に耐え切れずに吹き飛んでしまう。対悪魔用に改造を施したコヨーテ・Aならば尚更だ。

そういう意味で、体勢を崩しただけに終わったブリッツの強度は相当なものだ。こういう相手がいるからこそ、コヨーテ・Aをわざわざ改造し作り上げた甲斐がある。そこらに落ちていくようなシヨットガンでは、ダメーじすら与えられなかった可能性もあるからだ。

「じゃ、もう一発いっとくか？」

アクションスターのように片手で空のシェルを排出し、指先でぐるりとコヨーテ・Aの銃身を回転させると、ダンテは続けざまにもう一発、コヨーテ・Aにより射撃を敢行した。だがそれでもブリッツは体を震わせるのみで吹き飛んだりはない。体表を覆う電流が、弾丸の威力

を殺しているのかもしれない。

三度目の射撃の前に、ブリッツは唐突に叫び声を上げながら雷光へと変じる。

目では追えぬ速度でそのままダンテの周囲を慌ただしく移動し始めたブリッツに、ダンテは溜め息を吐いた。

「忙しない野郎だな……」

呟いて、ダンテはコヨーテ・Aを構えた。

高速度で移動する今の状態に銃弾を当てる事は難しいが、それも普通の銃を、普通に撃てば、の話だ。

「ちよっと落ち着けよ！」

ダンテはそう言いながら僅かに腰を落とし、コヨーテ・Aをヌンチャクと呼ばれる武器のように振り回した。そしてその一動作の間に射撃と空になったシエルの排出とを数回繰り返す。

ファイアワークスとダンテが呼んでいる射撃技術だ。正確に狙いを付けず、ショットガンの散弾を自分の周囲にバラ撒く。本来は多勢の悪魔に取り囲まれた際に使う技だが、今のように相手が速過ぎて目標が定まらない時に使えば、少なくともどれかは当たってくれる。

その目論見通り、いくつかの散弾が命中したらしいブリッツは、叫び声を上げながら実体を現し、地面を転がった。高速度での移動中に弾丸を受ければその衝撃は倍加する。至近距離での射撃にも怯まなかったブリッツにしてみれば、何が起こったか理解できないだろう。

地面に這うようにもかくブリッツを見ると、体色が変化しており、パタタように息を荒らしていた。

「今ならブッタ斬っても平気そうだな？」

コヨーテ・Aをコートの内側に戻し、ダンテはゆっくりとリベリオンを手にして切っ先をブリッツに突き付けた。しかしすぐにそれを引いてしまう。

「でもやっぱブリッツときたらムカつくし、やめとこう」

呟いて、ダンテはブリッツと離れるように飛び退いた。着地と同時に腰を落とし、リベリオンを逆手に持ち替え、構える。そしてそのまま柄を握る右手に力を込めた。

ダンテはこれまで無数の悪魔と対峙してきた。その中で様々な武器を用いた。エボニーとアイポリーしかり、現地で調達したショットガンしかり、或いは魔具と総称される、魔力の宿った武器を使った事も一度や二度ではない。素手で戦った事もある。

しかしやはりダンテにとって、自分もともと信じられる武器は、剣であった。

何よりも最初に手に取った武器だからかもしれない。

幼い頃、ダンテが父スバーダから最初に習ったのは、剣の扱い方だった。戦うための技。自分の愛する者を守るための力。その象徴は、剣なのだ。

どれだけ年月が経とうとも、無数の悪魔を狩り続けても。

だからこそダンテは様々な剣技を習得している。父から習った技もあれば、自分で生み出し



た技もある。

無論、相手に触れずに攻撃する技も。

ダンテは一步大きく踏み出しながら、引き絞るように構えていたリベリオンを振り上げた。リベリオンに込められた魔力と凄まじい速度の剣風とが絡み合い、巨大な衝撃波を形成する。「突っ走れ！」

ダンテの叫びに呼応するように、その衝撃波が地面を駆け抜け、今なお苦しそうに呻いているブリッツを襲った。

空気の裂ける激しい音と共に、ブリッツの巨体が上空に舞い上がる。

「もう一発！」

返す刀でダンテはさらにもう一迅の衝撃波を撃ち出し、

「いや、二発だ！」

さらにもう一撃を付け加えた。今度は舞い上げられたブリッツ目掛けて、二つの衝撃波が宙を駆け走る。その二撃が重なるようにブリッツに命中すると、ブリッツは大きく吹き飛んだ。

その結果に満足の笑みを浮かべ、ダンテはリベリオンを背中に担ぎ直す。

だが上空から落下し地面に叩き付けられたブリッツがよろよろと起き上がったのを見て、ダンテは我が目を疑っていた。

「想像以上にタフだな……」

ブリッツは、体を仰け反らせながら、空気を震わせる音量の咆哮を上げた。

その体色が瞬く間に赤く変色していくのを見て、ダンテは顔をしかめる。

「嫌な予感だ……前にも見た事あるぜ、こういう奴……」

ダンテがぼやくと、ブリッツは突然、雷光に変じながらダンテ目掛けての突進を開始した。跳躍してそれをかわしたが、すぐさまブリッツは上空のダンテに狙いを修正してくる。

ただの体当たりなら、それ程焦る必要はない。たとえ食らってしまったとしても、さしたるダメージがないのは分かり切っている。

だがブリッツの唐突な豹変、体色の変化。この二つはダンテに不安を抱かせるには充分なものだった。かつて影のような悪魔と対峙した際に、その悪魔が似たような変化をした事を、ダンテは覚えていた。まるで開き直ったかのような攻撃の果てに、その悪魔はダンテを捕らえて自爆しようとしたのだ。ブリッツがやろうとしているのが同じような行動だとすると、その一撃を受けるのはあまり好ましくはない。人間に比べれば強靱な肉体を持つダンテとて、不死の存在というわけではない。

「面倒くせエ……」

もはやブリッツの突進が眼前に迫っていた。ダンテは両脚に意識を集中させ、魔力を伝達させると、空中に魔法陣を思わせるようなデザインの足場を形成していた。それを蹴り付ける事で身体を移動させ、ブリッツの攻撃をかろうじて回避する。

「そのまま寝てな」

自分を掠めるようにして飛んでいったブリッツに向けて、エボニーとアイボリーを抜いたダンテは無数の弾丸を撃ち放った。

弾丸を受けながらも地面に着地したブリッツに、同じく着地したダンテはさらなる銃撃を加えようと引鉄にかけた指に力を込めようとしていた。

その直後、ブリッツは苦しそうにもがき始め、不快な叫び声を上げた。

何事かと思う間もなく、ブリッツの巨体が轟音と共に爆ぜたのを見て、ダンテは小さく息を吐いていた。

「やっぱ爆発しやがった……」

手負いの獣は恐ろしい、とよく言うが、死を覚悟した悪魔ほど厄介な代物はない。手負いの獣が恐ろしいのは、生きようとするからだ。生きるために自分の力を最大限に發揮しようとする。だから恐ろしい。だが悪魔の恐ろしさはそれとは種類が根本的に異なる。

悪魔が根底に持つ本能は「生」ではないからだ。

悪魔の本能は破壊。形ある物を破壊し、生ある物を殺める行為。それが悪魔の本質なのだ。だからこそ、死を覚悟した悪魔には十二分の注意を払わなくてはならない。

自らの命の残り火全てを一気に燃焼させて相手を破壊しようとする。ブリッツの爆発はまさにその類の行動だ。敢えなく空中で四散してしまっただが、おそらくあの爆発をまともに受けられ

ばダンテとて無事ではすまなかっただろう。

「しかし、余計な時間食っちゃった……」

自らの目的を遂行するために、ダンテは歩き出した。



## STAGE 00-3



魔剣教団の存在を知った後、レディはいくつかの依頼を受け、仕事に赴いた。

悪魔退治の依頼もあれば、魔具の回収といった仕事もあった。

しかしそのどれもが失敗に終わった。例の鎧騎士達が、毎度のように現れたためだった。

その中で、レディはいくつかの確証を持っていた。

ひとつは、鎧騎士達は何らかの理由で悪魔を狩っている。そしてその死骸を持ち帰っているという事。彼らは魔具も蒐集しているらしいという事。

自分が狩るべき相手を連れ去られ、自分が回収するべき魔具を奪い去られれば、嫌でも見当は付く。

そしてもうひとつは、レディには興味がないらしいという事だ。彼らはレディが攻撃を加えれば応戦はしてくるが、何もしなければレディを襲ってくる事もない。まるでその場に何もい

ないかのように自分達の目的を遂げて去っていく。

つまりただの人間には興味がないという事だ。

悪魔、あるいは悪魔の力を有したもの。

それだけに興味を示し、それらを何処へかを持ち去っていく。

問題なのは、何故そんな事を繰り返しているのかという事だ。

そこが今ひとつ、よく分からない。

そもそもあの鎧騎士の素性もまだはつきりとはしていないのだ。魔剣教団という組織が関わっているらしいというだけで。

それ以上の事を調べるには、やはりフォルトゥナという街に赴く必要があるのだろう。

しかしレディはそれをする事にあまり乗り気ではなかった。

自分の仕事を邪魔されているという事実自体は由々しき問題だった。このまま依頼の失敗が続けば、自分のハンターとしての資質を問われる事態にも発展しかねない。

だからと言って、わざわざ自費を投じてフォルトゥナに行くというのが、彼女にとっては面倒でならないのだ。それなりに金もかかるし、行ったところで何ひとつ解決しないという可能性もゼロではない。

それに、あの鎧騎士達の相手をせねばならないというのが、レディにとっては何より煩わしかった。

レディは主に銃器を武器として用いる。元々体格はいい方ではない彼女が剣や槍などといった得物を使うよりは、その方が効率が良いからだ。一人で多数を相手にする事も多いとあれば尚の事、銃器に頼る面は大きい。

しかしあの鎧騎士達と銃器の相性が悪い。

相手の能力が分かっている以上、効果的な武器を揃える事はできる。しかしそれだつてタダではない。仕事を邪魔されているとは言え、何もせねば自分には危害を加えてこない相手にあれこれ費やして装備を揃えるというのもシヤクな話だ。

「やっぱりアイツを使うしかないか……」

自室のソファで思案した後、レディはそう呟いて立ち上がった。

俗にデビルハンターと呼ばれる、悪魔を狩る事を生業とする人間は、少なからず各所に存在する。基本的に相棒を持たず一人で行動するレディにも、そういった知り合いはいくらかいるが、実力という点でレディが自分以上と認めている者は一人しかない。

ダンテ。

そう呼ばれている男だ。

それが本名なのかどうか、レディは知らない。そう名乗られたからそう呼んでいる。

彼をトニーと呼ぶ人間もいるが、そちらはどうやら偽名らしい。一頃、素性を隠すために使っていたそうだが、真実かどうかは怪しいものだ。

何せ気まぐれな男なのである。理由なく下らない嘘を吐いたりもする。

まるで人間だ。

あんな性格で「悪魔と人間との間に生まれた」というのだから笑ってしまう。

彼と親しくなつてからその話をされたのなら、レディは確実に信じなかつただろう。

レディはダンテが人間ではないという事実を先に知つたのだ。

あれからもうかなりの歳月が経つ。

「本当に腐れ縁だわ……」

バイクに跨りながら、レディはそう独り言ちた。



スラム街の二画に入り、薄汚い路地を抜けた突き当たりには、その事務所は建っている。

「Devil May Cry」と書かれたネオンサインが目印だ。何も知らなければ卑猥な店か何かのようには思つかもしれない。何度となくそのネオンサインを見ているレディでさえ、そう思う事が時折ある。

ノックもせず、木製の巨大な扉を押し開け、事務所の中に足を踏み入れると、ダンテは事務机に足を投げ出し、暢気にピザを食べていた。

またビザだ、とレディは思った。この男は暇さえあればビザを食べているという印象がある。それか酒を飲んでいるか、子供のようサンデーを食べているか……いずれにせよあまり健康的な食生活を送ってはいないだろう事は確かだ。

「何か用か？」

レディを目にしたダンテは、ビザを掲げながら小さく笑った。レディはその傍らに目をやる。「トリッシュ……貴方もいたの」

トリッシュは、ダンテのすぐ横、机の上に腰掛けていた。彼女と知り合ったのは比較的最近の事だが、彼女の素性をレディはよく知らない。分かっているのはダンテの元相棒で、人間ではないらしい、という事ぐらいだ。今は世界のあちこちを回っていると聞いている。

「あら？ いたら悪い？」

心外そうにトリッシュは肩を竦める。彼女もまたダンテに負けず劣らず気まぐれな性質だという事は理解していた。ふらりといなくなって、気が向いたら「Devil May Cry」に戻って来ているのだろう。

「別に」

レディはそう答えた。トリッシュがいたところで、さして気にする事ではない。

「仕事を頼みに来たのよ」

ダンテの眼前に立つと、レディはそう切り出した。その言葉に、ダンテは少し嫌そうな顔を

してみせた。

「気乗りしねエな……」

以前、うまい事言いくるめてタダ働きをさせた事があり、それ以来、レディが仕事を持ってくるとそらいう反応をする。だが悪魔が絡んでいるとなればダンテは絶対に依頼を断らないという事をレディは知っていた。この男は金のために仕事はしていない。悪魔を狩る事を自分の使命のように考えている。それが、魔剣士スパーダの息子である自分の責務だと。

「……魔剣教団って知ってる？」

ひとまず、レディはダンテにそう問うた。ダンテは小首を傾げる。

「魔剣教団？」

「そう。聞いた事はない？ フォルトツナという小都市で信仰されている宗教なんだけど」

宗教、という単語にダンテは肩を竦めた。

「生憎、宗教には縁がなくてな」

そう呟くダンテから視線を逸らせ、レディはトリッシュに目を向けた。トリッシュは何も言わず、小さな笑みを浮かべている。その表情は、「私は知っているけど」という思考を露骨に現していた。それでも口を挟まないのは、おそらくダンテに説明してやれという事なのだろう。レディは再度、口を開いた。

「……貴方、スパーダについてはどれくらい知ってるの？」

レディの問いに、ダンテはピザを頬張る。付き合いの長い今でも、この男が魔剣士スパーダの息子だなどという事実を、レディは疑いたくなる事が幾度となくある。今まさにそんな瞬間のひとつである事は間違いないかった。

「何でも知ってるわけじゃない。それが普通だろ？ 自分の親の事は何でも知ってるって方がどうかしてる」

いかにも正論のようではあったが、ダンテが口にするレディの耳にはあまりそうは聞こえないのだった。何かと難癖を付ける性癖を知っているからだろう。

だが、そんな事を言い出してもキリがないので、レディはひとまずひとしきり説明をする事に決めた。

「フォルトウナという都市ではね、スパーダが領主を務めてたっていう伝説が残ってるの。住民も皆それを信じてる」

多少なりとも関心を示すかと思っただがダンテの反応は、

「へえ……」

というただ一言だった。

「スパーダが去った後も、住民は彼を敬い、崇め続けたそうよ……神としてね」

それまで仰け反って話を聞いていたダンテだったが、神という単語に身を前に乗り出した。「悪魔が神になったって？」

心底面白そうだという表情を浮かべ、問い返してくる。父親の過去にはさして興味がない風なのに、そういう皮肉めいた要素には食い付いてくるダンテという男の思考が、レディはよく分からない。しかし何にせよ、多少なりとも興味を引けた事は幸いだった。

「問題なのはここから先の話でね……どうやらその教団が最近、悪魔にご執心らしいのよ。あちこちで悪魔を狩って捕まえてるの」

ようやく仕事の話ができると安堵したレディだったが、ダンテの、  
「動物園でも造るんじゃないかねエの？」

という言葉に少し苛ついた。大体この男は真剣に人の話を聞くという能力が欠如している。何かとつまらぬ横槍を入れねば気がすまないのだ。レディは、真面目に聞けという警告のつもりでダンテの手に行っているピザを奪い取り、

「それだけじゃないの……貴方が持っているような魔具なんかも集めてみたいよ」と付け加えた。ダンテは口元に笑みを浮かべ、

「分かった。博物館だろ？」

そう言っただけでレディの持つピザを奪い返そうと手を伸ばしてくる。レディは素早く手を引きそれを逃れた。ダンテは拗ねたように煙杖を突く。

「じゃあ何だよ……」

いちいち道筋を追って話をした事を、レディは後悔していた。この男にはまず本題を告げな

くては駄目なのだ。

「そんな可愛い目的じゃなくて、もっと凶悪な目的だとしたら？」

レディの再度の問い掛けに、ダンテは眉を擡める。

「……それが仕事の依頼か？」

明らかに怪しんでいる様子だった。

「その教団に何度も仕事を邪魔されてるのよ。このままじゃ商売上がったりなわけ。だから何とかしてもらおうと思って」

言いながらダンテにピザを返してやると、ダンテは何か思案してるようだった。

その背後で、トリッシェが机から降り立ち、壁に掛けられた禍々しい剣や床に転がっている魔具らしき物を荷物にまとめ始めていたが、ダンテはそれに気付いている様子はない。レディは特に何も口出ししなかった。

「その教団が操ってるのが妙な鎧騎士なの。人間じゃないわ。鎧だけが動いている。退屈凌ぎにはなる仕事だと思わよ？」

レディのその言葉に、ダンテはピザを全て食べ切った後で、

「確かに、最近暇だから……」

と答えた。トリッシェは全て荷物をまとめ終えたらしく、ダンテの背後の壁に、ルージュで何やら書き始めている。レディが目を凝らすと、「現地集合」という文字だった。

レディの視線に気付いたらしいトリッシェは、人差し指を唇に宛がい、ウインクをしってくる。どうやらダンテに先んじてフォルトゥナに向かうつもりなのだろう。レディの話にも結局何も口を挟まなかったところを見ると、トリッシェは既にフォルトゥナや魔剣教団について何かの情報を得ていたのかもしれない。ひょっとすると、彼女が「Devil May Cry」に戻って来たのも、その事を知ったからこそなのかもしれない。

「ま、旅行がてら行ってくるか」

ダンテがそう決断したのは、既にトリッシェが窓から事務所の外へと飛び出した後だった。

「トリッシェ！ お前は——」

当然、ダンテが振り返っても誰もいるはずがない。

「彼女ならもう出てったわよ」

呆れてレディはそう告げた。ダンテはまじまじと壁の書き置きを見つめている。レディとしては魔剣教団をどうにかしてくれさえすれば、解決するのがダンテであろうとトリッシェであるうと何も問題はない事だった。

そのまま立ち去ろうと振り返り、それからふと思いついて立ち止まった。

「あ、交通費は報酬込みだから。じゃ、頑張っ。後はよろしく」

レディが振り向きそう告げると、ダンテは、返事もせず慌てた様子で支度を始めていた。戦う事以外に関しては本当に頼りにならない男だ。レディは思いながら「Devil May Cry」を後

にした。



## STAGE 14



アグナスはフォルトゥナ市街の中央に位置する大歌劇場にいた。

儀礼や式典などに一切顔を出さぬこの男には最も似つかわしくない場所でありながら、アグナスはまるでかかって知ったるといふ様子で歌劇場の奥へと歩を進めていく。そして迷う事もなく袋小路ふくごうしになっていく廊下ろうかの突き当たりで立ち止まると、目の前の壁の一点に指を押し付けた。同時に、アグナスの指は壁の一部ごと中程なかほどまで埋まり込む形になる。そして静寂せいじやくな空間にカチリと微かな音が響ひびいた。

それが、魔剣教団の中でもごく一部の者にしか知らされていない、隠し通路かくを開くためのスイッチスイッチになっているのだった。

アグナスの足元の床がゆっくりりと、隠されていた階下に繋がる階段つなを露あわにしていく。アグナスはそれを見て、小さく微笑ほほえみ、再び歩き始めた。



元々、その通路は大歌劇場が生み出されるよりも遙か以前から存在していたものだ。永い歲月の間に忘れ去られ、土や瓦礫に埋もれてしまった古代の遺産。

大歌劇場が建造されてから幾歲月の間、発見される事はなかったその通路を、アグナスに命じて発掘させたのはサンクトゥスである。彼は様々な文献を元に、その通路が歌劇場の地下に存在しているという結論を導き出し、そして実際、発掘の結果、事実はその通りであった。

その通路は、大歌劇場と同じく市街の中央に位置している聖碑——地獄門の真下に通じている。そしてその空間にこそ、地獄門を封じるための結界が存在しているのだ。

狭い通路を遅々とした足取りで歩みながら、アグナスは張り詰めたような空気を肌感じていた。調査のために何度となく訪ねはしたものの、その空気の持つある種の圧迫感には慣れる事がない。

「さあ、悪魔どもよ……」

闇魔刀を手に、アグナスはそう呟いていた。

それは、自身を取り囲む空気の重圧を振り払うためであり、また、歴史的偉業をこれから成し遂げんとする興奮からでもあった。

「欲望のままに牙を剥くがいい……研ぎ澄ませていたその爪を振るうがいい……貴様らのもたらす災いこそが、我らが樂園の礎となるのだ……」

アグナスは、結界の中心部で足を止めた。闇魔刀を鞘から抜き、アグナスは大きく天井を仰

いで目を閉じる。

「墮落した人間に、正義の鉄槌を……腐敗した世界に神の怒りを……」

目を見開き、アグナスは闇魔刀を一気に結界の中央に突き立てた。

「今こそ！ 審判の時！」

アグナスの叫びと同時に、周囲を取り囲む結界が強い光を放つ。同時に、地響きが起り始めた。

アグナスは感じていた。凄まじい魔力が今、自分の足元を伝っていくのを。そしてその魔力が、自分の頭上に存在する地獄門に流れ込んでいくのを。

「見るがいい！ これこそが我が研究の結晶！ 真なる地獄の到来！ 二千年前を超える、大いなる混沌だ！」

感極まり、アグナスは誰も居ぬ空間で声を張り上げていた。

闇魔刀を用いれば地獄門は解放できる。だがそれはアグナスでなくとも、闇魔刀さえあれば可能な事だ。アグナスが歓喜しているのはそれに対してではない。

このフォルトゥナの三つのポイントには、アグナスが設計した小地獄門が設置されている。それは研究素体としての悪魔を呼び出すためのものだ。しかし小地獄門の目的はそれだけではない。

小地獄門を設置しているのはフォルトゥナでも特に強い魔力を帯びている土地だ。その強い

魔力は、小地獄門によりさらに増幅され、今やフォルトゥナをひとつの結界で覆うような形になっている。

そして今、真の地獄門が解放された。

元来、魔界への道は瞬時には開かない。徐々に、時間を掛けて解放されていく。それは人間界と魔界との間に存在する魔力の差異によるものだ。開かれた魔界への道から魔力が流れ込み、その濃度が一定量に達しなければ、魔界への道は完全には開かない。特に地獄門程の巨大な道を開く場合、その解放にはとりわけ時間を要するはずだ。アグナスは研究によりその事実に気が付いていた。

だがこのフォルトゥナの地は、既にアグナスの生み出した小地獄門により濃度の高い魔力で満たされている。その結果、地獄門は瞬時に最大解放されるのだ。

それこそが、アグナスの研究の成果であり、アグナスの歓びの源であった。

「食らい尽くせ！ 悪魔どもッ！」

恍惚とした表情で、アグナスは笑った。



森へと続く道の小高い場所で、ダンテは足を止めていた。



目を細め、遙か遠方に位置する巨大な黒い板状の物体に目をやる。それが地獄門と呼ばれる、魔界へと続く道である事は、トリッシュから聞かされていた。これまでダンテが目にしてきたどんな魔界への道よりも巨大な代物であるという事も。

その地獄門が、震えていた。遠方にいるダンテにもそれと分かる程に。

「間に合わなかったか……」

ダンテの呟きと同時に、地獄門の表面が妖しい色に煌めき始める。ダンテ自身、それを目にするのは初めての事だった。しかしある程度の予測はしていた。これまでにダンテは幾度となく魔界への道が開かれるのを目撃している。だからこそ、地獄門の解放にさしたる懸念を抱いていなかったのは事実だ。

だがぼんやりと地獄門を眺めていたダンテは、すぐにその安心し切った表情を一変させた。

地獄門から、もはや言葉にできぬ程の大量の悪魔が流れ込んできたからだだった。

もはや個体を個体として認識できない、荒れ狂う波のような悪魔達の大移動。その波が一気に市街地に覆い被さり、フォルトウナの街は瞬時にして悪魔で覆い尽くされた。

「凄エな……」

ダンテは思わず感嘆の声を上げていた。

しかし今この場から地獄門の解放を止める手立てはない。大量の悪魔達が、やがて住民達を蹂躪していくと知っていても、今のダンテには何もできない。

「トリッシュに任せるしかねエか……」

市街地にはトリッシュが赴いているはずだ。しかしあれだけの悪魔の来訪はトリッシュでさえ予測し得なかっただろう。この様子では住民全員を救う事はできそうもない。ダンテはその事に気がかけた。

血も涙もない男だ、とダンテは時折言われる事がある。

悪魔を退治するために、市民を危険に晒した事も何度となくある。

しかしそれでも、無意味な犠牲者を出した事はない。

ダンテが為すべきなのは、ただ悪魔を退治する事ではないからだ。罪なき人間を殺めるからこそ、ダンテは悪魔を憎み、悪魔を屠る生業を選んだのだ。

舌打ちをし、ダンテは先を急ごうと足を上げた。

その直後、地獄門の方からした轟音に、振り返る。

見ると、地獄門の上空に、神が出現していた。教団本部から飛び去り、一度身を隠して地獄門の解放を待っていたのだから。

神の額から強烈な光が放射され、その光は地獄門から現れたばかりの悪魔達を瞬時に焼き払った。

神の頭上には教皇が立っている。

教皇は悪魔を一掃した事を確認し、満足そうに頷いて市街地を見渡した。

「フォルトゥナの民達よ！ 恐れるな！ 大いなる災いを取り去るために、私は戻ってきた！ 偉大なる神と共に！」

遠方からでも微かに聞きとる事ができたその言葉に、ダンテは苦笑していた。自分達で悪魔を呼び出し、その悪魔を殺して英雄を演じている様は、あまりに滑稽だった。

教皇は高らかな叫びを続ける。

「さあ、祈るのだ！ 聖歌を捧げよ！ 世界はまだ終わってはおらぬ！」

大したものだ、とダンテは思う。賞賛するために拍手さえていた。自分を英雄と思いついた悪党には何度か出会った事はある。だがここまで露骨な自作自演劇の果てに、あそこまで堂々と英雄ぶった者を見たのは初めてのことだった。

「演技派だな爺さん……せいぜい頑張って住民を守ってくれよ。その方が俺も動きやすい」

神の周囲には、教団が生み出したという鎧騎士が無数に取り巻いている。彼らもまた住民を守るためにあちこちへと向かうのだろう。地獄門の解放を見て、住民の安否を気遣いはしたダンテだったが、教団自身を守ってくれるのなら世話はない。

「さて、行くか……」

軽い足取りで、ダンテは進路を森へと向けた。



魔剣教団に潜入するにあたり、トリッシュュが持ち出したものが四つある。

ひとつは魔剣スパーダだ。

ダンテの父、魔剣士スパーダの愛剣であり、彼の魔力そのものと言ってもいい魔剣。

そして残りの三つは、ダンテがこれまでの仕事で得た魔具だ。

あまり物に執着のないダンテは、魔具などを手に入れても手元に置いておく事は稀で、大抵は手放してしまう。知人にそういったものを専門に預かる質屋のような男がいるから、彼に借金のカタとして取られる場合もある。

だがフォルトゥナ潜入を決めた時、たまたまダンテの手元に魔具が三つばかり残されていた。トリッシュュはそれもスパーダと一緒に持ち出したのだ。教団が魔具も集めていると、レディから聞いたせいだろう。

それら魔具が今はフォルトゥナの各地に散らばっているという事は、トリッシュュからの情報で知っていた。何でも、教団が生み出した擬似地獄門の起動装置に使われているという。

まずはその魔具を取り戻す。ダンテはそう決めていた。

住民達は教団自身とトリッシュュに任せておけば、大きな被害が出る事はないだろう。だとす

れば、ダンテはあの神に対抗するだけの力を手にした方がいい。

普段なら、そんな事はこれっぽちも考えはしない。

ダンテは、魔剣士スバーダの血と魂を受け継いだ己の力を誇りにしているし、その力が何者にも負けるはずはないと考えている。実際、完成したというあの神に対しても、負ける要素があるとは思わない。

しかしダンテはあの神を破壊できない。

あの中にはネロという少年が取り込まれてしまっているからだ。あの神を破壊すれば、おそらくネロもまた巻き込まれて死んでしまうだろう事は想像に難くなかった。

破壊せぬように気遣いながらあの神を相手にするのはさすがに面倒だ。リベリオンやエボニー、アイボリーだけでは少々心許ない。ダンテはそう考えていた。

「結果オーライって事か……」

トリッシュュがあればこれ持ち出したおかげで話がややこしくなったくらいはあるが、結果的にはそれが幸いしたという事だろう。教団も様々な魔具を集めていたらしいが、その魔具の行方はよく分からない。はっきりしているのはトリッシュュが持ち出した三つだけだし、ダンテとしても使い慣れたそちらの方がこの状況ではありがたい。

魔界の植物が生い茂ってしまっている森を進み、ダンテは周囲にむせ返るような魔力が充ち満ちている事に気付いた。それは瘴気と言いつてもいい。並の人間なら足を踏み入れただけ

で気を失うような濃度だった。

地獄門が解放されてからまだ間もない。その僅かな時間の間にこれだけの魔力が流れ込んだとは考えにくかった。おそらくは教団の設計した擬似地獄門とやらのせいだろう。

「どっちにしろ、破壊しとけって事か……」

ぼやきながらダンテは足を進めた。神を相手にした後でまたあちこち戻って地獄門を破壊するのは面倒以外の何物でもない。このまま擬似地獄門を破壊しつつ先を急ぐのがやはりベストな道のりだ。

森には無数の悪魔がはびこっていたが、強大な力を持つ者は殆どいなかった。地獄門が開かれた今、どれ程の相手が現れるかと思っていたが、もはや魔界には下級悪魔しか残されていないのかもしれない。

そう考えて、ダンテは足を止めた。

森の中央部、擬似地獄門の上空に、巨大な竜のような悪魔が飛んでいる。教団本部を訪れた時、同じように遠方の空で見かけた悪魔だった。その時は先を急ぐために放っておいたのだ。

その悪魔が、上空を漂いながら無数の種子らしき物体を産み落としているのに、ダンテは気付いた。森の変貌は、おそらくその種子によるものだろう。

ダンテは小さく笑い、今まさに産み落とされ空を落下していく種子の方に駆け出していた。「ポロポロとゴミを落とすもんじゃねえな……」

「吹き、種子のひとつが地面に落下する前に大きく蹴り上げる。蹴り飛ばされた種子は落下中のもうひとつの種子に激突し、弾き飛ばされてその進路を変えた。」

ダンテは続けざまに森を駆け抜け、飛び上がった。空中で身を翻しながら、サッカー選手のようにさらにもうひとつの種子を蹴り飛ばす。

複数の種子は森の樹木に当たり、他の種子に当たりながら何度も進路を変え、やがて全ての種子が揃ってひとつの同じ方角に向かって突き進んでいた。

それに気付いたらしい童のような悪魔は、空中でうねりながら滞空すると大口を開けた。その大口の中には女性の上半身のようなものが備わっている。どうやらそれが本体らしい。

「貴様——」

本体が口を開いた瞬間、ダンテが蹴り飛ばした種子が連続してその頭部に命中する。ダンテは足を止めて笑った。

「舌嚙んだか？ 悪いな、お喋りができるとは思わなかった」

悪魔は、ダンテを睨みながら低く唸った。

「無礼な……わらわをこの森の主と知っての狼藉か……！」

その言葉に、ダンテは肩を竦める。

「いや……知らねえな。と言うか、ここは人間の森だ。お前の森じゃないだろ、どう考えても」

ダンテがそう告げると、悪魔は愉快そうに笑った。

「ほほ……愚か者め。我が子らが覆い尽くせば其処がどこであろうとわらわの森となる。このエキドナの森にな……」

人語を解するような知性のある悪魔は、往々にして自己顕示欲が強い。別段、ダンテとして悪魔の名など知りたくもないのだが、向こうから嬉しそうに名乗ってくる。ダンテはエキドナと名乗った悪魔を無視し、擬似地獄門の方へと歩き出した。

「こちらを見ぬか……ッ！」

エキドナはそう叫んでダンテに向けて突進を始めた。瞬時に童のような形状に変化し、その頭部がダンテを飲み込もうと牙を剥く。

ダンテは振り返り立ち止まったが、そのまま何もしなかった。何となく、相手の攻撃を受けてみたくなってしまふ瞬間が、ダンテには時折ある。そういう刺激がなければ、時に悪魔狩りは退屈なルーチンワークに陥ってしまうからだ。

そのまま一気にエキドナの頭部に食らい付かれ、ダンテは上半身を巨大な顎に挟まれる。

その食らい付かれた口内で、エキドナが笑い始めた。

「貴様もわらわの子とひとつになってこの森の一部となるがいい。平穩無事な余生を送らせてやろう……」

思わず溜め息がこぼれた。

ダンテはゆっくりりとエキドナの両顎に手をかけ、力を込める。「そういう誘いなら……パスだ」

強引に自分を押し挟む顎を開きながら、ダンテはそう呟いた。そしてエキドナの拘束から脱出し、髪を掻き上げる。

「刺激があるから人生は楽しい。覚えときな。人間ってのはそういうもんだ」

怪我ひとつなく自分の口内から逃れた事を侮辱と捉えたのか、エキドナは再度女性のような本体を現し、ダンテを睨み付ける。

「貴様……人間の分際で……ッ！」

ダンテは自分の背後にある擬似地獄門に目を向けた。その傍らには小さな装置が置かれている。おそらくそこに魔具が埋め込まれているのだろう。

「ちょっと刺激を体感してみるか？　ちょうどいい得物もある」

エキドナにそう告げると、ダンテは後方に跳び、着地と同時に地獄門の起動装置を蹴り付ける。その衝撃で、光の球のような物質が上空へと吐き出された。

多くの魔具は、魔力を付加する事でそういった形状に圧縮ができる。その魔具もまた、教団によって埋め込まれる前に圧縮されていたのだろう。

吐き出された光の球に手を差し伸べると、それを待ち構えていたように光球はダンテ目だけが飛来し、その手の中に収まった。ダンテはそれに魔力を流し込み、その魔具を展開する。

「さあ……どれが出てくるかな」

どの魔具がどの門に埋め込まれているかまでは、ダンテは知らない。だがそれがどの魔具だとしてもエキドナに刺激を与えてやるには適した武器だ。

展開された魔具を見て、ダンテは小さく口元を歪めた。女の形状をしたエキドナに、その魔具を用いるのもなかなか面白い。

展開された魔具が瞬時にダンテの肉体を覆う。

それは魔具と呼ばれてはいるが、武器と呼ぶべき存在かどうか、ダンテには分からない。

衝撃鋼ギルガメス。

生命体と一体化する事で強靱な肉体をもたらし、同時に衝撃を生み出す力を与える魔界産の金属生命体だという。

そういった情報は、概ねトリッシュから得たものだ。ダンテは魔具の持つ経緯などを細かく調べる事はしない。だからギルガメスが魔具であるうとなかろうと、そんな事はどうでもいい事だった。

ダンテと一体化したギルガメスは、まるで鎧のような形状に変化し、ダンテの四肢と背部を包み込んでいた。両腕にはミサイルの発射装置を想わせるような突起、両足には車輪のような機関が備わっている。ダンテの意思によって、ギルガメスはその形状を変える。

既に何度かギルガメスを用いた事のあるダンテには、それが最も適した形状であった。

「刺激たっぷりりの時間を過ごさせてやる……来いよ」  
言葉と共にエキドナに手招きをすると、エキドナは叫びながら上空へと飛んだ。凄まじい速さの上昇の後、身を翻して一気にダンテとの距離を詰めてくる。

ダンテは深く腰を落とし、右手を腰に引きつけて構えた。  
力を込めた右腕がエンジンのように唸りを上げ、ギルガメスの生み出した衝撃が徐々に蓄積されていくのが分かる。

「いいパンチが入りそうだ」

ギルガメスは多数を相手にするのに決して適した武器ではない。肉体に依存するというその形状の性質上、攻撃はパンチやキックといった延長線上になってしまいがちだ。

だがダンテを飲み込む程に巨大なエキドナの頭部は、ギルガメスで相手をする上で格好の獲物だった。あれ程狙いやすいものもない。まして向こうはその巨大な頭部を激突させんと突進してきている。

エキドナの頭部が眼前に迫ったその刹那、ダンテは一気に拳を振り上げていた。

同時に、両腕の装置が蒸気を発しながら杭状の機関を排出する。

「……ライジングドラゴン！」

突き出した拳を上空に向け、ダンテは地面を蹴った。衝撃鋼の力によってその跳躍もまた通常のダンテ以上の瞬発力によって為されている。

昇竜と名付けた通り、ダンテの身体は天を目指す竜のように上空へと舞った。その勢いのままに、突き上げられた拳がエキドナの竜のような頭部、その顎を打ち上げる。同時に、ギルガメスが排出した杭が突き刺さり、衝撃をその肉体に伝達させる。

ポクシングで言うカウンターで命中したダンテの拳は、巨大なエキドナの身体を吹き飛ばすに十分な破壊力を秘めていた。エキドナの身体が空中で一回転し、地面に激突する。

エキドナは竜の口から本体を露わにし、まるで人間のように身体をふらつかせた。

ダンテはそれにゆっくりと近付きながら微笑む。

「どうだ？ 楽しいだろ？ 生きてる実感ってやつだ」

エキドナは何も言わなかった。とても答えられるような状態ではないらしい。

「ちょっと刺激が強すぎたか……？」

もう少し待って、相手の言い分を聞いてみようかという気持ちが一瞬芽生えたが、ダンテはすぐにそれを打ち消した。

この悪魔は一応、女のような姿をしている。

昔から、女運があまり良くないのだ。少し手心を加えたりした結果、腹を突き刺されたり肩間を撃ち抜かれたりといった憂き目に遭った事もある。

「ま、さっさと終わらせた方が無難だな……」

ふらついているエキドナを前に、ダンテは深く腰を沈める。



それから、どんな技を繰り出そうか思索した。

「パンチの次は……キックにするか」

相手を倒せればどのような技でも別に問題はないのだが、何となく、同じ技ばかりを繰り出すのは気が引けた。それもまた、ダンテなりの退屈凌ぎの方法だった。

地面を蹴ると同時に回し蹴りを放つと、エキドナの脇腹に蹴りがめり込む。

そのままの勢いで身体を反転させ、二発、三発と蹴り込んだ。

合計十三発。

蹴りの乱打を浴びたエキドナは大きく仰け反り、ダンテに手を伸ばそうとする。

ダンテはその手を振り払い、後方に跳ぶとエボニーとアイポリーを構えた。

「わらわの……森が……」

うわ言のように呟くエキドナに銃口を向けて引鉄を引くと、エキドナの身体中を駆け巡っていた衝撃が一気に解放され、エキドナの身体は四散した。

銃口に一息吹きかけ、ダンテはエボニーとアイポリーを収める。

「今日の女運は悪くなさそうだ……珍しい」

ダンテはそのまま擬似地獄門の方に歩き出した。動力となっている魔具を失った以上、この門が動き出す事はないだろうが、後々の事を考えれば破壊しておくに越した事はない。

門の目の前で拳を突き出し、ダンテはそっとそれを宛がった。

足を動かさず、上体の動きだけでその拳を突き出す。

門は暫くの間、何事もなかったかのように鎮座していたが、やがて様々な各所に亀裂が走っていく。

それを見て、ダンテは門に背を向けた。背後で門が崩れ去る音が響いた。

「さて、とりあえずひとつ、か……」

残る魔具は二つ。そして闇魔刀。

あまりのんびりしている暇はなさそうだった。



## STAGE 15



レディは船上で潮風を感じながら、遠方の風景を見つめていた。既にフォルトウナの街は遠方に見えている。しかし到着にはまだ幾許かの時間がかかりそうだった。

「やっぱりアイツに任せて正解だったわね」

遠方のレディの目にも、今フォルトウナが置かれている現状は見て取れた。地獄門と呼ばれる装置から大量に噴き出した悪魔の群れ。それに合わせるように出現した巨大な石像のような存在。人間のハンターではおそらく相手をするのは不可能だろう。だがダンテやトリッシュなら、おそらくそれも可能だ。

「あの……本当にあそこに行くんですか？」

船頭のベンがフォルトウナの惨状を見て、怯えたようにレディに尋ねてくる。その質問が為されたのはこれで四度目だった。

「何回も言わせないで。行くのよ。大丈夫、着く頃には収まっているから」

レディはそう答え、ベンに聞こえぬ声で、「たぶんね」と付け加えた。正直な話、レディ自身ここまで大量の悪魔が湧き出すような事態になるとは思っていなかった事は、ベンには告げなかった。悪魔絡みの仕事に関わった事がある男だから、悪魔のあれこれについて説明しなくて済むのは幸いだったが、そんな男でも怯える程には今のフォルトウナの状態は凄まじいという事だ。

半信半疑といった様子で操舵室に向かったベンの背を見ながら、レディは傍らに立て掛けてあるカーリーナIIアンに触れる。

「一応持って来て正解だったって事か……」

そもそもレディがフォルトウナに向かっているのは悪魔を退治するためではない。仕事を終えたダンテとトリッシュを迎えるためだ。それはトリッシュが旅立つてから数日経った後に手紙で依頼された事だった。一カ月後に迎えるの船を出して欲しい、と。

教団と戦い教団を壊滅させれば、フォルトウナの街は混乱する。そうなれば帰るための船を用意できるかどうかは怪しい。そう考えての依頼だったのだから。一カ月というのはおそらく多少の余裕を見た上での期間だと考えていただけに、もうじきフォルトウナに到着するというこの段になってまだ街があのような惨状にあるとは考えてもいなかった。

最悪、自分もあの悪魔どもを相手に立ち回らなければならぬ。船は心なしか数時間前に比べて速度を落としていた。ベンが恐れをなしてなるべく到着を遅らせようとしているのだと気が付き、レディは操舵室に向けて歩き出した。

そして頭上にそれを見つけた。

悪魔だった。

吸い込まれそうな闇色のコートのような物を羽織り、帽子を被っているように見える。

悪魔はレディの頭上を漂いながら、真つ赤な爪を何度かうごめかせた。

「あら……こつちまで流れて来ちゃったの？」

首を傾げながら、レディは太股のホルスターから銃を引き抜く。だがレディがその引鉄を引くよりも速く、悪魔の爪がレディを襲っていた。

咄嗟に危機を感じ、レディはバク転をしてそれをかわす。見上げると、悪魔は最初にいた場所からほとんど動いていない。爪だけが伸びてレディを襲って来たのだとレディは知った。

悪魔は笑うようにかすかな呻き声を上げた。

「カンに障る声ね」

言いながらレディは銃を数回発射した。悪魔はやはりその笑いを続けながら風に流されたように左右に移動して銃弾を回避する。そしてその直後、再度レディにその指先を向けた。

レディは舌打ちして飛び退く。瞬時に伸長した爪が甲板に突き刺さった。

自分が襲われるのは問題ないが、船を壊されればこんな洋上に投げ出される事になる。レディは焦りながら立て掛けてあるカーリーナリアンに視線を向けた。

ミサイルを使うのはマズい。船ごと壊しかねない。しかし悪魔の動きから見て、拳銃だけに仕留めるのは難しいかもしれない。

悪魔は依然、宙からレディを見下ろしている。そして笑い声のような呻き。

「そうやって偉そうに人を見下ろすもんじゃないわ」

カッとすると瞬間的に我を失うのは自分の悪いところだ、とレディは自覚している。それで昔は悪魔かどうかも分からない男の頭を撃ち抜いたりもした（結果的にそれは悪魔だったので殺人者にはならず済んだが）。

そんな昔に比べれば、常に冷静でいられるようになったとレディは思う。しかし時折、我慢ならない事もある。

今の状況がそうだ。

船の上。こちらからは手が出しにくい状況。そしてそれを見越したかのような悪魔の態度。知性があるのかどうかも怪しくはあったが、自分を嘲るような態度が気に入らない。

レディはカーリーナリアンに手を伸ばしていた。悪魔はまだレディの頭上を漂っている。

「降りて来なさい」

その言葉を吐き、レディはカーリーナリアンの引鉄を引く。

カーリーナリアンの銃口から射出されたミサイルは緩い弧を描きながら悪魔目掛けて飛んだ。悪魔はゆらりとした動きでそのミサイルを回避したが、カーリーナリアンのミサイルは多少の角度の誤差は修正する。

目論見通り、ミサイルが悪魔に命中し爆発を生み出した。爆風に煽られ、レディは腕で顔を覆う。

それでようやく事態に気付いたのか、ベンが慌てて操舵室から飛び出してきていた。

「ちよ……あなた！ 何やって——」

そのベンの背後に、例の悪魔がいた。羽織っていたコートのような物質がところどころ剥けてはいたが、大きな傷を負っている様子はない。

レディはすぐさま拳銃を引き抜いて数発撃ち込んだ。ベンを襲おうとしていた悪魔がそれに気付いて上空に舞い上がる。

「あなたは隠れてて！」

ベンにそう告げながら、レディは甲板の上を走っていた。

船を壊されるのも厄介だが、ベンを殺されるのも問題だ。操船の技術はレディにはない。バイクや車と違って船を用いるような仕事はほぼ存在しないと断言していいからだ。

ベンは慌てた様子で操舵室の扉を開けたが、すぐに、

「ひ……ッ！」

と声を上げた。

目を向けると、先程上空に飛んで行ったはずの悪魔が操舵室の中に入り込んでいる。

即座に銃を向けたが、もし銃弾が外れば船を傷付ける事になるのに気付き、レディはベンを悪魔から離れるように突き飛ばした。そして担いでいたカーリーナリアンを構える。

悪魔はそれを見て警戒するようにまた上方へと飛んだ。

天井に激突する事もなく、悪魔は吸い込まれるように消えてしまう。

入り口から離れ上空を見やると、悪魔はまた上空で漂っていた。壁をすり抜ける事ができるらしい。ますます厄介な相手だった。船頭を操舵室に押し込めても、これでは簡単に殺されてしまう。

ならばせめて戦いやすい場所に移動させるべきだ。

そう考え、レディは銃を撃った。わざと弾丸をかわざせ、悪魔が甲板の方に向かうように誘導する。

「そこにおいて！ 動かないでよ！」

ベンに向けてそう叫んだが、あまり意味はないようだった。彼は既に腰を抜かしている。

再度、甲板で悪魔と対峙しながら、レディは周囲を見回した。これ一匹ならまだどうにかはなる。だがもし複数で襲われると保たないかもしれない。それを危惧していた。今のところ、

他の悪魔の気配はない。それに安堵して正面の悪魔に視線を向け直す。

レディは、悪魔の身体を覆う衣のようなものが、元通りに戻りつつある事に気が付いた。爆発の影響で剥げかけていたはずだ。おそらくその衣が爆発の被害を最小限に食い止めたのだらう。

この悪魔を仕留めるにはその衣を全て剥ぎ落とす必要がある。そう感じて、レディはカーリアンを向けた。悪魔はまたその視線から逃れるように空中を移動した。先程の一撃で学習したらしい。

「鬱陶しい……!!」

レディがぼやくと、悪魔が瞬時に爪を伸ばした。その爪を、レディはかわさず、カーリアンの銃身で受け止めた。かわせば船が傷付く事になる。

その爪には、カーリアンを射貫く程の威力はないらしい。悪魔が衝撃で空中でよろめくような仕草を見せた。

レディがカーリアンを盾にしたまま拳銃を引き抜き撃ち込むと、銃弾はよろめく悪魔に命中する。だが、さしたるダメージは与えられていない。取り巻く衣が僅かに剥がれただけだった。

銃弾を受けた悪魔は怯みながらレディから離れるように移動する。

また悪魔の攻撃を待って、その隙を突くか。しかし、ミサイルを警戒しているところから見ても同じ手が何度も通用するかどうかは分からない。それに相手の攻撃を待って反撃するとい

うのはレディにとって好ましい戦い方ではなかった。

「本当に面倒くさい相手ね……!」

レディはカーリアンを甲板に投げ出し、腰に吊るしている手榴弾を手にとった。

ピンも抜かず、それを上空の悪魔に投げ投げると、レディは手榴弾を撃ち抜いて悪魔の手前でそれを爆発させた。爆風でレディの黒髪が揺れる。

相手にダメージを与えるための攻撃ではなかった。目的は、あくまで黒煙で悪魔の視界を阻む事。

「終わりよ」

呟き、レディは足元のカーリアンを蹴り上げてキャッチする。

そのまま眼前に濛々と広がる黒煙に向けてミサイルを発射した。カーリアンの爆発が、手榴弾の爆発に重なるのとはほぼ同時に、不快な鳴き声と共に白い虫のような物が落ちた。

「……本体はみすぼらしいのね」

レディはその虫に近付きながらそう言った。

ともすれば人間のように見えた悪魔だったが、身体を覆う黒衣が剥がれ落ちた今の姿はどう見ても巨大な昆虫のようにしか見えない。

本体を現した悪魔は、レディの接近に気付き、甲板の上を這い回り始めた。その姿には、先程までこの悪魔にあったある種の高貴さのようなものが一切感じられない。

レディが黙ったままボウガンの矢を撃ち込むと、虫のような悪魔は甲板に縫い付けられる格好になる。そしてそのまま数度蠢き、やがて動きを止めた。

安堵の息を漏らし、レディはベンを振り返った。

「大丈夫？ 怪我はない？」

尋ねると、ベンはよろよろと立ち上がりながら、

「ああ……」

とだけ答えた。

「だったら急いでくれる？ 貴方もこんな海の上に投げ出されたくはないでしょう？」

そう告げてレディがベンに歩み寄りとうると、ベンは怯えたような表情をしながら後ずさる。そんなにキツイ言い方をしたつもりはなかっただけに、ベンのその態度には疑問を感じずにはおれず、レディは足を止めた。

「何……？」

ベンが見ているのはレディではなかった。その視線は自分の後方に向けられているのだとレディは気付く。

そして振り返り、レディは啞然とした。

レディの背後の上空に、既に無数の悪魔が群がっていたのだ。

先程一匹始末した悪魔と同種のもの。そしてそれによく似た赤い体色の悪魔。

「成る程ね……」

これだけの数の悪魔を相手にして果たして船が無事でいられるだろうか。レディはただその事だけを案じた。無論、それは悪魔によって破壊される可能性を危惧したのではなく、レディの攻撃によるものだけを、である。

「救命用のポートがあるでしょう？ それで避難して」

ベンの方を振り返らず、レディはそう告げると、まだ数発の弾丸が残されている銃のマガジンを排出し、新たなマガジンを装填した。



森を抜け、ダンテはフォルトゥナ城に再び訪れていた。往路でも感じていた事ではあるが、この街周辺の道はどれも険しく、しかも難解な迷路のように入り組んでいる。

それはおそらく中世、まだ隣国との領土争いなどをしていて頃の名残なのだろう。もしもそれを指示したのがスパイダだとしたら、皮肉なものだとダンテは思う。こんな構造をしてさえいなければ、もう少し近道ができそうなものだ。それをいちいち歩いて元来た道を戻らなくてはならない。

城内にもやはり無数の悪魔が蔓延っている。それを相手にしながら城内を進むうち、ダンテ

はその悪臭に気付いた。ダンテだからこそ感じ得る、悪魔特有の臭気だった。しかもかなり強い。思わず顔をしかめたくなる程だった。

「こりゃどっかに大物がいるな……」

吹き、ダンテはその臭いの元を辿るように歩いた。城の中にも教団が設置した門がある事は分かっている。これだけ強い臭気を放つ悪魔となれば、その門から這い出してきたものである可能性が高かった。

中庭も思いき空間に辿り着き、ダンテは足を止めていた。ひどい吹雪だった。数センチ先の視界も開けないような有様だ。

「ふゥん……」

ダンテは周囲を見回した。その空間に天井はなく、屋外である事には違いない。しかし四方は城壁に囲まれる形になっており、そこまでの強い吹雪が起こり得るような場所ではない。その吹雪が悪魔の仕業である事はもはや疑いようがなかった。

この付近に門がある可能性が高い。そう考え、ダンテは荒れ狂う吹雪の中を歩もうと足を進め、またすぐに立ち止まった。

数メートル先に、何かを見付けたからだだった。相変わらず視界は悪かったが、それはぼんやりと淡い光を湛えている。そのせいでダンテのいる場所からでもなんとなくその存在を知ることができた。

悪魔か、そう思いダンテが目を細めると、その淡い光がゆっくりとダンテに近付いてくる。

「お、ッほ……」

ダンテは思わず前のめりになり正面を覗き込んだ。裸の女だった。

白い吹雪の中、空中を漂うように踊る二人の女。その裸体は淡いピンク色の光を放ち、それが実に官能的な風情を生み出していた。

女達が数度、楽しそうな笑い声を上げ、ダンテを手招きする。

「ベイビーちゃん！」

堪らず、ダンテは叫びながら女達に歩み寄っていく。すると女達はふわりと宙を舞って、ダンテから逃れるように距離を開けた。

「つれないねエ……だがそれがいい」

逃げられれば追いたくなる。そんなダンテの性格を見透かしているように、ダンテが何度となく女達を抱きすくめようとしても、女達は軽やかにその腕の中から逃れていく。

「お触りは禁止か？　じゃあせめてゆっくり眺めてるかな……」

依然蠱惑的なダンスを続けている女達の前で、ダンテはゆっくりと寝転がった。煽るようなアングルになるとより扇情的な度合いが高まり、ダンテは満足げに嘆息する。

「最高だ……心が安らぐ……」

ダンテがそう呟いた時だった。女達の背後から獣のような叫びと共に、猛烈な勢いで何者かが飛び出してくる。ダンテはすぐさま跳躍し、その何者かによる一撃をかわした。

姿を現したのは、巨大な蛙のような悪魔だった。その頭部に、触角のように例の光る女達がブラ下がっている。その女達を餌にして、獲物を誘い込んで食らうのだろう。深海魚のようなその風体に、ダンテは苦笑していた。

「貴様……気付いたったんか……」

ダンテの反応の速さを疑問に感じたのか、悪魔が問うてくる。

ダンテは自分の眼前で何度も掌をひらつかせて、

「ベイビーちゃんの質は悪くなかったぜ……だがお前の体臭がな……酷いもんだ。鼻つまりでもしてなけりゃ、騙されてやるのは無理だな」

そう答えた。そもそも悪魔の臭いを追うようにしてこの場に来た以上、悪魔の存在に気付かぬはずもないのである。

ダンテの態度を侮辱と捉えたのか、悪魔は凄まじい勢いで鼻息を漏らし、

「ふざきゃあがって、このポケが……ッ！」

と言った。人の言葉を喋っているには違いないが、詭りがきつく、聞き取りにくい。それにどうやら自分の事を知らないらしい。ダンテは些か落胆していた。別段、有名になりたいなどと思った事があるわけではないが、しかしそれなりに悪魔の中にも名は知れ渡っていると思っ

ていたのだ。ところが先程のエキドナしかり、この悪魔もまたダンテを見て、さして驚くような様子はない。

「最近サボってたからか……？ それともお前が田舎者なだけか？」

唐突に、ダンテは目の前の悪魔にそう尋ねたが、その質問の意味など通じるはずもない。悪魔は大量の唾を飛ばして叫んだ。

「やかましいわッ！」

言葉と共に吐き出された息でダンテのコートが捲れ上がった。そしてそれを追いかけるように大量の唾がダンテを襲った。

幸い、先に身体を覆うようにコートが捲れ上がったおかげで、唾で身体が汚れる事はなかった。しかしあまり気分のいいものではない。

「このダゴン様の恐ろしき、思い知らせちやるッ！」

そう叫んで、ダゴンは再度鼻息を漏らす。

ダンテはべっとり汚れたコートを気にしながら、

「充分思い知った……もう勘弁してくれ……」

と呟いた。コートを捨ててしまいたいという衝動に駆られたが、ここは旅先で代えがあるわけでもない。

「死ねッ！」



ダゴンが大きく息を吸い込み始める。その背中に、無数の氷塊が生成されるのを見て、ダンはすぐに気分を取り直し身構えた。

ダゴンの背の氷塊が上空に向けて射出される。それから一気に、ダンテを狙うように地上に向けて落下を始めた。その一発一発をかわしながら、ダンテは視界の悪い吹雪の中を駆け走っていた。

この中庭のどこかに門がある事は間違いない。まず先にその門を探すべきだ。そう考えていた。

「ちょこまかしやがって！ いつまでも逃げ回れると思うなや……むしろ兄弟全員でブチのめしてやるけエの……ッ！」

ダゴンはその言葉の後に、突然咆哮を上げた。

それに呼応するように、中庭のどこからか同じような咆哮が上がる。そして無数の地響きが起こる。ダゴンはまた鼻息を漏らした。

周囲を覆っていた激しい吹雪がいくらか落ち着き始めていた。おそらくダゴンがそうしたのだらう。ダンテにその様を見せ付けるために。そして絶望を感じさせるために。

実際、普通の人間にとってならば、その光景は決して好ましいものではなかった。

中庭の片隅に設置された門。その門から何匹も何匹も這い出してくる、ダゴンと同じ姿の悪魔達。

しかしダンテにとって、吹雪が晴れてその光景を目にする事ができたのは、むしろ幸いだった。探すべき門の在処が分かりさえすれば、他に気に掛ける要素は何ひとつない。

「おい！ コイツをブチ殺すぞッ！」

最後の一匹が門から這い出してきたのを機に、ダゴンがそう叫ぶ。一斉に他のダゴン達が（他の者は違う名を持つのかもしれないが）ダンテを睨み付けた。

皆、同じ顔をしているのがおかしい、ダンテは苦笑しながら門に向かって走り出していた。

ダンテが攻撃を仕掛けてきたと勘違いしたのか、ダゴン達が身構える。

だがダンテは大きく跳躍すると、一切の攻撃を繰り出す事なく、ダゴンの身体の上に着地した。そしてすぐさま再度跳躍する。

「おお……ッ!？」

踏み台にされたダゴンが低く呻く。

一匹、二匹とダゴン達を足場に、ダンテは一直線に門の元へと進路を向けていた。

そして門の傍に着地し、振り返る。

ダゴン達はその巨体のせい、ダンテの方を振り返るのにもモタモタしているような有様だった。まして狭い空間に無数のダゴンがひしめき合っている状況だ。互いの身体が間え、邪魔し合って一層難儀している。

その様子に肩を疎めながら、ダンテは門の起動装置を蹴り上げた。

残された魔具は二つある。

そのうちのひとつは、いかにもこういった状況で使いやすいものだ。

「さて……当たりか、外れか……」

どの魔具を使ったところで別段ダゴン相手に負けるとは思わない。しかし楽に済ませる事ができるなら、そうするべきだ。先を急いでいる以上は。

起動装置から跳ね上がった光球が、ダンテの掌に飛び込んでくる。すぐさまそれを展開したダンテは、小さく口元を歪めた。

「当たり前だ……俺のクジ運もまんざらじゃないな」

呟いたダンテの手に握られているのは、スートケースを想わせるような形状の魔具だった。

その名を「バンドラ」という。

魔具の中には、特に「魔銃」と呼ばれるカテゴリのもが存在するが、バンドラもその魔銃のひとつだった。およそ銃には見えぬ外観ではあるが、バンドラこそが魔銃と呼ばれる兵器の中でも突出した力を持つ事を、ダンテは知っている。そしてそれ故に、悪魔ひしめき合う今の状況には打ってつけの兵器である事も。

「始めるか」

ダンテはバンドラを地面に置く。そして頭にひとつの武器を思い描いた。

呼応するように、バンドラが形状を変化させ、ガトリングガンと呼ばれる兵器に似た機関を

排出する。

「ハハッ！」

笑いながら、ダンテはスートケースのグリップに生み出された引鉄を引いた。

生み出された銃身から、凄まじい速度で無数の弾丸が射出される。

ようやく全員がダンテの方を向き直ったばかりのダゴン達を、バラ撒かれた弾丸が襲った。しかし元より、圧倒的な破壊力を持つ攻撃ではないだけに、全てのダゴンを片付けるに適した攻撃ではないと気付き、ダンテはバンドラを変形させ、元の形状に戻す。

そしてまた別の武器を思い描いた。

それがバンドラという武器の本質であった。

バンドラを生み出したのは、魔界の銃工であるという。彼は実に様々な魔銃を生み出した。そのうちのいくつかに、これまでダンテは触れた事がある。

多数を一人で相手にする際に力を発揮するタイプもあれば、一対一でこそ利便性を発揮するタイプもあった。

しかしバンドラはそのどちらとも性質が異なる。

と言うより、バンドラには定められた用法など存在しないと云った方が適しているのだろう。スートケースのようなその見た目は、あくまで基本となる形状に過ぎない。バンドラはそこからその姿を幾通りものパターンに変形させ、様々な武器となるのだ。

そしてその変形の引鉄となるのが、持ち手であるダンテの意思だった。

パンドラは手にした者の記憶と想像力とを読み取り、自身の形状を変化させる。

ダンテがパンドラを掲げると、最小限の変形に過ぎなかった先程とは異なり、パンドラは大きくその姿を変えた。瞬時に広がるように展開し、生み出されたその形状は、いわゆるロケットランチャーと呼ばれる兵器に近いものだ。

「こいつならどうだ……?」

ランチャーが持つ三つの銃口から放たれたミサイルが、群れなすダゴン達の中心部に向けて飛んでいく。大きく弧を描く軌道の後に着弾したミサイルは巨大な爆発を起こし、ダゴン達の巨体を上空へと跳ね上げた。

ダゴン達の驚愕と焦りの声をBGMに、ダンテはすぐさまパンドラを再変形させる。

「この際、勘を取り戻すためにもあれこれ使わせてもらおうか……!」

一気に収縮したパンドラが、次に見せた形状は、巨大な円刃が複数組み合わさってできたブーメラン様の兵器だった。

それを手にしたダンテはその場で一回転した勢いで、ブーメランを投げつける。ブーメランは一気に跳ね上げられたダゴン達に向かっていった。

ブーメランは一体のダゴンの周囲を旋回しながらその身を斬り刻み、それが終わるとまたすぐ次のダゴンを標的にして飛んでいく。それもまた魔鏡である以上、ただのブーメランではな

い。使い手の定めた相手を延々と斬り刻んでいくのだ。

爆風によって宙に舞っていたダゴンのうち、数体は地面に落下し、数体はブーメランの威力に負けるようにさらに上空へと跳ね上げられていた。

ブーメランを手元に戻したダンテは、その様子を見て微笑んだ。

「最後に掃除が必要だな……」

吹きと同時に、パンドラが待ち構えていたように再び形状を変化させる。

ダンテはこれまでにもパンドラを幾度か使用した事があったが、その中でも最も複雑な変形プロセスを有するのがその兵器だった。それを何と呼ぶべきなのか、ダンテには分からない。

パンドラを変形させようと最初に頭に思い描いた時にも、それが一般的に何と呼ばれる兵器なのかなどは考えもしなかった。

ダンテを取り囲むように、パンドラの一部が巨大な円形に展開する。そしてその円に取り付けられていく無数のランチャー。

以前その変形を目にしたトリッシュは、

「まるで子供ね」

と呆れたように言った。

言われてみれば、小さい頃、映画やコミックで目にした兵器に似ているような気もする。しかし子供ならずともそういう兵器を目にすれば心が躍るものだとダンテは思う。

「子供？ 違うな……これは男のロマンってやつだ」

その時には反論しなかった言葉の口にしなげら、やがて変形を終えたバンドラに、ダンテは乗り込んでいた。

宙に浮かぶ巨大な移動砲台。強いて言葉で説明するならばそう表現するべきかもしれない。

「吹っ飛ばせ！」

言葉と共に、ダンテは操縦桿にあたる部分を大きく押し倒す。

周囲に展開された無数のランチャーが、順を追ってミサイルを吐き出し始めた。

ミサイル達は航空ショーさながらに、白煙を上げながら中庭上空を駆け巡り、次々雨のようにダゴン達の周囲に着弾、爆発していく。

手加減のないダンテのその攻撃に、ダゴンはおろか設置されていた門までもが粉碎されていた。

それを眺めながらバンドラを元の形状に戻したダンテは大きく息を吐く。

死体ひとつ残さぬ圧倒的な破壊だった。

災厄兵器と呼ばれる事もあるという、バンドラならではの光景だ。

バンドラを地面に置いたダンテは、一度髪を掻き上げ、少し乱れていたコートを直した。

「さて……次、行くか」

バンドラを再度手に取ろうとしたダンテは、バンドラの蓋が開きかけている事に気付いた。

「う……おッ！」

慌てて足で押し倒すようにしてその蓋を閉じる。

そして何事もなかったのを確認して、安堵の溜息を吐いた。

バンドラは危険な兵器だ。使い方を誤れば自分の身さえ滅ぼしかねない。特にそのスーッケース状のまま放たれる攻撃は悲惨な結果を生む事は、以前身をもって体感している。

「城ごと吹き飛ばしかねないからな……」

呟いてダンテがバンドラを手にとると、突然地響きが起こり始めた。

何事かと周囲を振り返った後、ダンテは足元を見つめた。地面に、巨大な亀裂が走っていた。退避する間もなく、地面が陥没し、ダンテはそのまま地下へと落下していく。

「どっちにしろ、やり過ぎだったわけか」

バンドラを使うといつもそうなのだ。なまじ様々な使い方ができるだけに欲張って必要以上に大きく派手な攻撃を選んでしまう。

「やれやれ……遠回りにならなけりゃいいがな……」

想像以上に深いらしい穴の中を落下しながら、ダンテはぼやいた。



## STAGE 16



ベリアルは僅かな時の間に魔界で力を蓄え、再び人間界へと戻っていた。

完全に力が戻ったとは言いが難かったが、それでもなおベリアルを人間界へと走らせたのは、先に受けた恥辱のせいであった。自分の足程もない小柄な男に敗北を喫しかけたというその事實は、ベリアルにとって受け入れられぬ事実だった。

雪辱をせねばならぬ。あの男と今一度、戦わなくてはならぬ。その思いが、未だ傷癒えきらぬベリアルを人間界へと向かわせたのだ。

しかし男は現れなかった。

果たしてあの男は何者なのか。

小賢しい人間の生み出した小さな門の前に、ベリアルはその事を考えていた。

あの男は確かに悪魔の力を有していた。

しかし純粹なる悪魔であれば、ベリアルがそれと気付かぬはずはない。だからこそ、最初はその男が人間だと、ベリアルは思ったのである。

では、人と悪魔との間に生まれた者だということのか。

しかしベリアルは、そのような存在がそうそういるものだろうかと考える。

かつて、魔界の住民全てを裏切り、魔剣士スパードは人間を救うために戦った。そして人間の女との間に子を成したという。

ベリアルには、その事実さえ信じ難い。

何故に、人間のようなつまらぬ矮小な生き物を愛し、ましてその生き物との間に子を成さねばならぬのか。かつて、人間は悪魔にとって餌に過ぎなかった。魔界と人間界の分断された今でも、多くの悪魔にとってそれは変わらない。ベリアルにとっても同じ事だ。

「分からぬ……」

空を仰いで、ベリアルは呟いた。

そもそも何故にスパードは同胞を裏切ったのか。二千年前、ベリアルはまだ卑小な悪魔の一角に過ぎなかった。しかしそんなベリアルに耳にすら、魔剣士スパードの噂は届いていた。魔帝ムンドゥス公が魔界を統治する事ができたのも、その右腕として奮迅したスパードの存在あってこそなのだ、と。

直接会った事などはなかったが、ベリアルにとってスパードは憧れの存在であった。

自分もいつかあのようになりたいとさえ考えていた。だがスパードは裏切ったのだ。多くの同胞を殺め、魔帝を封じ、人間を救った。何がスパードをそうさせたのか。二千年経った今でも、ベリアルには理解し得ない。だからこそ、ベリアルには、スパード以外に人間と子を成す悪魔がいるなどとは想像もできないのだ。

自分に傷を負わせたあの男。あれは果たして何なのか。

或いはスパードにもう一人息子がいたのではないか。

それならば、あり得ぬ話ではない。

スパードの息子については、ベリアルも知っている。直接目にした事はないが、魔界にあって、幾度となくその噂は聞こえてきた。スパードが人間に擬した際の姿とよく似た、銀色の髪を持つているという。血のような色の赤い服を身に纏っているという。スパードと同じように剣を振る、同時に銃を用いるという。復活を遂げようとしていた魔帝を再度封じたその力は、スパード以上だともいう。

思い返せば、あの男もまた、聞き及んでいるスパードの息子と近い特徴を持っている。

だがあれがスパードの息子——ダンテであるはずはない。ベリアルがダンテの噂を耳にしてからも随分歳月が経っている。人間の血を引いているならばそれなりに歳を取るはずだ。

ベリアルが相対した男はどう見てもまだ若い。魔帝を再封印した際のダンテですら、あそこ

まで若くはなかったはずだ。

「考えたところで何も始まらぬな……」

そう独り言ちて、ベリアルは歩き始めた。

今やこの地は悪魔で溢れていた。配下の報告によれば、人間が地獄門を開いたのだという。

「人間め……」

ベリアルは遠く離れた空に浮かぶ、巨大な石像のようなそれを見上げた。

それが、人が生み出した神だという事もまた、配下の悪魔から聞かされていた。この地に住まう人間が、神を名乗り、悪魔をわざわざ呼び出して滅ぼそうとしているらしい。

そしてまたベリアルは思う。

人は愚かなのだ。その愚かな人間を救おうとしたスパードは、どこに救うべきものを見出したのか、と。

「神を気取り、世界を統べるつもりか……愚かな……」

かつてスパードに憧憬を抱いた身であるからこそ、ベリアルはその人間を何より疎ましく思った。スパードの志など何ひとつ理解はできぬ。しかし少なくとも、あのような愚かな存在を生み出すために人を救ったわけでもないだろう。

「……同感だ」

と、不意に背後から人間の声が届いた。

ベリアルは咄嗟に振り返ったが、そこには誰もいない。

「こっちだ」

声につられて再度振り返ったが、やはり人の姿はなかった。

「ぬ……」

ようやく、ベリアルは声の主が自分の尾に腰掛けている事に気付いた。

「貴様……ッ！」

慌てて尾を振り払うと、男はその勢いを利用して跳び上がり空中で数度回転して、衣服に燃え移っていた炎を消し去る。

着地した男は、先程まで燃え盛っていた衣服を気にしながら、

「気付くのが遅過ぎだ……危うく全部燃えちまうところだった」

と言った。

ベリアルは、男の姿を見て歯噛みしていた。

「貴様……貴様はッ！」

銀色の髪。血のような色の服。背中には人間にしては大ぶりの剣を背負ったその姿は、聞き及んでいるスパードの息子と瓜二つであった。

「……ようやく俺を知ってる奴に出会えたな」

男——ダンテはそう言って肩を疎める。ベリアルは剣を握る手に力を込めた。

「知らぬはずもなからう……多くの同胞を裏切り、魔帝を封じた忌まわしきスパード……その息子！ まさか貴様がここにいるとはな……！」

ダンテは小さく拍手をするような素振りをしてみせる。

「結構だ。最近、田舎から出てきたおのぼりさんが多いらしくて、誰も俺の事なんか知りやしねエ……悪魔どもに名を売りたいわけじゃないが、これっぽっちも知られてねエ、ってのも寂しいもんだ。俺の事知ってる方が、お前らだってやる気も出るだろう？」

ダンテと初めて対したベリアルは、何とよく喋る男だ、と思わずにはおれなかった。スパードは冷徹で寡黙だったと聞いていた。その息子もまた似たようなものだろうと勝手に想像していたのだ。しかし疑う余地はなかった。本人が自らの事をそうと認め、なおかつ、ベリアルの手が、この男の持つ力をひしひしと感じている。

以前刃を交えた男とは明らかに異なる感覚。あの男には、ここまでの力を感じはしなかった。「同胞の恨み……ここで晴らさせてもらおう……！」

剣を大きく振り構えながらベリアルがそう告げると、ダンテは小さく首を傾げた。

「ちょっと待ってもらってもいいか？」

と、唐突にそんな事を言う。

「何……？」

思わずそう問い返すと、ダンテはベリアルの後、人間の生み出した門の方を指差した。

「あそこにある物を回収しなくちゃいけない……ま、別にお前とやり合った後でも構わな  
いんだが、さっき道草食っちゃった分、用事は先に終わらせたいわけだ」

自分を前にして平然とそんな事を言うダンテに、ベリアルは憤りを感じずにはいられなかつた。それ程までに急ぐのであれば、自分の尾に座っている時間に来た事ではないか、と思う。

「ぶざけた奴め……」

一瞬、ベリアルはダンテに襲いかかろうかと考えたが、すぐにそれを制した。

ベリアルはもはや有象無象の悪魔とは違う。力を付け、炎獄と呼ばれる魔界の一面を統べる王者となった。その王者が、いかに憎き相手とは言え、自分よりも矮小な存在に不意打ちをかけるなどあつてはならぬ。

「……好きにしろ。用事を終わらせたところで、どうせすぐに死ぬ身だがな」

そう吹き、ベリアルはダンテに道を譲るように歩を下げた。

「悪いな」

ダンテは悪びれもせず堂々と門のある場所まで歩いていく。

「あんな男に、魔帝は敗れたのか……」

ダンテの背を見ながら、ベリアルは思わずそうこぼした。その魔帝にも、ベリアルは直接会った事はない。魔帝健在の頃、ベリアルはまだ卑小な存在で、目通りすら許される身分ではなかった。

今のベリアルであれば、それも許されるだろうが、当の魔帝が魔界と人間界の狭間に封じられていては許されたところで会う事はできない。

ダンテは門の傍で立ち止まり、小さな装置を蹴り付けた。光球がそこから吐き出されたのを見て、ベリアルは目を細める。

「魔具、か……」

おそらく門を生み出した人間が、そこに埋め込んだのだろう。どのようにして人間が地獄門に似た装置を生み出したのかを疑問に思っていたが、確かに魔具を用いたのであれば納得でき  
る。

「我に勝つのに魔具が必要という事か……」

光球状のままの魔具を携えて戻ってきたダンテに、ベリアルがそう告げると、ダンテは苦笑しながら、

「別にそういうわけじゃない。ただ、このへんまで来るとうっかり忘れそうだと思っただけ  
ね」

と言った。

「減らず口を……まあいい。折角手に入れたのなら、使うがいいだろう。何を持ち出したところ  
で、何も変わらぬがな……」

ベリアルがダンテに刃を突き付けると、ダンテは再度笑みを浮かべた。



「じゃ……お言葉に甘えるか……」

ダンテは光球を展開する。姿を現した魔具は、ダンテの背に取り付き、まるで翼のような形状に変化していた。その姿に、決して見覚えがあったわけではない。しかしその魔具から発せられている魔力は、ベリアルのかつて知ったるものに相違なかった。

「……ルシフェルか!」

思わず、ベリアルは叫んでいた。

ダンテは自身の背中に取り付いているルシフェルに目をやる。

「よく知ってるな。お友達か?」

ベリアルは狼狽していた。魔具の多くは、単純に悪魔によって生み出された武器に過ぎない。しかし中には、悪魔自身がその姿を変えたものが存在する。それは言わば悪魔の魂そのものだ。己が認めた相手に、己の魂を捧げる。悪魔が魔具となるのはそういう意味を持つ。

「何故だ……何故貴様がルシフェルを……!」

ルシフェルは、何度か面識のある悪魔だった。ベリアルが炎獄を続べたように、ルシフェルもまた魔界の一面を続べようとしていた。気位が高く、何があってもおよそ人間に手を貸すような悪魔ではない事はよく知っている。

「ちょっと前に仕事でやり合ってたな……ブツ倒したら勝手にこうなった」

ダンテのその言葉に、ベリアルは再度動揺せずにはおれなかった。

悪魔が魔具に転じるもうひとつの可能性を思い出したためだった。それは即ち、圧倒的な力の前に屈した時。体の奥底の魂すらも敗北を認めてしまったその時。己の意思とは無関係に、

悪魔は死に際し、魔具へと転じる。

「ルシフェル……!」

凶らずも哀れな同胞の姿を目にし、ベリアルはこれまで以上の激情が湧き起るのを抑え切れなかった。負けられぬという思いが何よりも強くベリアルの心を支配していた。

「ま、そっちの事情はどうでもいい。そろそろやるか」

ダンテがゆっくりと腰を下ろす。

それを見て、ベリアルもまた構えた。

大きく剣を振り上げ、そのまま正面に叩き付ける。だがダンテの動きは想像以上に速い。ベリアルは剣がダンテの居た場所に激突した時には、既にダンテは大きく跳躍し、ベリアル

の眼前に迫っていた。

ダンテは両腕を交差させ、背中のルシフェルに手を伸ばす。

そして無数の剣を引き抜いた。

「まずはこいつを……!」

ベリアルは剣でその一撃を防ごうとしたが、ダンテの攻撃の方が遙かに速い。

「突き刺す!」

叫びながら、ダンテはベリアル首筋に引き抜いた無数の剣を次々に突き立てた。ベリアル  
の巨体には、針程度でしかない剣だけに、痛みはさしたるものではない。腕でダンテの身体を  
振り払おうとすると、ダンテはその腕を足場にして後方に跳躍する。

着地と同時に、ダンテは新たな剣を引き抜いていた。そして踊るようにステップを踏んだ。  
決して本気で戦っているように見えぬ。それはベリアルにとって侮辱以外の何者でもな  
かった。

「愚弄するか……!!」

ダンテに向けて突進しながら剣を振り上げる。ダンテは転がりながらその突進を回避し、今  
度は、

「真っ直ぐに! 強く!」

ベリアルは腕に剣を突き立てた。

そう叫ぶダンテの真意が、ベリアルには理解できない。

戦いの最中に、この男は何を喋っているのか。何の意味があるのか。

再度剣を引き抜いたダンテは、ベリアルに小さな笑みを向けながら、

「あんまりすぐにイくなよ? その方がこっちも楽しいからな」

と言う。

「戯れ言を……ッ!」

ベリアルは大きく空を仰ぎ、その身に魔力を充填させた。素早さでは自分の方が劣っていた  
としても、回避し切れぬ範囲に攻撃を繰り出せば問題はない。

「うおおおおおッ!」

ベリアルは身体から生み出される炎が、周囲を焼き尽くすように広がっていく。

この攻撃で仕留められないまでも、ダンテは確実に炎から逃れるために後方に下がるだろう。  
一度間合いが広がれば、体軀で勝る自分の方がある。

ベリアルはそう考えていた。

しかしベリアルはすぐに、その自分の考えが誤っていた事を知った。

ダンテは後方に下がりなどしなかった。

逆に、燃え盛り広がる炎に向けて飛び込んできたのだ。

並の悪魔ならば一瞬にして焼き尽くされる地獄の業火を前に、ダンテは恐れる事もなく、そ  
の炎を突き破ってベリアルに向かってくる。ダンテの衣服には炎が燃え移っている。だがダン  
テはそれを気にする様子もない。

「時には大胆に……そして時には繊細に……!!」

予想を超えた行動であっただけに、ベリアルは言葉と共に剣が突き立てられるのを、防ぐ事  
ができなかった。

気が付けば、ベリアルは身体にはもはや十数本の剣が刺さっている。

しかしさしたるダメージはない。そもそもあの小さな剣では、いかに深々と突き立てたところでベリアルに致命傷など与えられるはずもない。

再度ベリアルから離れたダンテを、ベリアルは睨み付ける。

「そんなものか……スパーダの息子！」

そう叫び、剣を振り上げた時、ベリアルは見た。

ダンテの口に、一輪のバラが啞えられているのを。

「……終わりだ」

ダンテはそう言っ、ベリアルにバラを放り投げる。

「何を……！」

そのバラをベリアルが斬り裂くのと同時に、ベリアルに突き刺さっていた剣のひとつが大きく爆ぜた。そして次々に連鎖するように剣が爆発を引き起こしていく。

「これは……ッ!?」

ベリアルがその爆発の衝撃に仰け反った時、ダンテは満足そうな笑みを浮かべ、ベリアルを眺めていた。

「後はただ絶頂を迎えるだけだ……そして自由になる」

その言葉の意味も分からぬまま、ベリアルは身体は巨大な爆発に包まれた。

「おおおおッ！」

爆発に身を削られながら、ベリアルは悔いていた。ルシフェルという存在に気付いていながら、何故に今の状況を予想し得なかったのか。ルシフェルという悪魔が、爆発を操る力を持つ事など、とうに知っていた事であったはずなのに。

ダンテに気付く前に、余計な事を考え過ぎたせいかもしれない。

スパーダの事や、あのもう一人の男の事を。

思えば自分は戦う前から冷静さを欠いていたのではないか。

最後の爆発がベリアルを襲った時、ベリアルはその膝を地に突いた。

そもそも自分の力は完全ではなかった。

だがそれは言い訳にはならない。どこかで慢心していた。そしてどこかでダンテを侮っていた。この男は確かに強い。ルシフェルを用いようとそうでなかるうと、おそらくそんな事は関係ないであろう程に。

「このままケツ見せておうちに帰るってんなら……見逃してもいいぜ」

ダンテはそう言った。

ルシフェルが魔具と化してしまうのも理解できる。生半可な事でこの男に勝てるとは思えない。まして既に傷を負った今の状態では。

しかしベリアルにも誇りがあった。

悪魔としての意地が。

このままこの男に屈すれば、自分もまたルシフェルのように魔具と化すかもしれぬ。圧倒的な力を前に、魂すらも敗北を認めてしまいかもしれぬ。

それはただ敗北を喫するよりも深い屈辱に他ならない。

「既に一度退いた……二度目はない！」

ベリアルは剣を杖にして立ち上がり、眼前のダンテを睨んだ。

せめて一撃、この男に報いなくてはならない。

それが自分の誇りを保つ。

ひいてはこれまでダンテに屠られてきたであろう無数の同胞への報いとなる。

「このベリアル……貴様に魂までは捧げんッ！」

ベリアルは叫び、その身を纏う炎をさらに激しく燃え盛らせた。

ダンテはそれを見てなお平然としている。

自らの体内に炎を充滿させておき、その密度が頂点に達した時、ベリアルは炎を体外へと解放した。圧縮された炎が巨大な爆発を引き起こし、ベリアルの身体を四散させる。その勢いを

利用し、ベリアルはかろうじて残しておいた頭部だけをダンテ目掛けて撃ち出していた。

ダンテはそれを避けようともしない。

ベリアルがダンテの肩に食らい付くと、ダンテは笑った。

「貴様……何故避けぬ……！」

「さあ……気まぐれだ。気は済んだか？」

ベリアルは、一瞬この男になら全てを捧げてもいいという衝動に駆られた。しかしそれを

制したのは、微かに残っていたブライドであった。

「或いはスパイダの行動もまた、そんな気まぐれだったのかもしれない……」

ベリアルはそう呟き、そして最後に小さな炎となって、消えた。

仇を討てなかった事を、死した同胞達に詫びながら。

最初から避けるつもりすらないように見えた。それが理解できなかった。

ダンテは小さく首を傾げる。

「さあ……気まぐれだ。気は済んだか？」

ベリアルは、一瞬この男になら全てを捧げてもいいという衝動に駆られた。しかしそれを

制したのは、微かに残っていたブライドであった。

「或いはスパイダの行動もまた、そんな気まぐれだったのかもしれない……」

ベリアルはそう呟き、そして最後に小さな炎となって、消えた。

仇を討てなかった事を、死した同胞達に詫びながら。



ベリアルと名乗った悪魔に打ち勝ったダンテは、手早く門を破壊し、その先に見える神の姿を見上げた。遙か遠方にいる神は、その場からは掌に収まる程の大きさでしかない。

その神に手をかざし、握り潰すように拳を折り畳んだダンテは、

「もうちょっとで手が届きそうだな、神サマよ」

と呟いた。

既に三つの魔具は取り戻した。

取り戻すべきものはあと二つ。そのうちのひとつは神の中にある。

「と、なると……とりあえずはあとひとつ……」

地獄門を解放した閻魔刀を取り戻さなくてはならない。地獄門を再度封じらるためであり、ネロを救うためでもある。

ネロは神に取り込まれた。それがどういう理屈なのかまでは、ダンテには分からない。しかし最悪の場合、ネロの身体はあの神の中に溶け込んでしまっている可能性がある。普通ならばもはや救えぬ状態。

しかし閻魔刀があれば、それは決して不可能ではない。

人と悪魔を分かっつ。

閻魔刀のその力があれば、悪魔と一体化したネロを再び切り離す事ができる可能性が高い。

「世話のかかる坊やだ……」

ダンテは呟き、歩き始めた。

地獄門のある場所は街の中央部だ。一度訪れているからもはや迷う事はない。さして時間もかからないだろう。

それにしても、とダンテは思う。

自分がこの地を訪れたのは本当に偶然だった。

レディからの依頼がなければ、フォルトゥナという地名すら知らぬままだっただろう。だが気まぐれで依頼を受け、この街を訪れ、そしてあのネロに出会った。

運命という言葉を、ダンテは決して好きではない。

好きではないが、どこかしら運命的な物を感じるのには確かだ。

「巡り合わせ、ってやつかね……」

ネロがどんな生い立ちの果てに生まれてきたのかは知らない。真実はもはや追い求めようがない。ネロの父親が誰なのか、母親が誰なのか。

しかし少なくとも、ダンテはネロと刃を交え、限りなく自分に近い血を引く者であろうと感じた。それだけで充分だった。

先行してフォルトゥナに潜入したトリッシェから、閻魔刀の破片がこの地にあると聞いた時、ダンテはそれを取り戻さねばならないと考えた。

父スパードが残した魔剣、そして兄が振るった魔剣を、他人の手に委ねておく事はしてはならないと思った。それがスパードの血を引く者としての義務だと。

だがその閻魔刀を復活させた若者がいた。あの魔剣に反応し、執着するあのネロという男が、この地にいたのだ。

それはやはり、好きな言葉ではないが、何かしらの運命なのかもしれない。

「預けるのもアリか……あの坊やにその気があれば、だけどな……」  
 昔の自分なら、そんな事は考えなかっただろう。  
 だがダンテもそれなりに年を取った。悪魔の血を引いているとは言え、年齢の取り方は人間のそれと大差ない。

その歳月が、ダンテに幾ばくかの柔軟さを与えている。  
 かつて父スパイダは、ダンテに魔剣を預けダンテ達の前から去った。  
 それからどこに消えたのか。ダンテは知らない。

死んだのかもしれないし、生きているのかもしれない。

だがその事自体は重要ではないとダンテは思う。

大切なのは、父が自分達に未来を託したという事実だ。

ダンテもまた、いつかはそうせねばならないのだろう。スパイダのように子を成すか、或いは別の者に。

そして受け継ぐ資格のある者が、少なくともこの地に一人いる事になる。

「ま、助けてから考えるか……」

不似合いな考えをしてしまった事を自嘲しながら、ダンテは先を急いだ。



## STAGE 17



アグナスは、地獄門を解放した後、大歌劇場の中でただダンテの到来を待っていた。

ダンテならば必ず、神と相対する前にこの場を訪れるという、確信に近い何かがあった。

神が完成し、地獄門が解放された今、残された問題はダンテの存在だけと言って良い。

完成した神ならば、ダンテを勞せず倒す事もできるだろう。しかし、アグナスは敢えて己の力でダンテを倒したいと考えていた。

神を完成させる前ならば、そう考える事はなかった。

ダンテの力は既にある程度分析している。自分の力ではダンテには敵わぬ公算が高い事は、科学者であるアグナスにはよく分かっている事だった。

しかし、今は違う。

地獄門が開かれた今ならば。

アグナスは帰天する際、過度の力を求めはしなかった。サンクトゥスのような庄倒的な魔力も、クレドのような強靱な肉体も、求めなかった。

既存の悪魔から力を抽出する以上、いかにそういった力を求めようと限界がある事に気付いていたからだ。

だからアグナスはたったひとつの能力だけを求めた。

それは他者から魔力を吸収する、そういう能力だ。

その能力は、決して有益とは言えない。

何せ、人間界には魔力を有した存在そのものが少ないのだ。

魔界からちまちまと悪魔を呼び出したところで呼び出せる悪魔は下等な存在が多く、効率的に魔力を摂取する事も難しい。

だが今はどうだ。

地獄門は開かれ、今やこのフォルトゥナの地には魔力が充満し、魔界に近しい状態となっている。

悪魔を呼び出さずとも、ただそこに座しているだけで流れ込んでくる膨大な魔力。

「素晴らしい……素晴らしい……ッ！」

着々と自分の体内に魔力が蓄えられているのを感じながら、アグナスはほくそ笑んでいた。今の自分なら、ダンテに勝つ事も決して不可能ではない。

そして仮に勝てずとも、その時はダンテ自身から魔力を吸い上げてしまえば良い。そうすればダンテは弱まり、自分はさらに力を得る事ができる。

「どれ……それを踏まえて勝率でも計算してみるか……」

魔力を吸い上げるために天使の姿に変えていたアグナスは、そう呟いて人間の姿に戻ると、懐から愛用のメモ帳を取り出して数式を書き出し始めた。

だがすぐにその手を止めた。

大歌劇場の周囲にはあらかじめ、アグナスの手によって強力な結界が張り巡らされている。

下等な悪魔であれば足を踏み入れる事などできない結界だ。そして、結界を破る程の力を持った悪魔が侵入して来た際、アグナスはその場にいながらその事実を知る事ができる。

「来たか……」

呟き、アグナスはメモを閉じた。

自分の生み出した結界をわざわざ踏み越えてまでこの歌劇場の中に侵入しようとする悪魔、しかも結界を打ち破る程の力を持った悪魔、それはダンテ以外にはありえない事をアグナスは知っていた。

「予想より早かったな……しかしそれも誤差の範囲内か……であれば、私が負ける可能性はゼロに等しい……」

閉じたメモを懐にしまいながら、アグナスは歌劇場の入り口を見やった。

そして小さな笑い声を上げながら、壇上へと歩を進める。

「魔剣士スパーダの息子というその生い立ちに敬意を表して、貴様の死に場所にはこの壇上を  
選ばせてやろう……だが貴様は主役ではない。我らが神の引き立て役に過ぎんのだ……」  
それだけを呟き、アグナスは静かに目を閉じた。



微かに微臭い大歌劇場の中を進むにつれ、煌々とした明かりが目差し込んでくる。

それはフロア全体を照らすためのライトではなく、舞台などで演出に用いるピンスポットライトの光だった。

壇上では一人の男が、その眩いばかりの光の下で俯き、何かを呟いていた。それがトリッジュから聞かされていたアグナスという男だという事は、ダンテにはすぐ分かった。がっしりとした長身を窮屈そうに畳み込んだ猫背、癖の強そうな黒髪、時代がかった片眼鏡。全てが事前  
に与えられている情報と合致する。

アグナスは、ダンテの存在にまるで気付いていないように、背を向けたまままで独り言を繰り返していた。

不意討ちなどあまり好まないダンテは、敢えて足音を潜ませるような事もせず、堂々とした

足取りで壇上に足を上げた。古びた木製の床と、ブーツの硬いソールが触れ合う音は、あまりに露骨に劇場内に響いた。

しかしそれでも、アグナスはダンテを振り返ろうとはしなかった。  
それを見て、ダンテは足を止める。

アグナスの真意を測りかねたのだった。ダンテに気付いておらぬはずなどない。しかしそれでも何故に、この男は自分を無視し続けるのか。

ともすれば卑劣な不意討ちを仕掛けてきてもおかしくないような立場の者であるはずなのに、アグナスは依然ぶつぶつと何かを呟いているばかりだった。

ダンテはその言葉に耳を傾けた。

「なんと愚かな生き物なのだ……人間は……おお、人間は……！！」

まるで演劇のような台詞回しだった。見ればアグナスは人間の頭蓋骨をその手に抱いており、それに向けて語りかけているのだ。

ダンテは周囲を見回した。

仄暗いこの劇場の中、今光を浴びているのはアグナスだけだった。

それは今この状況において、アグナスが非常に重要な役割を演じている事を示している。

一方で、ダンテは何の光も浴びず、存在に気付かれる事もないまま壇上に立っていた。  
それでダンテはアグナスの意図を何となくではあるが理解していた。



貴様などは端役に過ぎぬ、そう言いたいのだ。

この場でダンテに与えられるのは、その存在を無視され続け、そしてそれに憤りを感じて不意討ちを仕掛ける程度の役なのだ、と。

だからアグナスはダンテに気付かないふりをしている。

ダンテが不意討ちを仕掛けたところで、軽くあしらってやるという自信が、その背から滲み出ているようにさえ見えた。

ダンテは小さく口元を歪め、それからアグナスに背を向けた。相手の狙いそのままに行動するつもりなど、ダンテには毛頭なかった。

足音を殺し、壇上を歩くダンテが向かったのは、舞台袖だった。

一般的な劇場であればそこに照明機材などの設備がある。この大歌劇場もまた、その例に漏れなかった。

照明装置らしき機材に目を落とすと、その盤面には小さく灯された緑色のランプがひとつ、そしてその他には赤いランプがいくつも並んでいる。察するに緑色のランプが今壇上を照らすピンスポットライトを表しているのだろう。

それを破壊するというのもひとつの手ではあった。

そうすればアグナスを照らすライトは消え、アグナスの目論見は崩れる事になる。しかしそれはつもらない。

無論、アグナスの目論見を台無しにしてやる事は必要だ。思い通りに動いてやる程、自分も親切でも素直でもない。

だったらどうするか。

「考えるまでもねえな」

ダンテは呟き、壇上のアグナスを振り返った。

「おお！ そして！ 愚かゆえに！ それゆえに人は一度地獄を味わわねば、神の存在を信じる事はできぬのだ！ 何という皮肉……！」

感極まったようにそう台詞を吐いて、アグナスは手にしている頭蓋骨を握り締めた。

それを確認して、ダンテは緑色のランプを点灯させているスイッチを即座にオフにしてみせた。予想通り、壇上のライトが消灯する。

「じゃ、こっちは隣のライトか」

そしてすぐに隣のスイッチをオンにすると、アグナスとは少し離れた場所をピンスポットライトが照らす。

光越しに、アグナスがやや狼狽したように振り返ったのが舞台袖からも分かった。

ダンテはほくそ笑みながら、悠々とまた壇上へと戻っていく。

そして、新たに点灯されたピンスポットの光を浴びる場所で立ち止まった。

「悪魔を呼び出し、それを殺して神を気取ろうとは——」

体はあくまで誰もおらぬ客席に向けたまま、僅かに視線だけをアグナスに向けて、ダンテは口を開いた。

「正気の沙汰とは思えぬ所業……それが正義というのなら、世に正義などはあるまいよ」

極力、この風情ある大歌劇場に似つかわしい言い回しを心がけながら、ダンテがそう言い終えると、アグナスは忌々しそうにダンテを睨み付けた。

一人舞台と言わんばかりに台詞を読み上げていたアグナスにしてみれば、ダンテが唐突に、予想外の役割を演じながら割って入ってきた事が面白からうはずもない。まして自分を照らしていたライトさえ既にダンテに奪われてしまっているのだ。

「しかし……」

ダンテは歯噛みしているアグナスを尻目に台詞を続けた。

「そんな議論も今や無意味。ならば俺の興味を煽るのは……貴様らが持つ、人と魔を分かっ剣のみだ」

その台詞を終えた後、ダンテはゆっくりと歩きながらピンスポットの光によって生み出された光の輪から抜け出した。そして数歩を歩いた後に、アグナスの方を振り返る。

待ちかねていたかのように、アグナスはその光の下に駆け込んでいた。

余程、ダンテに光を奪われた事が口惜しかったのだろう。

「闇魔刀の事かあッ！」

再びピンスポットの光を浴びたアグナスは、興奮を抑え切れぬ様子で声を張り上げた。

「貴様が！ 求めているのは！ 人と魔を分かっ剣とは！ 私がこの場で守る闇魔刀の事であらうッ！」

やや行き過ぎた感のある、白熱した演技だった。この舞台上では自分の方が重要な役割を持つのだという事を殊更に誇示しているように見える。

どこか憎めない男だと、ダンテは思った。

悪魔の力を欲しさえしなければ、そして人ならざる者に身を落としていなければ、この男をそれ程憎いとは思わなかっただろう。

だが教皇と共にこの男もまた諸悪の根源である事をダンテは知っている。

「残念だ……」

ダンテはそう呟いた。

ダンテの台詞を受けて、アグナスはその身を悪魔に変じさせる。教団が天使と主張する、悪魔の姿に。

「さあ！ かかってくるがいい！ 悪魔よ！ 我こそは神の使徒！ 天使長アグナス！ 貴様ごとき悪魔など、我が聖なる炎にて焼き尽くしてくれよう！」

変身と共に携えた巨大な剣を振り回しながらそう叫ぶアグナスを見て、ダンテは笑った。

「いいだろう……天使と剣を交えるなど、我が身に余る光栄だ……」

背中に担ぐリベリオンを手に、ダンテはそう答えた。

ゆっくりと腰を落とし身構えると、アグナスも同様に構えを取る。

「お互い下手な芝居の時間は終わりにしよう……ここからは、真勝負だな……」

ダンテが言い切ると同時に、アグナスが大きく剣を振りかぶる。

決して鋭いとは言えぬ太刀筋で振り下ろされた大剣を、ダンテはリベリオンで弾き上げた。

そのまま剣を切り返してアグナスを斬り払うが、アグナスは即座に昆虫のような翼を羽ばたかせて後方に飛ぶ。

「フン……も、も元より剣だけで貴様を倒そうなどとは思っておらん……言っただけだ。我が聖なる炎で、や、焼き尽くすとな！」

アグナスは言葉をつかえさせながらそう告げると、空中で大きく身を折り畳んだ。

同時に、アグナスの翼が怪しい色に煌き始める。それは解放された地獄門、或いは教団が生み出した擬似地獄門が放つ煌きとよく似ていた。

「……バジリスク！」

アグナスの叫びと共に、煌いた翼から四匹の生物が飛び出してくる。

石でできたような肉体、そして燃え盛る頭部を持った犬のような悪魔だった。

バジリスクと呼ばれたその犬は、ダンテを見るや唸り声を上げ、身を低く沈めた。その瞬間、燃え盛る頭部だけが体から切り離され、弾丸のように射出される。



「おお……ッ!?」

二発まではリベリオンで防いだダンテだったが、三発目、四発目と腕で受ける格好になった。さしたる威力ではなかったが、炎が瞬間にコートに燃え移り、ダンテはすぐさま腕を振るってその炎を消し止める。

「……ただの燃えてるワンちゃんかと思ったがな」

頭部を射出し首のなくなったバジリスクは、再度身を沈め、それから大きく体を仰け反らせた。遠吠えと共に、新たな燃え盛る頭が生み出される。そして四匹のバジリスクは、猟犬が獲物を追い込むように、ダンテの周囲を駆け回り始めた。

アグナスがそれを見て笑う。

「そ、せいづらは魔銃と猟犬をかけ合わせて生み出した生物でね。一匹一匹はそれ程の力は持たんが、む、群れをなせば実に手強くなる……」

聞いてもないバジリスクの素性を語るのは、研究者としてのプライドがそうさせるのかもされない。

アグナスの言葉に耳を傾けている最中に、背後に回り込んだバジリスクが頭部を射出してくるのを気配で察知したダンテは、振り返らぬまま引き抜いたエポニーでバジリスクを撃ち抜いた。

そのままもう片方の手でアイポリーを抜き、前方のバジリスクに向けて乱射する。か弱い鳴

き声と共に、バジリスクが吹き飛ばされる。

すぐさま残り二匹のバジリスクも同じように射撃で撃退すると、ダンテは指先でエポニーとアイポリーを回転させ、そのまま二つの銃口をアグナスへと向けた。

「甘く見てもらっちゃ困るな……こんなワンちゃんにやられてやる程、動物愛護の精神豊かじゃないんでね!」

叫び、ダンテはアグナスに向けて一気にエポニーとアイポリー双方の引鉄を引いた。

「チッ!」

危機を察し、アグナスはダンテの銃口から逃れるようにさらに上方へと飛翔する。

上昇しながら、アグナスはさらに数体のバジリスクを翼の煌きから召還していた。しかし今度はそこから地に降り立つことなく、頭部だけを羽から突き出し、弾丸を射出する。

ダンテの放った弾丸は、射出された頭部と相殺された。

射撃を継続して行おうとしたダンテだったが、ざわつくような感覚と共に足元に異変が起りつつある事に気付いた。

足元の床もまた、アグナスの羽と同じ煌きを発していたのだ。

咄嗟にダンテが飛び退いた直後、床の煌きから数匹の魚のような悪魔が飛び上がってくる。それは鯨のような巨大な背びれを持っていた。そしてその背びれが、まるで曲剣のように鋭い光を湛えている。それもまた、アグナスによって生み出されたものなのだろう。

「ワンちゃん次はおサカナちゃんか……大した調教師だな……」

一度飛び上がったカットラスは床下に潜り込み、背びれだけを突き出したまま床下を泳ぎ始めた。銃で撃つとみると、背びれの部分はかなりの強度を持っているらしく、弾丸が全て弾かれてしまう。

「貴様こそ、わ、私の研究を甘く見ない事だな……!」

突進してくるカットラスの猛攻をかわしながら、ダンテはアグナスに向けて何度か発砲したが、縦横無尽に室内を飛び回るアグナスには命中しなかった。

アグナスは常にダンテと付かず離れずの距離を保ち続けている。呼び出されたカットラスを先に始末してしまおうと、アグナスはすぐに翼から新たなカットラスやバジリスクを補充した。そうやってダンテの消耗を待つつもりらしい。

「面倒臭エな……」

常に飛翔しているアグナスに近付いて斬り込む事も考えたが、それもなかなか手間がかかりそうだった。ダンテは溜め息を吐き、銃を取めた。

ダンテの周囲では数匹のカットラスとバジリスクが旋回している。ダンテを取り囲む円が次第に小さくなっていくにつれ、アグナスは勝ち誇ったように笑った。

「か、かか観念したか……?」

それに答えぬまま、ダンテは一度、目を伏せた。

そのダンテを、バジリスクの射出した頭部と、カットラスの背びれとが襲う。ダンテがそれら全ての攻撃を抗う事なく受け入れた。全身が燃え上がり、胸部、脚部を大きく切り裂かれたダンテは、力なく床に膝を突くしかなかった。

それを見て、アグナスはダンテを取り囲む悪魔達を一度、退かせる。

ダンテがなお立ち上がろうとしない事を確認してから、アグナスはゆっくりとダンテに近付いてきた。

ダンテはゆっくりりと、ふらつきながら立ち上がる。

アグナスはゆっくりと剣を振り上げた。

「地獄門が開かれ膨大な魔力を吸収した今、こ、この私に勝てるはずなどないのだ……貴様がスパーダのむ、む息子子であらうとな……」

アグナスの言葉を聞き、ダンテは小さく微笑んだ。アグナスの怒りを誘うように。「し、ししし死ねッ!」

予想通り、アグナスは激昂した様子で剣を振り下ろしてくる。

「……それでいい」

呟き、ダンテは低く腰を沈め、両の腕に力を込めた。

アグナスの振り下ろした剣を、眼前に構えた腕で受け止める。

本来ならば深く身肉に食い込むはずの刃は、激しい音と共に後方へと弾かれた。

「何……だと……？」

衝撃で一步後ずさったアグナスは、狼狽しながらダンテを見やった。無論、ダンテは何も手にしてはいない。徒手空拳のままだ。

「し、死に損ないめ！」

再度、アグナスが剣をダンテに向けて叩き付けてくる。

ダンテはそれもまた腕だけで防いだ。瞬間的に魔力を集中させる事で、腕を硬化させているから、傷を負う事はない。しかし、ほんの僅かでもタイミングを誤れば、まともに相手の攻撃を受ける事になる。身体を硬化させていられるのは、一瞬の間でしかないのだ。

「き、きき貴様アツ！」

アグナスは我を失ったように幾度もダンテに対して剣を振るった。だがその全ては、ダンテのガードの前に無に帰した。

バジリスクやカットラスの攻撃を甘んじて受け入れたのは、そうしてアグナスを誘い出すために他ならない。プライドの高い男だからこそ、アグナスは確実に自分の手でダンテを仕留めようとする。ダンテにはそれが分かっていた。

そしてプライドの高さ故に、一度攻撃を阻まれればそこに怒りを感じる。相手が万全の態勢ならともかく、ダンテは傷付いているのだ。そんなダンテに自分の攻撃が通用せぬはずはない。アグナスはそう考えたはずだ。

だからこそ、今、アグナスは今までのようにダンテと距離を取る事もせずには剣を打ち込み続けているのだ。

アグナスは優秀な研究者だ。

ダンテもそれについては認めていた。悪魔を利用しようとする人間は多く見てきたが、様々な悪魔を生み出し、或いは巨大な兵器を完成させ、これ程の実績を上げた者はいなかった。

しかし同時に、アグナスは研究者として二流であるともダンテは思う。

そう評せざるを得ないのは、多分にその性格ゆえだ。

冷静さを欠いた研究者程、哀れなものはない。

「貴様！ わ、悪足掻きをするなッ！」

叫びながら、それでもアグナスは剣を振るっていた。

アグナスがもう少しだけ落ち着きを取り戻していたら、ダンテの狙いにすぐに気付けただろう。あとほんの少しだけ己の研究に対するプライドを緩める事ができれば、ダンテがあんな攻撃をわざわざ受ける理由などない事に勘付いただろう。

「ぼちぼち終わらせるか……」

アグナスがこれまでの中で最も大きく剣を振り上げたのを見て、ダンテは眩き、アグナスの繰り出した渾身の一撃に対し、大きく前へと踏み込んでいた。

腕に魔力を集中させる事は、攻撃を防いでいた時と何ら変わりはない。しかしそれはアグナ

スの剣を受け止めるためではなく、全く正反対のために用いられた。

アグナスの剣撃を紙一重でかわしながら、降下させた腕を突き出し、一気にそれをアグナスの腹部へと激突させる。アグナス自身の推力と、ダンテ自身の推力とがかけ合わさったその一撃は、アグナスがいかに強度な外皮を有しているようにも容易に打ち砕けるだけの質量を秘めていた。

「……さすが天使様だ。普通の連中なら今頃、粉々になってるところなんだがな」

拳を引きながら、アグナスとすれ違うように移動したダンテは、アグナスを振り返りながらそう告げた。アグナスは、何が起こったかも自覚できていないらしく、ただ呆然と立ち尽くしていたが、やがてゆっくりと前に倒れ込んだ。

「聞こえてるか？ それともノックアウトか？」

ダンテが首を傾げると、アグナスは震えを堪えながら立ち上がる。

「い、いいい今のは……？ 何が……ななな何が……何が起こった!？」

それなりに力を持っているからこそ、そしてアグナスが研究者だからこそ、アグナスには己がダンテの攻撃を知覚できなかった事が信じられぬのだろう。およそ六十分の一秒程の僅かな時間、その刹那の間に、ダンテはアグナスの攻撃をすり抜けてカウンターによる一撃を加えた。ただそれだけの事だった。だがそれだけの事ゆえに、アグナスはその可能性に気付く事ができない。アグナスは己の力を過信している。ダンテを見くびっている。よもやそのような奇跡の

ようなタイミングでのカウンターを受けるとは想像もできぬはずだ。

「何か……まだ何かあるのか？ わ、わわ私の知らぬ悪魔の力が……！ 貴様にはまだ、秘密が……あると……っ！」

ダンテを振り返ったアグナスの身体は、既に崩壊を始めている。ダンテが何も言わずアグナスを見つめていると、アグナスは再度宙へと飛び上がった。

「か、か解明してやる……ッ！ 貴様のその力！ 今度こそ……！」

叫んだアグナスが、全身に力を満ちさせていくのが分かった。何かをしようとしている。それに気付きはしたが、ダンテは何もしなかった。

「まずは……まずは貴様の力を……ッ！」

空中で大きく仰け反ったアグナスの翼が、また怪しく煌き始めた。だがそれは悪魔を呼び出した際の色とはまた異なる煌きだった。直後、アグナスの翼が唸るような音を立て始め、ダンテは己の魔力がアグナスの翼に吸収され始めている事を知った。

「……そんな事もできるのか」

見れば、周囲を取り囲んでいたバジリスクやカットラス達もまた、魔力を吸い取られているらしい。力なく伏せり、溶けるように消えていく。

「武器兼食料、つてわけだ。ワンちゃんもおサカナちゃんも可哀想に」

泰然としているダンテに気付いたアグナスは、ダンテの魔力を吸い取りながら、不敵な笑い

声を上げる。その身体の傷は、先程に比べ幾分癒されていた。

「こ、この能力がある限り……貴様に負ける事はあり得ない……あり得んのだッ！」

ダンテは苦笑する他なかった。

「仕方ねえな……さっきので仕留められなかった事だし……ちょっとばかり本気出すか」

呟いて、大きく息を吐くと、ダンテは目を閉じた。

全身の細胞ひとつひとつに魔力を行き渡らせる事で、ダンテの肉体は人間とは異なる姿へと変化を始める。

内に眠る力の解放。

悪魔の引鉄。

アグナスに魔力を吸い取られながらも、それを上回る速度で、ダンテの肉体に魔力が満たされていく。

完全に悪魔の姿へと変化したダンテは、ゆっくりとりペリオンを手に取り、それを引き付けるように構えた。

「そ、その姿……!」

ダンテの姿を見たアグナスが、一瞬うろたえ、空中で微かに高度を落とした。

ダンテはその隙を突くように、リペリオンを抉るように突き出しながら、一気に床を蹴り付ける。

その姿に変じぬままでさえ悪魔の巨軀を吹き飛ばす程の破壊力を秘めた必殺の突きは、もはや人間の目には見えぬ速度を与えられていた。

そして突きに込められた夥しい量の魔力は、ダンテの肉体とリペリオンから外界へと溢れ出し、漆黒の螺旋を描く。

「碎けるッ!」

真っ向から衝突したりペリオンの剣先が、アグナスに深く突き刺さり、しかしその衝撃の激しさに、瞬く間にアグナスの身体を弾き飛ばす。

「うおおああっ!」

ダンテが変身を解除すると同時に、地に落ちたアグナスもまた、人の姿へと戻っていた。

「ちょっとサービスし過ぎたか。だいぶ傷を治させちゃったからな……」

またしてもアグナスが原形を留めている事に多少落胆しながらも、ダンテはゆっくりとアグナスに近付いていった。アグナスは攻撃を受けた事で人の姿に戻った。それはアグナスの身体に満たされていたはずの魔力が尽きた事を意味する。それも時間が経てばいくらか回復はするだろうが、今度ばかりはもうそんな時間を与える気もなかった。

人の姿のアグナスならば、仕留める事は容易い。

「な、な何なんだ……何故だッ! 何故貴様に勝てん……そんなはずがないッ! わ、わ私の研究に間違いはない! 今の私なら、貴様にここまで一方的に負けるはずなど……!」



ふらつきながら、アグナスは怯えたようにダンテを見る。ダンテはリベリオンを背中に担ぎながら、エポニーを引き抜き、答えた。

「簡単な答えさ。お前が人間を捨てたからだ」

「な、に……!?!」

アグナスは目を見開いた。ダンテの言葉を信じられぬという表情だった。

「人間を!? 馬鹿を言うなッ! 大体、き、貴様も人間ではなかるうが!」

それをこの男に言われる事は、ダンテにとっては苛立ちを禁じえなかった。その苛立ちを隠すために、ダンテは頭を掻き、そして深く息を吐く。

「お前は人間を弱っちいと思ってるらしいな……。確かに、人間はちっほけだ。すぐに傷付く。悪魔に襲われりゃ、ひとたまりもない。だがな、人間はひとつだけ、悪魔に負けない力を持っている。知ってたか?」

ダンテの問いに、アグナスは慌てた様子で懐からメモ帳を取り出した。

「な、何だ! 何だそれは! おお教えてくれ! 今後の研究の参考にしたい!」

そう詰め寄ってくるアグナスに、ダンテはまた深い溜め息を吐いた。

もはやアグナスは正気を失っている。自分の一撃のせい、或いは敗北を受け入れられぬ葛藤のせい。いずれにせよ、もうダンテにできる事は、アグナスを解放してやる事だけだった。

「悪いが、そいつは宿題にさせてもらうぜ」

そう告げて、ダンテはアグナスのメモ帳を撃ち抜いた。衝撃でアグナスの手から離れたメモ帳は、ページがバラバラになり、上空へと舞い上がる。

「ああ、あ、あ……ッ!」

取り乱し、アグナスはそのメモの断片を回収しようと何度も空を掻いた。

ともすれば滑稽な光景だった。喜劇のような。

けれどこれは悲劇なのかもしれないとダンテは思った。

道を踏み誤らなければ、この男にはもっと別の人生が待っていたような気がする。

「あの世でしっかり勉強してきな。生まれ変わったらまた会おう」

メモのページを拾い上げて満面の笑みを浮かべているアグナスの眉間を狙い、ダンテは引鉄を引いた。撃ち放たれた弾丸は、アグナスが眼前に掲げているメモと一緒に、アグナスの頭部を貫く。

吹き飛んだアグナスの身体は、舞台壇上から客席へと落下し、そして客席のひとつに座るよりに倒れた。その死に顔を隠すように、宙を舞っていたメモの一片が舞い降りる。

それはまるで、己を寵愛してくれた主人への返礼のように見えた。

「メモ帳の方がよっぽど人間らしい真似しやがるな……」

そう呟いて、ダンテは自分を照らすライトを見上げた。

そして銃口をそのライトに向ける。

引鉄にかけた指に力を込めると、放たれた弾丸がライトを碎き、劇場内は闇で満たされた。「そして残るは沈黙のみ、か……」

シェイクスピアの書いた台詞を諳んじながら、ダンテは闇魔刀が眠っているであろう場所を求めて歩き出した。

もしもあの世という物が現実存在し、アグナスがそこで考え続けたとして、ダンテの問いに対する答えに辿り着くだろうか。暗い劇場の中を歩きながら、ダンテはそんな事を考える。それはいたってシンプルな答えだ。言葉にすればたった一文字。けれど何よりも価値があるもの。そして口にすれば途端に安っぽくなるもの。

「ま、自分で気付かなくちゃ意味がねエしな……」

そう口にした時、ダンテは地下へと続くらしい階段を見付けていた。



## STAGE 18



悪魔に怯える住民達を避難させる事は、それ程困難な事ではなかった。彼らの多くはひどく混乱しており、トリッシュが何者であるかなどという事など気にする余裕すら失っていた。だから彼らは、トリッシュの導くままに歩を進めた。

だが正直に言ってしまうと、無数の悪魔が蔓延る今のフォルトゥナに安全な場所などない。そこでトリッシュは、市街地から幾分離れたカエラ港に彼らを集結させた。そこが付近一帯では最も広々とした場所であり、多くの人間が集うには最適である事を知っていたからだ。

港の貨物倉庫に住民を集めたトリッシュは、彼らにしばらくの間外に出ぬよう命じ、倉庫の周囲に簡易の結果を施した。トリッシュ自身にそういった能力はないが、それもある種の魔具を用いれば可能な事だった。教団にはそういった魔具が溢れていたから、そのうちのいくつかを抜け出す際に失敬しておいたのだ。

そうしてひとまず住民の安全を確保したトリッシュは、迷う事なく市街地の中心、地獄門のある場所へと向かつていた。

ダンテと別れてから結構な時間が経っているにも拘わらず、地獄門が未だ機能している事に不安を感じたためだった。

よもやダンテが敗れたなどという事はあり得ない。その可能性を疑ったりはしない。が、ダンテの多少ルーズな部分をよく知っているだけに、トリッシュの頭には別のいくつかの可能性が浮かんでいた。

道に迷っている、遊びすぎて時間を食っている、地獄門の中に飛び込んでいった……など、ダンテならやりかねない事はいくらでもある。

こんな状況で、と思いはするが、こんな状況だからこそそういった行為に及んでしまうのがダンテという男だった。彼の相棒として活動していたトリッシュだからこそそれが分かる。

しかし一方で、不意に生真面目な一面を見せるのもダンテの特徴ではあった。

特に悪魔が絡めば、その傾向は顕著になる。ダンテは悪魔を憎んでいる。そして悪魔が人を傷付けるといふ行為を何よりも劣悪な行為と考えている。

だからダンテは悪魔を相手にする時、その根本にある熱い魂までは失ったりしない。どんな軽口を叩こうと、真面目に仕事をこなす。

「……とは思うけどね」

そう呟いて、しかしダンテは人に期待されれば裏切りたくなるような男だという事もあるし、などと、トリッシュはまた延々ダンテの事を考え続けた。

自分の不安が杞憂に過ぎなかった事を知ったのは、もはや地獄門まであと僅かという距離になってからだだった。それまで無数の悪魔を吐き出し続けていた地獄門が、不意にその機能を停止したのが見えた。程なくして、全面を覆っていた煌きも取まり、地獄門はただの巨大な板——住民達に聖碑と呼ばれていた頃の姿に、戻っていた。

安堵の溜め息を吐きながら門に近付こうとしたトリッシュは、門からいくらか離れた広場にダンテの姿を見付けた。トリッシュのいる場所では聞き取れなかったが、ダンテは何かを咬き、そしてゆっくりと腰を落とした。

その手には、鞘に納められた閻魔刀が握られていた。

居合と呼ばれる剣術の構えを取ったダンテは、極めて遅々とした所作で閻魔刀の柄に手をかける。トリッシュは立ち止まり、ダンテの一挙手一投足を見守った。

空を切る音が数度した。

それで、どうやらダンテが抜刀したのだとトリッシュには理解できた。しかしいつ刀を抜いたのか、その刃がどのような軌跡を描いたのかを視認する事はできなかった。

かつて閻魔刀を振るっていたのはダンテの兄バージルであったという。トリッシュはバージルを知らない。

正確には、生きていた頃のバールを、だ。  
バールは、ダンテと袂を分かち、人ではなく悪魔として生きる道を選んだ、それ故に、ダンテによって討たれてしまったとトリッシュは聞かされている。

そして命を落としたバールの骸は、魔界の奥深くへと墮ちた。

そのバールの亡き骸を利用したのが、魔帝ムンドゥスであった。ムンドゥスはバールの肉体を悪魔として変貌させ、己の部下として用いたのだ。

その時に、トリッシュはバールと顔を合わせている。

トリッシュもまた、ムンドゥスの部下であったからだ。

だがトリッシュの知るバールは、物言わぬ忠実な魔帝の部下でしかなかった。人格も心も失った、哀れな操り人形。

「バール、か……」

抜き放った刀を回転させて鞘に納めるダンテを見ながら、トリッシュは呟いた。

ダンテがこれまで日本刀のような得物を用いているのを、トリッシュは目にした事がない。まして居合のようなある種の精密さを要求される技術をダンテが有しているなどとは想像した事もなかった。

しかしダンテは今、まるで生来から使い慣れた得物のように閻魔刀を操っている。それはおそらくバールの動きそのものではないか。

バールは生きているのだ。ダンテの中で。ダンテの一部として。

バールを知らぬトリッシュでさえ、それを強く感じた。

トリッシュに気付いたダンテが、トリッシュの方に視線を送り、それから顎で地獄門の方を指し示した。

誘われるままに目を向けると、地獄門の中心から袈裟がけに一直線の亀裂が走っていた。遠く離れたダンテの抜刀による斬撃が、地獄門を分断したのだと知った。スローモーションのように倒れる分断された上片を見て、トリッシュは小さく微笑む。

そしてゆっくりとダンテに近付いていった。

「……いいの？ 結構な文化遺産だと思うわよ？」

トリッシュがダンテにそう告げると、トリッシュの背後で倒れ切った地獄門が大きな地震を立てた。

「構わないだろ。ああいうもんがあるから、下らねえ考え起こすバカが出る。親父が何のためにアレを残したのかは知らないがな」

ダンテは肩を竦めて閻魔刀に目を落とした。

確かに、スパーダ程の力があれば地獄門を封印する事はおろか、破壊する事も不可能ではなかったはずだ。

しかしスパーダはそれをしなかった。

トリッシュユにはその理由が何となくではあるが分かるような気がしていた。  
 スパーダは悪魔だ。

ダンテのように人間界で生まれた者とは違う。魔界で生まれ魔界で育った生粋の悪魔だったはずだ。だからこそ、彼は人間を救いつつも、己の故郷へと続く道を完全に葬り去る事はできなかったのではないか。

スパーダと同じく純粋な悪魔であり、魔界で生み落とされたトリッシュユも、それに近い感情を抱く事がある。トリッシュユが様々な悪魔や魔具の知識を得ようとする事も、その感情によって突き動かされている部分が大きい。

だがトリッシュユはその事をダンテに告げようとは思わなかった。

全ては自分の憶測に過ぎない。何より、話したところで、人間界で生まれ人として生きるダンテには、おそらく理解し得ない感情だろう。

「あとは神サマとドンパチやって終わりか」

ダンテが神を見上げた。

地獄門の倒壊に気付いたのか、神は遠く上空からゆっくりとこちらへ近付いてきているように見える。

「そうね……ところで住民はどうしたらいい？ 今は港に避難させてるけど」

その問いに、ダンテは首を傾げた。

「なるべく遠ざけた方がいいんじゃないか？ 少しばかり派手な戦いになりそうだ」

今いる広場から港までは結構な距離がある。

しかし神の巨大さから言って、それでも安全な距離とは言えないかもしれない。

トリッシュユは港の方角に目を向け、目を細めた。

今から住民達を誘導して、果たしてどこまで距離を取る事ができるだろうか。しかもなるべく悪魔があまり出没时间が好ましい。地獄門が倒壊した今、これ以上悪魔が湧き出てくる事はないが、それでもこれまでに出来た悪魔は大量に残されたままだ。その全てを、住民を守りながら相手にするのはトリッシュユといえど楽ではない。

「だとしたら、森の方に行くぐらいしかないかもね……」

独り言のように口にする、ダンテが眉を蹙める。

「確かにあそこまで行けば安全かもしれないがな、森のあたりは悪魔どもでいっぱいだ。他の場所の方が良くないか？」

それも一理ある。トリッシュユ一人ではあの鬱蒼とした森の中で住民達を守り切れない可能性が高い。

しかしトリッシュユは、

「大丈夫。ちよつとアテもあるし」

とダンテに告げた。

ダンテはそれ以上、何も言わなかった。小さく手で挨拶をかわし、再びダンテと別れたトリッシュは、港の方角に足向けながら、一カ月前前に送り付けた手紙の事を考えていた。

あの手紙が届いているなら、そろそろレディが到着しているはずだ。海路を取るよう伝えるのであるから当然、船でやって来るだろう。

トリッシュ一人では多少厄介な悪魔の群れも、彼女がいればどうにかなる。

そもそもレディには迎えの船を届けてもらうために手紙を送ったのだったが、どうやらそれよりも先に悪魔退治の手伝いを頼む事になりそうだ。

「文句言われそうだけどね……」

しかし金にうるさいレディとて、実際には金のために悪魔狩りなどやっていない事を、トリッシュは知っていた。彼女もまたダンテと同じく、悪魔を憎み、悪魔を許せぬからこそ狩りを続けている。手伝えと言ったところでまさか断ったりはしないだろう。

「ま、彼女が無事に着いていればの話、か……」

トリッシュはそう呟いて悪戯っぽく笑った。



トリッシュが去った後、ダンテは周囲を振り返り、それから手近な建造物の中で最も高さのある歌劇場の外壁を駆け上がった。

神は自らこちらへと近付いてきている。わざわざ自分が足を向けるまでもない、そう考えての行動だった。何より、ダンテは神に見下ろされ続けている事を好ましく思わなかったせいもある。いるかどうかも分からぬ本物の神ならまだしも、狂った人間の生み出した偽物の神となれば尚更だ。

歌劇場の頂上で神を待ち受けていると、周囲を取り巻いていた天使のうちの一体が神に先んじてダンテに向けて飛来してきた。

瞬間、ダンテは身構えたが、適度に距離を開けた場所で天使が速度を落としその場に浮遊したのを見て、首を傾げる。攻撃を仕掛けてくるわけではないらしい。

「……地獄門を破壊するとはな」

天使はそう呟いた。聞き覚えのある老人の声。それが教皇のものと分かるのに、ダンテは僅かな時間を要した。

「……爺さんか。おめかししてお出かけか？」

尋ねたが、教皇と申しき天使はその問いには答えない。  
 「あまり調子に乗らぬ事だ……地獄門なくとも我らの計画は成就できる。貴様には神を止められぬのだから」

天使の背後では、神がゆっくりと接近してきている。そちらに目をやりながら、ダンテは苦笑した。

「止めるさ。こちらら神サマの息子なもんでね」

「せいぜい足掻くがいい……もはや貴様の力など、我らが神の足元にも及ばぬわ……」  
 告げて、天使はダンテに背を向けた。神の元に帰るのかと思えば、瞬時に振り返り、手にした剣で斬り付けてくる。

「その割には、随分やり方が狡っからいんじゃないか？」

横薙ぎの一撃を跳躍してかわし、ダンテは空中でエボニーとアイボリーによる銃撃を放った。無数の弾丸の衝撃で、天使の鎧が粉碎される。

しかしその中には教皇の姿はなく、ただ無残に鎧の残骸が落下していくだけだった。

ダンテは神を見やった。

「……リモコン操作だったか。本体は中って事だな」

神は既に間近に迫っていた。

あれだけの巨体、しかも宙を浮く相手にどう立ち回ったものか思索しているうちに、神の周

囲に無数の巨大な瓦礫が浮かんでいるのにダンテは気付いた。おそらくは神を浮遊せしめていた強力な機関の余波が、周囲の物体に影響を与えているのではないかと思われた。

「足場まで用意してくれているのか……さすが神サマだ。やる事が憎いね」

そう口にして、ダンテは大きく跳躍するとその足場に着地する。神を取り囲むように浮かぶその足場は、どうやら教団本部の一部らしい。見覚えのある文様の床がいくつも見られる。

接近に気付いた天使達が一斉に自分の方を目掛けて飛んでくるのを見たダンテは、笑いながら足場の上を駆け、少し離れた場所に浮かんでいる別の足場へと飛び乗った。

「細かいの相手にしてもキリがねェからな……追いかけてこしなからやらせてもらうぜ」  
 神もまた、当然のようにダンテの存在に気付いている。

何を仕掛けてくるか警戒しつつ、天使達から逃れるように走っていたダンテは、神の巨体が大きく仰け反るのを目にした。

正直、一瞬ではあるが呆然とせざるをえなかった。

てっきり、悪魔達を焼き殺した光線のような攻撃を仕掛けてくると思っていたのだ。

だが今の神の行動はそれとは違う。

大きく仰け反りながら拳を振り上げているのだ。

そのまま勢いを付けて、神が巨大な拳をダンテ目がけて振り下ろしてくる。

「おいおい！」

慌てて跳躍し、拳の衝突を回避したダンテだったが、神の拳はダンテが立っていた足場を粉々に粉碎していた。このままでは地上に落下する羽目になる。

「マジかよ……」

仕方なく、ダンテは空中で軌道を変え、神の拳の上へと着地していた。不安定な足場ゆえに立ち止まっている暇はない。振り払われでもしたらそこで終わりだ。

拳の上から腕を伝い、ダンテは神の体幹部を指して走った。

「しかし、あの坊やはどこにいやるんだ……?」

ぼやいていると、神が腕を大きく振り回し、ダンテを払い除けた。空中に投げ出されたダンテだったが、すぐさまリベリオンを手に取り、神の胸に突き刺す事で落下を逃れる。

ブラ下がったままの体勢で、ダンテは神を見上げた。

ネロを救わねばならぬ以上、今この神を破壊するわけにはいかない。

ネロを救うための方法は考えてあるが、しかしそれを実行するためにはネロが今、神のどのあたりに囚われているのかを知る必要があった。

「やれやれだ……案外難儀だな、こいつは」

神を破壊せず、この巨体の猛攻をかわしながら、同時に天使達の追撃から逃れながら、ネロの居場所を探らねばならない。

どうしたものか思索しているうちに、神が大きく掌を開き、それをダンテのいる場所に向け

て叩き付けようとしていた。

「おっ……と!」

リベリオンを足場にして立ち上がったダンテは、ひとまずリベリオンをその場に留めておき、神の胸部から手近な浮遊する足場へと飛び渡った。それに気付き、神は叩き付けようとしていた掌を急停止させ、ダンテを押し潰そうと腕を翻す。

「ビョンビョン避けてばかりもいらねえからな……!」

苦笑しながら、ダンテはバンドラを展開させた。そしてそれをスーツケースの形状から、瞬時に巨大な球のような形状に変化させる。

バンドラの変形には持ち手の記憶と想像力とが大きな影響を与えているという。

ダンテがバンドラをその形に変形させる時、思い浮かべるのはかつて相対したベオウルフという名の悪魔だった。光を操る力を持った、豪腕の悪魔。

その頭部に似た形状に変形したバンドラは、唸るような音を立て急速に力を充填し始めた。球形のバンドラの前面には、大きな銃口が備えられている。その銃口が、ダンテの操作により一気に光を放った。

膨大な熱を伴った光の帯が、一気に神の掌目掛けて射出される。

ダンテに叩き付けられようとしていた神の掌は、その光線を受けて大きく後方に弾かれた。バンドラの持つ攻撃の中でもかなりの破壊力を秘めた攻撃だ。しかし、それでも神は傷ひと



つ負った様子はない。あくまで掌を押し返せただけに過ぎない。

「やっぱタフだな……伊達に神サマ名乗ってねエ」

パンドラを瞬時に圧縮し、ダンテは再度、神に近付くために別の足場に向けて走り出した。神の巨体には、蒼い光を放つ寶石のようなものが各所に埋め込まれている。そのいざれかの寶石状の物質の奥にネロがいるのではないかと、ダンテは思った。その宝石からは、夥しい魔力が放たれていたからだ。

神の周囲を回るように移動しながら、ダンテは宝石の数を確認していた。

腕に数か所、足に数か所。頭部と胸部にひとつ。そして背中にもひとつ。

うっかりその宝石をネロごと破壊するというわけにはいかない。しかしかと言って、神とこのまま追いかけて続いているわけにもいかない。

「試しにひとつ二つブチ壊してみるか……」

あの宝石のような機関が神に魔力を行き渡らせているのだとすれば、いくつか破壊する事で神の力を削ぐ事はできるはずだ。そうすればその後の行動も取りやすくなる。

ダンテは神の背後で足を止め、再度パンドラを展開させた。離れた距離から大物を相手にするには、パンドラは最も適した武器だ。巨大なランチャー状に変形させるか、先程のレーザー砲をもう一度使うか、僅かにダンテが逡巡した隙に、ダンテを追っていた天使達がダンテを取り囲んでいた。それを見て、ダンテはパンドラを変形させる事を断念した。

足場に着地し、じりじりとダンテに近付いてくる天使達を見回しながら、ダンテはスーツケース状のパンドラを足元に置く。

「離れた方がいいぜ」

天使達にそう告げて、ダンテはそのままパンドラを軽く蹴り付ける。

直後、勢いで蓋を開けたパンドラが、目を開いていられない程の激しい閃光を放った。

それは、意思のままに変形するパンドラが唯一持っている、持ち手に左右されぬ攻撃手段。そしてパンドラが可能とする攻撃の中で、おそらく最も凶悪な破壊力を有したものだ。

パンドラの箱から放たれた光が、周囲にいる天使達を一瞬で融解させていく。その光から目を守るように腕で顔を覆っていたダンテは、頃合いを測って足でパンドラを閉じた。

周囲を見回すと、天使達はすっかり姿を消している。

だが目の前の神は、やはりさしたるダメージを負っていないかった。距離が開き過ぎていたのかもしれない。

「じゃ、ちょっと趣向を変えるか」

パンドラを収めたダンテは、続け様に闇魔刀を取り出していった。

ダンテの方を振り返るうとしている神の前に、ダンテはゆっくりと腰を落とす。そして一度、抜刀した。

兄バージルが得意とした技。

物質を斬るのではない。その技は、次元を斬る。

ダンテが刀を納めると同時に、神の背部の空間が湾曲する。同時に、激しい衝撃音が響き渡った。斬り開かれた次元が隣の次元を巻き込み、周囲の空間そのものを破壊する。鳴り響いた音は、その破壊の副産物だ。

僅かな時間の遅れと共に、神の背部に埋め込まれていた宝石が砕け散った。

闇魔刀を掲げながら、ダンテは小さく微笑む。

「見様見真似でやった割にはうまくいったな」

笑い声を上げながら、ダンテは別の箇所を破壊するためにまた走り出した。



何か懐かしい感覚と共に、俺は再び意識を取り戻していた。

曖昧だったはずの記憶は、おぼろげながらも以前よりはっきりとしていた。

自分が誰なのか。自分が何故こんな場所にいるのか。

今の俺はそれを理解していた。

理由は分からない。

しかし今、近くに俺の一部が存在しているせいだと何となく思った。

俺の一部。俺の断片。

俺が受け継いだ物。

けれどそれが何なのかまでは、思い出せなかった。

「ダ……ンテ？」

声にならぬ声で、俺は呟いた。

その名はどうか思い出せた。

近くにいる。

ダンテが。今。俺の傍にいる。

それが分かった。そしておそらく、俺の一部はダンテが今、手にしている。

結局、俺はあの男にはかなわなかった。

ダンテの助けを待つしかできない今の俺は、どうしようもないくらい情けない。

だが本当にそれでいいのかという疑念が過った。

本当に、俺は、黙って助けを待つしかできないのだろうか。

今の俺にできる事は、何もないのだろうか。

考え、俺は叫んでいた。

無論、声など出はしない。

俺の肉体は失われてしまっている。  
わけの分からない神とやらに、俺は溶け込んでしまっている。  
けれどそれでも、何かしなくてははいけない。

ただただ負けを認め、何もせぬままアイツの助けを待つのではなく、  
俺は俺の意思で、ここから逃れようとしなくちゃいけない。

「キリエ……」

キリエを救うためだ。

キリエを、俺が、救うためだ。

ダンテじゃない。俺が。俺自身が。キリエを救うために。

このまま何もしなかったら、全てをダンテに委ねてしまったら、たぶん俺はこの先一生、キリエを守るなんて口走れない。

「クソッタレめ……何から何まで、おいしいところ持ってかれてたまるかよ……!!」

アイツの手を借りなくてははいけないとしても、俺は俺の意思でここから脱する。

「……………」

そう考えながら、俺は何度となく叫び続けた。



ダンテがその微かな波動を感じ取った時、神は背後のダンテの方に振り返っていた。

「……坊やか」

思わずそう呟き、ダンテは神の胸部に埋め込まれた宝石に目を向けた。その向こう側、神の体内の奥部から、自分と同じ血を引く者にしか発する事のできぬ魂の慟哭が響いていた。

となれば、最早やる事はひとつしかない。

うまい具合に、神に突き刺したままのリベリオンが恰好の足場になっている。

「神に逆らう愚か者め！ 悔い改めながら死ぬがいい！」

だがダンテが次の行動を取るよりも速く、神が動いていた。

その巨体の背部、輪のような形状の翼が唸るような音と共に魔力を集束させていくのがダンテには分かった。

「マズいな……」

様々な悪魔と戦ってきた中で、ダンテがそんな言葉を口にするのは本当に稀な出来事だった。人間よりも、そして並の悪魔よりも遙かに強靱な肉体を持つダンテにとって、敵の仕掛けてくる攻撃は回避せねばならぬようなものではない。気まぐれに受けてみる事さえ多い。それが余

程の破壊力を秘めていない限りは、だ。

今、神がその翼に集中させている魔力は、明らかに膨大なものだった。それによって何を仕掛けてくるかまでは予想も付かないが、あれだけの魔力を用いた攻撃が、広範囲に及ばぬはずもない。

ダンテは瞬時にその身を悪魔の姿へと変化させ、神の背後に回り込むために走った。

しかし、

「間に合わねエか……」

すぐに立ち止まる。

神の翼が唸るような音を止めたのを見て、ダンテは大きく息を吸い込みながら腰を落とした。全身に魔力を集中させ、そのままそれを体表から放出し、同時に、放出された魔力が霧散してしまわないようにコントロールしながら、己の全身を覆うように操る。

「避けられねエなら、耐えるしかないからな……戦艦みたいに頑丈になりゃいいわけだ……」

ダンテが操った魔力が鎧のような形状に変化した時、神の中でサンクトゥスが叫んだ。

「喰らえッ！ 神の威光を！」

その叫びと同時に、神の翼から一気に光の帯がダンテ目掛けて放たれる。パンドラで放った攻撃とは比べ物にならない程の巨大さ。

もし回避する道を選んでいたとしたら、逃げ切れぬままその光に身を焼かれていたはずだっ

た。だが、ダンテはもはやそれを避けるつもりなどない。

神の光がダンテの全身を包み込む。

ダンテが形成した鎧は、その破壊力に蹂躪されながらも、かろうじてダンテの身を守り続けた。

「思ったよりキツいな……」

身体は無事でも、神の放った攻撃の前に、ダンテは立ち往生していた。前に進もうとはしているが、凄まじい勢いで押し返されてしまう。吹き飛ばされないよう堪えるのが精一杯の状態だった。

やがて神の放った光が収束して消えた時、ダンテの生み出した鎧もまたかき消えていた。

「ぎ、貴様……ッ！」

平然とその場に立つダンテに、教皇が狼狽の声を上げる。

立っている足場もまた神の光に晒されたせいで崩れかかっているのに気付き、ダンテはすぐさま前方、神の元へと跳躍していた。

その手には閻魔刀を握って。

突き立ててあるリベリオンに着地し、そこからもう一度跳び上がると、ダンテは神の胸元に埋め込まれたその着いた寶石に閻魔刀を突き立てた。だが想像以上の硬度のせいで、閻魔刀は半ば近くまで突き刺さったものの、そこで止まってしまふ。

「無駄だ！　いかに閻魔刀でも、この神を破壊する事などできません！」  
 神の巨大な掌が、閻魔刀を突き立てたまま胸部に取り付いているダンテを払い除けようとす  
 る。それに気付き、ダンテは閻魔刀から手を離して、リベリオンの上に着地した。  
 さらに追撃してくる神の掌から逃れるように、今度は大きく後方に跳ぶ。

「確かに、外から壊すのは無理そうだ！」

空中で身を翻したダンテは、コートの内側からすぐさまエボニーとアイポリーを抜いていた。  
 すぐさまそれを乱射する。

狙ったのは神ではない。ただ一点。神に突き刺さった閻魔刀の柄尻。

二丁の銃から放たれた無数の弾丸は、次々と閻魔刀の柄尻に命中する。

それによって、閻魔刀は少しずつ深く、深く神に食い込んでいく。

ダンテが放った最後の弾丸が命中すると、閻魔刀は引き込まれるように神の体内へと潜り込  
 んだ。

ダンテは、最初に立っていた歌劇場の頂上に着地すると、エボニーとアイポリーを指先で  
 弄んでから収めた。

「……というわけで、中から壊させてもらうぜ」

ダンテにさらなる追い打ちをかけようとしていた神の動きが一瞬、止まり、浮遊している高  
 度が、徐々に下がっていく。

ダンテはそれを見て、一度、指を弾いた。

それを受けて、依然神に突き刺さったままだったリベリオンが回転しながらダンテの手元へ  
 と戻ってくる。

高度を落としたりした神は、やがて大地に着地すると膝を突き、蹲るように状態を傾がせた。

「な……何をした！」

怒気を含んだ教皇の問いに、ダンテは答えなかった。

そして答えぬまま、ダンテは見つめていた。神の胸部。閻魔刀を埋め込んだ箇所を。  
 できる事は全てやった。

それでもし救えぬというのであれば、諦めるより他はない。

「さあ……おはようの時間だ、坊や！」

目覚めるかどうかも分からぬネロに向かって、ダンテは叫んでいた。

「一人で神サマの相手するのも退屈でな！　一緒に遊ぼうぜ！」

だがその呼びかけに応える者はなかった。

苛立ち、ダンテは大きく息を吐く。

思えば数奇な出会いであったとダンテは思う。

偶然。全ては偶然だった。

よもやこんな辺境の地に、自分と同じ血を引く者がいるなどとどうして考える事ができた

ろう。この男が存在しなければ、全くつまらない退屈な仕事で終わるはずだった。だが彼は存在したのだ。この地に。少し躊躇い、しかしすぐに決意を込めて、ダンテは口を開いた。そして初めて、彼の名を口にする。

「……ネロー！」

その呼びかけに、神の身体が微かに震えたように見えた。



俺が最初に思い描いたのは、右腕の事だった。

不思議なものだ。

あれ程忌み嫌っていたはずなのに。自分の肉体を思い返す時、俺は真っ先に右腕の事を想起していたのだ。

すぐ近くに、手を伸ばせば届く場所に、俺の一部が辿り着いているという事は、もう感覚で分かっていた。それをダンテが送り込んでくれたに違いないという事も。

俺は右腕を伸ばした。

真っ直ぐに。自分を覆う殻を突き破るように。

そして実際、俺の右腕は何かを突き破り、それに触れた。

俺の一部。俺にとって大切な何か。

閻魔刀。

その柄を強く握り締めると、失われていた自分が取り戻せたような感覚があった。

曖昧で散り散りだった記憶は、砂時計の砂が落ちるように、次第に一カ所に集まり、より明確な俺の記憶へとその姿を変えていく。

同時に、神とやらに溶け込んだ俺の肉体もまた元通りに復元されつつあるのを、俺は感じていた。

握りしめた閻魔刀で、俺の身体を覆う肉の塊のような機関を斬り開く。

清浄な空気が流れ込んできて、俺はその空気と入れ替わるように機関の中から押し出された。ふらつき、膝を突く。視界はまだぼんやりとしていたが、そこがまだ外界ではない事は分かった。おそらく俺はまだ、神の体内にいる。

「キリエ……」

立ち上がった周囲を見回し、自分がいた場所を確認したが、キリエの姿はそこにはなかった。まだその機関の中に溶け込んでいるのか。

たぶん、違う。

この機関の中に溶け込んでいる間、俺はキリエの存在を感じる事はなかった。

あの教皇は小賢しい人間だ。俺がこうして脱出する可能性をまるで考慮していないとは言いが切れない。ならば、俺が動き出した時のために、キリエは自分の手元に置いておくのではないか。そんな気がする。

いづれにせよ、俺はこの神の中で教皇を倒し、そしてキリエを救わねばならない。ようやくはつきりとしてきた意識の中で、俺はそう考えていた。

「やっと起きたか、坊や！」

歩き出そうとした瞬間、周囲を覆う壁越しに、ダンテの声が聞こえた。何から何までお見通しという事らしい。俺がこうして解放された事も。

何を告げるべきなのか思案するうちに、ダンテは続いて、

「ヒーロー役はくれてやるよ！ 俺にしちゃ大サービスだ！ せいぜい楽しみな！」  
と叫んだ。

「楽しめ……？」

こんな時によくもそんな言葉が出てくるのだと感心した。俺やダンテがいるのは、生きるか死ぬか、そういう局面はずなのだ。

しかしだからこそ、ダンテのその言葉が楽しくも思えた。

こんな状況で「楽しめ」なんて言う男だからこそ、俺をこうして救ってくれたのだろう。そしてそんなダンテが外にいるからこそ、俺は安心してキリエを救いに行ける。



「分かってる……分かってるさ……」  
 小さく呟き、それからダンテの声が飛んできた方向に目を向ける。  
 「俺がカタを付ける！ それでいいんだろ！」  
 ダンテの小さな笑い声が聞こえたような気がした。



## STAGE 19



群がる悪魔を一通り退けた後、レディは救命ボートで遙か遠くに逃げ去っていたベンを呼び付ける。再びフォルトゥナへ針路を取るように彼に命じた。

フォルトゥナの上空では相変わらず大量の悪魔が飛び交っている。ベンはレディの命令に対し、洩々といった様子で船の舵を取った。

「こっちも報酬払ってるんだから、もっと喜んで仕事してくれないと困るわ。今のところ怪我ひとつしてないんだし」

操舵室でベンを監視しながらそう告げると、ベンは溜め息を吐いた。

「あんなに悪魔がいる場所に行くなんて自殺行為もいいところだ……こんな危険な仕事だっけ知ってりや断ってますよ……」

それでもどうか覚悟だけは決めたらしい。船は順調にフォルトゥナへと接近していく。



安堵し、レディはこれ以上の監視は必要ないと考え、操舵室を離れて甲板の方に向かった。船の先端からは既にフォルトウナの港の様子が確認できる。

だがそこにレディが想像していたような悪魔の姿はなかった。

いたのはただ一人——トリッシュである。

レディの姿に気付いたらしいトリッシュは、小さく手を掲げる。

それに応えてレディも手を掲げた。

程なくして船が港へと辿り着く。

一度操舵室に戻ったレディは、ベンに船を下りるよう告げたが、ベンは頑としてそれを了承しなかった。地上よりは船の上の方が安全だと信じているようだった。ベンに依頼したのはあくまで船の操縦であるから、レディもそれ以上何も言えない。

「それならここにいってもいいけど……一人だけ逃げるとか勘弁してよね」

それだけ念を押し、レディは港へと降り立った。

「で？ そっちの様子はどうなの？」

トリッシュに近付きながらレディが尋ねると、トリッシュはその問いに答えぬまま、しきりに風に吹かれてなびく髪を気にしている。

「……潮で髪が傷みそうね」

レディはその言葉に肩を竦めた。

レディ自身、殺伐としていた昔に比べれば幾分身なりに気を遣うようにはなったが、それでもこんな状況でそんな言葉を吐く程ではない。

「……短くすれば？ 切ってあげましょうか？」

半ば皮肉のつもりでそう告げると、トリッシュは小さく笑い、

「冗談よ。気にしないで」

と言った。彼女と知り合ってそれなりの時間が経つが、レディはいまだにトリッシュの性格を掴めないままである。ダンテも相当気まぐれで扱いにくい男だが、トリッシュはそれ以上だ。

「だったら状況を説明してよ……こっちは観光しに来たわけじゃないんだから」

レディが再度それを望むと、トリッシュは背後を振り返った。

その視線の先には貨物用の倉庫だろうか、幾つかの建物が並んでいる。

「あそこに住民を避難させてあるわ」

トリッシュはそう口にした後で、今度はその倉庫の遥か向こうを指差した。

「それから、ダンテが今、あの大物と交戦中」

トリッシュが指差したのは、街の中央部に見える巨大な石像だった。今は片膝を突いたような姿勢のまま動いていない。

「あの石像は何なの？ アレが動いているのは船の上からでも見えたけど……アレも悪魔？」

レディが問うと、トリッシュは小さく首を振った。

「悪魔というよりは愚かな人間の産物ってところね」

その返答で、レディは石像の存在が魔剣教団が生み出したものらしいと察する事ができた。レディが相手をした鎧騎士と同じく、何らかの兵器のようなものだろう。

「あんなの相手にして大丈夫なの？」

レディは周囲を見渡しながら告げた。それはダンテの身を案じての言葉ではなく、フォルトウナの街を案じてのものだった。トリッシュもそれを理解したらしく、

「だからちょっと手伝って欲しいのよ」と言う。

「下手をすれば、あの戦闘の影響でこのあたりまで吹き飛ばされかねないでしょう？ 住民の安全を確保するために、ここから森の方に向かおうと思うの」

「……まさかそのボディガードをしろって言うんじゃないでしょうね？」

その言葉に、トリッシュは悪戯っぽく微笑む。

「そういう事」

レディは溜め息を吐き、それから周囲を振り返った。

「それはいいけど——」

周囲には、レディやトリッシュを取り囲むように悪魔達が続々と近付いてきていた。

「移動する暇なんてあるの？」

レディは銃を抜き、その悪魔達に向けて弾丸を見舞った。悪魔のうちの数体が大きく後方に吹き飛んだが、そんなものでは追いつかない程の一群だった。

「まあ、間に合えば、いいいわ。ここでもたぶん大丈夫だとは思うし」

そう吹きながら、トリッシュは指先から火花のようなものを散らせた。それが彼女の力の予兆である事を、レディは知っている。

トリッシュは掌を突き出すようにして、そこから稲妻を放った。宙を走った稲妻が、群れなす悪魔達を襲う。それが悪魔達の身を焼く様を見ながら、レディはトリッシュの背後に回っていた。二人で悪魔と対するのなら、そうやって互いの背を守り合う形が最も戦いやすい。

「これは迎えに来るのは別枠で勘定するわよ」

喋りながらも、レディは襲ってくる悪魔達を銃で迎撃する作業を続けていた。

「そこは貴方の誠意次第じゃないの？」

トリッシュはそう告げて、銃を取り出した。トリッシュもまた、ダンテと同じように二丁の拳銃を扱う。トリッシュが引鉄を引くと、射出された弾丸は雷光の尾を引きながら悪魔に向かっていった。

便利な力だ、とレディは思う。

ダンテにしてもそうだが、彼らは弾丸に魔力を込めるといった行為を平然と行える。それによってただの弾丸も威力を増し、悪魔達に充分通用する兵器となるわけだ。

人間であるレディにはそんな芸当は到底できない。  
だから様々な火器や道具に頼る必要がある。  
だがそれもタダではないのだ。

レディは元来、金のために悪魔を狩ってなどいない。悪魔が憎いし、悪魔を滅ぼしたいと思っ  
ている。その気持ちだけが動機だ。だが悪魔を狩るには金がかかる。様々な銃器を用意しそ  
のメンテナンスを行うにはいくら金があっても足りる事はない。

金の亡者のように陰で言われる事を知りながらも多額の金を要求するのはそのためだ。

「私の誠意はあんまりアテにしないで欲しいわね……正直な話」

呟いて、レディはボウガンを取り出した。このボウガンの矢は、銀でできている。悪魔達の  
多くは銀の清純さを嫌う。ただ鉄を鑄出した矢よりも遥かに効果的にダメージを与えられるか  
らだ。

「まあ、計算は後にしとくわ。楽しみにしててね！」

トリッシュにそう告げて、レディは悪魔の眉間をボウガンの矢で射貫いていた。  
背後で、トリッシュのくすりと笑う声が聞こえた。



ネロを救う事ができた。

それだけでダンテの目的はほぼ達せられたと言っている。魔剣スバーダを取り戻すという目  
的は、ネロが教皇と対すれば自然に遂行される形になるはずだった。

「じゃあ……俺がやるべきなのは、あとしばらくこの神サマのお相手をしてやる事ぐらいだ  
な」

ダンテは大歌劇場の頂上から一直線に地上に飛び降りると、軽い身のこなしで着地し、未だ  
片膝を突いている神の姿を見上げた。

ネロを取り込む事によって完成した神ではあるが、ネロがなくなるとも動く事は分かっている。  
今は、一時的に動力を失い内部で混乱が起きているだけだろう。

「次は殴り合いといくか」

呟き、ダンテは収納していたギルガメスを展開させる。ダンテの肉体と一体化したギルガメ  
スはダンテの四肢を硬質化させた。

それを待っていたかのように、神はゆっくりと上体を起こし立ち上がる。

だがどうやら飛行能力は失われているらしい。ネロの存在を触媒として供給されていた膨大な  
な魔力を失ったせいだろう。

雄大な所作で足を上げた神は、その足を一気にダンテに向けて落としてくる。

ダンテはギルガメスの生み出す衝撃を利用して素早く後方に下がると、そのまま拳を握り締

めて構えた。衝撃鋼に覆われた右腕に、力が蓄積されていく。

「……ここからは、全力でいかせてもらおうぜ！」

最大限に衝撃の力を充填させた右腕を突き出すと、腕部に備えられた突起が杭状の機関を排出する。衝撃を伴った拳と杭が、今まさに地面に激突しようとしている神の足に同時に衝突すると、神の身体が大きく揺らいた。

そのままダンテは再度、今度は左拳を引き付けて構える。

同時に、その身を悪魔に変貌させた。

「夢ばかり見てる神サマに、現実でもんを教えてやる……！」

渾身の力で、ダンテは決るようになから、拳を突き上げた。

神はまだ大きく体勢を崩し、片足で立っている状態のままだ。

その浮き上がった片足に、ダンテの左拳が命中すると、拳に込められた衝撃が神の外殻を駆け巡るのが分かった。

その左拳の一撃は、相手の動きを一瞬、ほんの瞬間だけ、静止させるためのものだ。

「喰らえ！」

次いで、ダンテは左以上の力の込められた右拳を振り上げる。大地を蹴り、突き上げた拳ごと、己の身体を上昇させる。竜のように空へと駆け昇りながら、ダンテの拳、そして突き出された膝が続げざまに神を打ち抜き、その衝撃は神の足先を粉碎していた。

不安定な体勢から、さらにダンテの一撃を受けた神は、そのまま後方に仰け反るように身体を転倒させた。周囲の建造物が砂糖菓子のように碎け、粉塵を撒き散らす。

着地したダンテは、粉塵を避けるために顔を掌で扇ぎながら、倒れた神を満足そうに見つめた。

「地べたの味くらいは知った方がいいぜ。世界を救済するってんならな」

やはりネロを取り込んでいた時に比べれば、神の力は格段に落ちている。神の外殻もまた、強大な魔力によって守られていたのだらう。今なら破壊する事も不可能ではなさそうだ。

そんな事を考えながら、神がゆっくりと身を起こすのを見つめていると、神の胸部の奥からネロの叫びが聞こえた。

「あんまり揺らすなよ！ 歩きにくいんだよ！」

確かに、中にいるネロの事など何も考えていなかった。ダンテは苦笑しながら肩を竦める。

「おいおい！ こっちだって大変なんだよ！ 何せ相手がデカ過ぎてな！」

その言葉に、ネロの「それもそうだな」という呟きが聞こえた。

そのやり取りをよそに、神は拳を振り上げていた。

腰を落とし両手で手招きをしてやると、神の拳がダンテに向けて振り下ろされる。

その拳を寸前のところで回避すると同時に、ダンテはリベリオンを神の拳に突き刺していた。神が掬い上げるように拳を振るう。

リベリオンを突き刺し、それにブラ下がったままのダンテは神の拳と共に上空へと誘われていた。

「こいつは楽でいい」

とは言え、吾気にブラ下がり続けているわけにはいかない。ダンテの行動に気付いた神が、もう片方の手でダンテを握り潰そうとしているのに気付く、ダンテはブラ下がった状態から身体を上方に跳ね上げた。

拳の上に着地し、それから神の頭部へと飛び移る。

そのまま神の肩間のあたりにリベリオンを突き立てたダンテは、小さく微笑んだ。

そろそろ、ネロが教皇の元に辿り着いているかもしれない。

そんな事を考えながら、ダンテは突き刺したりベリオンを一層深く押し込み、それから、

「行ってきな……そして幸運を、坊や」

と呟いた。



神の体内はまるで迷宮のような構造になっていた。本来は俺と同じように神の動力にでもされるはずだったのか、無数の悪魔までもがうろついている。

その悪魔達を叩き潰しながら、俺は戦いの勘を取り戻していった。

俺が神に取り込まれてから解放されるまで、一体どれくらいの時間が経っていたのか、おそらくせいぜい数時間というところだろう。だが何年も眠っていたみたいに身体が重たかった。

その上、レッドクイーンもブルーローズも、体内に取り込まれた時に紛失してしまっている。体の調子が万全でないのに加えて、これまで培ってきた戦い方は一切できない。

閻魔刀は強力な武器だが、使い慣れているというわけではない。

そこに些かの不安があった。

「信じるしかないけどな……」

もう何匹目だったかも分からない悪魔を斬り伏せて、俺は閻魔刀を見つめた。不思議と、それを見つめると心が落ち着く。

この閻魔刀もまた、大層な日くつきの魔剣だという事は、教団の連中の口ぶりからも理解していた。そんな魔剣がどうして今、俺の手元にあるのか。考えてみれば不思議なものだ。

そして、俺はどうしてこの魔剣を自分の一部と感ずるのか。

俺は迷宮のような体内を歩きながら、自分がまるで道に迷っていない事に気付く。

俺の身体が、進むべき道を勝手に選んでくれるような感覚。

教皇は、魔剣スパイダを手に入れたと言っていた。

そのスパイダの魔力が、俺を導いてくれている気がする。

「何なんだろうな、この感じ……」

俺は、教皇の言葉を思い返していた。

教皇が出会った謎の男。その男は、神の息子を名乗ったという。そしてその男が、この地で女を孕ませ、俺が生まれた、と。

そんな男が実際にいたのかどうかは分からない。どの道、俺の生まれる前の話である以上、俺には真実なんて知り得ない。

けれど俺は一步一步、地を踏みしめて歩きながら、今、確かに自分の肉体と魔剣スパードとが引き合っている事を感じている。

ただの人間だと思っていた俺が。

俺は再び、手にしている閻魔刀に目を落とした。

閻魔刀は、薄暗い神の体内で妖しい光を放っている。そしてそれを握る右腕もまた、閻魔刀と呼应するように薄い光を滲らせていた。

一カ月前、俺の右腕は悪魔のような異形に変わった。

それから俺はずっと、その右腕を忌まわしく思っていた。俺は人間のはずだと信じていた。自暴自棄になって、その右腕で悪魔達をブチのめしたって、心が晴れるわけじゃなかった。

むしろ苛立ちが募った。右腕の力が強大であればある程、自分に唐突にそんな力が芽生えた事に疑問と恐怖が湧き起こった。

けれど今、閻魔刀を手にしている俺は思う。

俺はようやく、自分のあるべき姿に辿り着いただけなんじゃないかと。

地面を這っていた幼虫が、蛹になり、そして蝶になるように、俺も元来、この姿になるべき運命を持って生まれたのかもしれない。

「一度身体も溶けちゃった事だしな……」

呟いて、俺は苦笑した。

右腕が仄かに熱を帯び、魔剣スパードの存在が近い事を知らせていた。

俺はきつく閻魔刀を握り、目の前の小さな出入り口のような穴をすり抜ける。

そこに、教皇はいた。

薄暗い、十数メートル四方程の部屋だった。周囲は肉のような質感の壁に覆われ、ところどころに赤い寶石のようなものが埋め込まれている。

教皇はもう、人の姿をしてはいなかった。巨大な角と翼を持ったその容姿は、天使というよりは悪魔そのものでしかない。

黙ったまま俺が教皇に近付くと、教皇はゆっくりと右手を掲げる。

教皇の背後の壁から、せり出すようにキリエの姿が現れ、俺は思わず足を止めていた。

「……キリエ」

意識はあるらしく、キリエは潤んだ目で俺を見つめた。とても怯えた顔をしている。何か喋

ろうと震える唇を開いたが、どうやら声が出ないらしかった。

教皇はそんなキリエをしばし眺めた後で、俺に目を向けた。そして、

「何故だ……？」

と問うてくる。

その問いの意味が分からず俺が首を傾げると、教皇はそのまま言葉が続けた。

「貴様が不信心者であった事は聞いている。だが、貴様はそれでもこれまで教団に属し仕えてきたはずだ。何故に今、教団に刃向かうのだ？ おとなしく従っていれば——」

教皇は、手にしている禍々しい剣の刃先で、キリエを指し示した。

「我々として、このような真似はせずにすむ」

その禍々しい剣こそが魔剣スバーダに違いなかった。

右腕が微かに震えているのを、俺は感じていた。

それが恐怖からなのか、それとも武者震いのようなものなのか、その判断はできなかったが。

「ムカついただけだ。いろんな事に」

俺は答えた。

「だけどな、あんたらが陰で悪事を働いてましたっただけなら、俺はここまでムカつきはしなかったさ。そんな連中は世の中にゴマンといえるからな。俺がどうしても許せなかったのは、お前らがキリエを巻き込んだからだ」

その言葉に、教皇は小さく笑った。

「それは何だ……？ 愛、か……？」

教皇が再度手を掲げると、キリエの身体が壁の中に吸い込まれていく。キリエを楯に戦うつもりはないらしい。それは意外な行動だった。教皇としての意地なのか、まともに勝負しても俺には負けないという自信があるからなのか。

いずれにせよ、俺にとってキリエがこの場から姿を消してくれたのは幸いだっただ。キリエを気にしながら戦う必要はない。ただ、教皇を倒す事だけを考えればいい。

「思えば、貴様を捕らえた事に安堵し、ダンテを野放しにし過ぎたのが失策であったな……。奴こそ何よりも先に叩いておかねばならなかったわけだ」

何かを任掛けてくる事もなく、教皇がそんな事を口走る。

この期に及んで俺の事なんてまるで眼中にないようなその態度が、ひどく癪に障った。

「知るかよ！」

闇魔刀に魔力を集中させ、叫ぶと同時に振り上げると、一陣の剣風が教皇に向かって飛んでいった。

「フン……」

教皇は、動じる様子もなく掌をかざし、そこから魔力を放出する。俺の一撃は、教皇の力によって相殺され、空中で虚しく爆ぜた。

俺は爆風ぼくふうに煽あおられ、思わず目を閉じた。再び臉たまごを上げると、教皇の姿が消えている。だがその気配はまだ室内に残っていた。

闇魔刀を構えながら周囲を見回したが、やはり教皇はどこにもいない。舌打ちをすると、壁の向こう側から、

「坊や！」

という声が聞こえた。ダンテだった。

「そろそろこっちは終わらせようと思うんだが……そっちはどうだ？」

「こっちもすぐに片付ける！」

教皇の姿を探しながらそう叫ぶと、俺は背後に違和感を感じて振り返った。

「調子に乗るなよ……小僧！」

床をすり抜けて姿を現した教皇が、スパルダを振りかざす。スパルダの剣先から赤い稲妻のような魔力がほとぼしり、俺を襲った。

即座に闇魔刀を構え、俺は右腕に力を込めていた。

そのまま闇魔刀を稲妻に向けて振り下ろすと、闇魔刀の帯びた魔力が教皇の魔力を逸らせ、稲妻が俺の背後の外壁に衝突する。大きな地震響きが起こった。

「成る程、闇魔刀は確かに素晴らしき魔剣だ……しかし、この世界において、スパルダを超え

る魔剣など存在せぬ！ それを身をもって教えてやろう！」

教皇がスパルダを構え、再び床に沈んでいく。

「隠れんぼの好きな爺イだな……！」

偉そうな事を言っておきながら、やってくる事は不意討ちまがいの戦法だ。その事に苛立ちを隠せない。

教皇はこの神の体内を自由に出入りできるのだらう。そうなると、いちいち動き回ったところで意味はない。そう思い、俺は目を閉じた。

移動する教皇の気配、そして教皇の手に行っている魔剣スパルダの魔力を感じ取るために神経を集中させる。

問題は無い。

俺が何者かはこの際どうだったいい。重要なのは、俺がスパルダを感じられる、それだけだ。教皇の気配だけを感じ取るのは容易ではなかったが、そこにスパルダの波動をも加えれば、決して不可能ではない。

俺はただ、信じるだけだ。

自分の力。自分の心。自分の魂を。

やがて頭上に、俺はそれを感じた。

スパルダを手にした教皇。スパルダを突き出し、凄まじい勢いで突進しながら突きを繰り返す。



してくる。  
分かる。

魔剣スパーダが、それを俺に伝えてくれる。  
「勝負だ……ッ！」

やや前方、天井から現れた教皇に対し、俺は床を蹴り付けて前方へと跳んだ。空中で闇魔刀を引き付けて構え、教皇の繰り出した突きを身を翻してかわす。同時に、抜き打ちの一閃でガラ空きの胸を薙ぎ払った。

確かな手応えと共に、闇魔刀の刃が教皇を斬り裂いたのが分かる。

かろうじて転倒する事なく着地した教皇は、血を吐きながら俺を睨み付けた。遅れて着地し、俺もまた教皇に視線を向ける。

「私は……教皇だ！ 歴史ある魔剣教団を統べる者だ！ 貴様のような小僧に！ 殊、魔剣の扱いにおいて負けられるかッ！」

スパーダを構え、教皇が駆け込んでくる。

そう言えば、聞いた事があった。

教皇は、かつてクレドと同じように騎士団の長を務めていたと。

だが今、教皇の振りかざした剣を見ても、俺は何の脅威も感じなかった。

スパーダから放たれていた夥しい魔力も、心なしか薄れているように思える。

「お前なんかより……クレドの方がずっと強かったさ……」

一度身を低く沈め、俺は教皇とすれ違うように駆け抜けながら、体を回転させ、その勢いで先程斬り付けた箇所と同じ部位を斬り払った。

それは、クレドが得意としていた技だ。

ガキの頃、何度となくその技でやり込められたのを思い出す。

「お、お……ッ！」

よろめく教皇を振り返り、俺は闇魔刀の血を払った。

「今のはクレドの分だ……次は誰がいい？ サガンやトニオの分も残ってるからな」

そう告げた俺を見て、教皇は後ずさった。

そして魔剣スパーダを見つめる。

「何故だ……そんなはずはない……！ 魔剣スパーダは無双の魔剣のはず……いかに私がスパーダの血を引いておらぬとしても、この程度の力しか引き出せぬはずはない……ッ！」

俺は苦笑した。

不信心者の俺にさえ分かる理屈が、この教皇には理解できないものらしい。

「……お前、本当に教皇か？ 偉そうにみんなにお説教しといて、自分じゃ何ひとつ信じてなかったわけか？」

教皇は、愕然とした表情で俺を見つめた。

「スパイダは何故、人間を救った？ 何がスパイダを駆り立てたんだ？ そんな事、孤児院育ちのガキだって知ってるぜ。スパイダは人間の愛を知ったからだ、ってな。愛を鼻で笑うお前に、スパイダが手を貸すはずがないだらうよ」

そう告げて、俺は閻魔刀を教皇の喉元に突き付ける。

教皇は舌打ちをして瞬時に床に潜り込むと、俺から距離を開けた場所に再度姿を現した。そしてすぐ傍にある壁からキリエを出現させる。

「その愛とやらが大事なら、貴様がこれからすべき事も分かっておるのだからな？」

教皇がスパイダの切っ先をキリエの胸元に宛がったのを見て、俺は溜め息を吐いた。

結局、悪覚が考える事なんてその程度の物なのだ。

むしろこれまでキリエを利用しようとしなかった事が不思議なくらいだ。

「閻魔刀を捨てろ」

教皇が俺にそう命じる。

キリエは怯えた表情のまま、俺を見つめていた。

俺はキリエに向かって微笑むと、口を開いた。

「すぐ助ける……信じてくれ」

キリエが小さく頷いたのを見て、教皇が苛立ったようにスパイダを振り上げた。

「閻魔刀を捨てろッ！ さもなくば——」

その教皇に、俺は閻魔刀を放り投げていた。

力を込めず、パスするように。

俺の行動に、教皇は戸惑ったように宙の閻魔刀を見上げた。キリエからも俺からも視線を離して。

俺は右腕を一気に突き出していった。

俺のもうひとつの武器。悪魔の腕。

俺の右腕から発せられた青白い腕が、教皇に向かって伸びていく。

教皇がスパイダをキリエに向けて振り下ろす暇さえ与えず、悪魔の腕は教皇の身体を背後の

壁に叩き付けていた。

衝撃で、教皇の身体が怯む。

俺は即座に上空に跳んでいた。

教皇との距離を詰めながら、空中に放り投げていた閻魔刀を手取る。

自分の作戦がうまくハマった時ってのは嬉しいもんだ。

特にこんな外道が相手なら尚更だ。

俺は微笑み、急降下しながら叫んでいた。

「大当たりだ！」

閻魔刀を振り下ろし、真っ向から教皇の身体を両断すると、教皇は断末魔を上げながら溶け

るように床に消えていった。それが、悪魔になった人間のなれの果てって奴なんだろう。

床には魔剣スパーダが空しく転がった。

俺はそれを拾い上げ背中担ぐと、キリエの方に目を向ける。

キリエを拘束している壁を闇魔刀で切り開くと、キリエの身体が宙に投げ出された。俺はそれをしっかりと抱き止める。

「……遅くなって、ごめん」

抱きかかえたキリエにそう告げると、キリエは優しく微笑んでくれた。



「それにしても硬エ神サマだ……」

未だ動き続ける神を見て、ダンテはほやいた。神の外殻は様々な部位が削り取られ、海の底から引き揚げられた古代の彫像を想わせる様相を呈していた。

ネロを救った以上、もうこの神を破壊したところで構わない。そう考え渾身の一撃を何度か加えてはみたのだが、そうやって外殻の一部を削り取る事はできても大規模な破壊を促すには至らなかった。

「坊やに先を越されちまうな、こりゃ……」

その吹きと同時に、神が拳を振り上げたのを見て、ダンテは手にしたリベリオンを眼前に掲げた。叩き付けられた拳を刃の腹で受け止めるつもりだった。

だがその拳はダンテには届かなかった。

寸前のところで、神は停止したのだ。

ダンテは小さく嘆息し、空を仰いだ。

「坊やが終わらせる前に景気良くブチ壊してやりたかったんだがな……」  
ダンテはリベリオンを背負い、頭を掻きながら静止した神の腕を手で払う。

同時に、神の頭部を突き破ってネロが飛び出してきた。女性を抱きかかえているその様は、まるでお伽話の王子を連想させる。

肩を竦め、ダンテは颯爽と着地したネロの方に足を向けた。

「……遅かったじゃないか」

思わずそう告げたのは、自分の思い通りに事が運ばなかった悔しさからであった。ダンテとしてはむしろもう少しくらい時間がかかったところで構いはしなかったのである。

ネロは抱えていた女性——確かキリエとネロが呼んでいた——を地に下ろし、それから背負っていたスパーダをダンテに手渡ししてくる。

「遅刻してごめん、って謝ればいいのか？ これでも早めに片付けたつもりなんだ」  
ダンテはスパーダを受け取り、そして肩を竦めた。

「お前の帰りを待ってたって事だよ、坊や」

その言葉に、ネロも肩を竦める。そして急にその表情を一変させ、はにかんだように俯いた。「まあ、でも……あなたには世話になったからな……」

キリエはそんなネロを微笑ましそうに見つめている。

ダンテを見て驚いた様子はない。おそらく神に取り込まれていながらも、外界の状況はあつ程度把握できていたのだろう。或いはネロがダンテに敵意を向けていないからかもしれないとすれば、キリエはネロを心の底から信用しているという事になる。

「いいお嬢ちゃんだ……大切にしろな」

そう告げてダンテがネロに背を向けようとする、ネロの背後の神が身体を震わせながら再び動き始めた。

巨大な腕で傍にいるダンテ達を振り払おうとする神に対し、ダンテは後方に跳躍してそれをかわしていた。ネロもすぐさまキリエを抱きかかえ、同じように攻撃を回避している。

神は一度顔を伏せ、それから仰け反るように面を上げた。

その相貌に、ダンテは啞然とする。

中性的で端正な顔立ちをしていたはずの神は、教皇と思しき老人のような顔に変容していた。おそらく教皇は神と同一化し、己の魔力で神を動かしているのだろう。動力となっていた魔剣スパーダもネロも失われた今、そうでなければ神が動き出すはずもない。

もはや人としての意識など失っているのか、教皇と同化している神は獣のように吼えた。とても神には見えたものではない。偽神とでも呼んだ方がしっくりくるような有様だ。「しつこい爺さんだ……やっぱブチ壊さないと駄目か……」

呟いて神に向けて歩き出そうとするダンテを、ネロの腕が阻んだ。

足を止めネロを見やると、ネロは真剣な眼差しをダンテに向ける。

「俺がやるよ……ここは俺の街だ。俺がカタを付ける」

それに、と付け加えて、ネロは子供のように笑った。

「俺の右腕はさ、突然こうなったんだ……その時は神を呪ったりしたよ。神様がいるならブチ殺してやりたいって思ったぐらいだ」

ネロの言わんとする事を理解したダンテは、微笑んでネロの背中を押した。「了解だ。夢を叶えてきな」

ネロは右拳を握り締め、それをもう片方の掌に叩き付ける。

「ああ……実行する！」

叫びながら、ネロは空中へと跳んだ。

その右腕が、凄まじい魔力で満たされていくのをダンテは感じ取った。

「大したもんだ」

ダンテは呟いた。ネロが右腕を突き出すと、そこから巨大な青白い腕が飛び出し、偽神の顔

面を掴み上げる。

「パワーだけなら俺より上かもな、あの坊や……」

神の顔面に亀裂が入っていく音が、ダンテのいる場所にまで届いてくる。

「死ねッ！」

叫びと共にネロが右腕を硬く握ると、青白い腕もまた同じように、偽神の頭部ごとその拳を握り締めた。爆発にも似た激しい衝撃音が響き、偽神の顔面が爆散する。頭部を失った胴体は力なくそのまま地に倒れ、大量の砂埃が舞い上がった。

それを尻目に着地したネロは、小さなガッツポーズを取る。その少し恥ずかしげな仕草に、ダンテはネロの若さを感じた。

「あと一、二年もすればもうちょっとはしゃげるようになるぜ。恥ずかしげもなく」

自分に照らし合わせて、戻ってきたネロにそう告げると、ネロは何故か少し嫌そうな顔をしてダンテを見つめた。

「別にはしゃぎたいわけじゃない……」

ダンテは、

「そうか、そりゃ悪かった」

と答えた。確かに、ネロに自分と同じ血が流れていたとしてもダンテのようになるとは限らないし、なりたいたいと限らない。双子の兄とですら、性格面では大きな違いがあった。

「まあしかし、真面目すぎるのも問題だからな。基本的には気楽にやってりゃいい。真面目すぎてつまんねエ事につまずいて、それで大怪我するなんてよくある話だからな」

そんな事をネロに告げる気になったのは、ネロの中に兄パージルの面影を見たからかもしれない。双子でありながら袂を分かった兄。その真っ直ぐな性格ゆえに力を追い求め、人を捨ててしまった兄の事を。

「言いたい事はそれだけだ。元気でやりな」

ダンテはネロに背を向けて歩き出した。

「おい！」

ネロの声がすぐにダンテを呼び止める。

振り返ると、ネロは閻魔刀を示しながら、

「これ！ 忘れてる！」

と言う。

「やるよ」

ダンテは迷う事もなくそう告げていた。

「やる、って……大事なんだろう？ これを取り返しに来たんじゃないのかよ？」

言いながらも、ネロの表情にはどこか閻魔刀を失いたくないという色が見え隠れしていた。

「大事なもんを人にやっちゃいけないって決まりはないぜ。お前になら預けてもいい。大事に

しろ。可愛い彼女と一緒に」

それ以上、あまり多くを語る気もなかった。

ネロの父親が誰なのか、そんな事は重要ではない。ネロにそれを告げたところで証拠など何もない。大切なのは、受け継がれるべき魂がネロには宿っている、ただそれだけの事だ。そしてその魂を持つ者ならば、閻魔刀を預けても何の問題もない。

再び背を向けたダンテに、またネロが口を開いた。

「ダンテ！ また会えるか？」

ダンテはその言葉に、ただ手で挨拶を送るだけに留めた。

広場を離れ、トリッシュと合流するために港の方に向かう。

だが港に辿り着くよりも先に、道中でダンテを待ち構えていたのはレディだった。

「御苦労様。予定より荒れたみたいだけど、さすがにちゃんと仕事してくれたみたいね」

依頼主であるはずのレディが何故ここにいるのか疑問に思い、ダンテが首を傾げると、レディは港の方を振り返る。

「迎えに来てあげたのよ。トリッシュに頼まれて、だけど」

「……そいつはどうも」

ダンテが歩き出すと、レディもそれに従う。

「船のチャーター代と、それから船で悪魔と戦闘した分、報酬から引いとくからね。危うく船



を壊されるとこだったし……」

相変わず抜け目ないその言葉に、ダンテは溜め息を漏らした。

しかしどこか日常に戻ってきたという感覚もある。

「好きにしろよ。今回は金がなくても気分がいいんでな」

ダンテがそう告げると、レディは不思議そうにダンテを見つめた。

「何かいい事でもあった？ トリッシュは全然説明してくれないのよ。何でもここまで大袈裟な事になってるのか」

それはそうだろう。そもそもトリッシュがあれこれ持ち出したのが原因なのだ。それをレディに知らればまた報酬を引くのだと言い出しかねない。トリッシュもダンテ同様さして金に固執しない割には、そういったところにはうるさいのだ。まあ、相手がレディだからという事もあるのかもしれない。女同士というのは得てして妙な意地の張り合いを見せたりするものだ。

「……ちよっと、説明してよ。依頼主には知る権利があると思わない？」

何も答えぬダンテに、レディがそう迫ってくる。

「女運がいつも通りになってきたな……」

そう呟くと、レディは不思議そうに首を傾げた。



ダンテが去った後、ひっそりと静まり返った広場で、俺は立ち尽くしていた。

何だか、全てが夢だったような気がした。

あまりにいろいろな事が起こり過ぎて。

「……これで、終わったの？」

隣にいるキリエがそう呟いた。その気持ちはよく分かった。俺も同じ事を誰かに問いたいくらいだったから。

「たぶん……たぶん、ね」

キリエは足を踏み出し、周囲を振り返った。

街は、酷い有様だった。あちこちの建物が崩壊し、それまでの美しかった面影などまるで残していない。

「街が……ポロポロ……」

悲しそうにキリエはそう呟いた。キリエにとって、この街もその大きな愛を向ける対象なのだ。フォルトウナの人々と同じように。

「そりだな……」

キリエと並び、俺は左腕でキリエの肩を抱く。ほんの少し、キリエが身体を硬直させたのが分かった。

「でも俺達は生きてる……まだ生きてる。だから、この街まで終わったわけじゃない」

俺は自分の右腕をキリエの目には届かぬように隠していた。冷静になると、まだキリエにそれを見られたくないという思いが勝った。

俺と正対するように姿勢を直したキリエは、それに気付いたらしく、そっと俺の右腕に触れた。言葉がなくなるとも、それでキリエの想いが感じられた。俺の全てを受け入れてくれると。

「キリエ……俺は……俺は、悪魔だと思おう。たぶん、少なくとも、人間じゃない。それでも、俺と一緒に、いてくれるか？」

キリエは微笑み、俺の右手を強く握り締めた。

「ネロはネロでしょう？　どんな手をしてても、どんな姿をしていても、貴方は私知っていいネロ。誰よりも人間らしい人だもの」

少し躊躇った後、俺は右腕を優しくキリエの腰に回した。

駄目だ、と思った。

ずっと、ずっと我慢していた気がする。

こうする事を。

キリエを抱き締め、そしてキスする事を。

俺がゆっくりキリエに顔を近付けると、キリエは目を閉じた。

唇が触れそうになる。

その瞬間、俺はキリエを抱く右腕を背後に向けて伸ばしていた。

素早く伸びた悪魔の腕が、俺の背後に迫っていたスケアクロウを掴み、地面に叩き付ける。

俺は溜め息を吐いてキリエから身体を離し、振り返った。

地獄門から湧き出してきた残党というところだろう。スケアクロウの一団が、俺達を取り囲んでいた。

「ごめん、キリエ……キスはお預けだ」

言いながら、少しだけほっとしている自分もいた。あのまま唇を触れ合わせていたら、正直自分がどうなっていたか分からない。

「大丈夫……待ってるから」

キリエがそう答えてくれる。

それだけで、気分は最高に良かった。

「じゃあ邪魔者はさっさと始末するか……」

吼えるスケアクロウ達に向けて、俺は悪魔の腕を突き伸ばして叫んだ。

「ロックの時間だ！」





## STAGE 20



フォルトゥナでの一件から、一カ月が経過していた。  
その間、何の仕事もない。

仕方がないので、ダンテは毎日毎日、コミックを読んで時間を潰していた。  
トリッシュはトリッシュで、ふらりと出掛けてはまた戻ってくる。いつもの通りだった。  
一カ月前が大仕事だった事もあって、一週間程は退屈な毎日でも楽しめたのだが、それが一カ  
月続くとさすがに飽き飽きしてくる。そのコミックを読むのも既に四度目だった。

ダンテがあくびをしていると、ノックもないまま無造作に事務所の扉が開かれた。  
目をやると、白いスーツに身を包んだレディが、二つの大仰なトランクを手に歩いてくる。  
「報酬、持ってきたわよ。待たせて悪かったわね」

言いながら、レディはトランクのひとつを重そうに机の上に置いた。

どうせレディの事だ、そんな素振りだけ見せておいてトランクの中にはせいぜい札束ひとつ  
だろうと思ひ、ダンテはコミックを読み続けていた。

しかし、  
「へえ……」

と隣にいるトリッシュが声を上げたのを聞き、思わず開かれたトランクに目をやる。

その中にはギッシリと札束が詰まっていた。

「貴方にしては珍しい正当な評価ね……」

トリッシュがトランクに手を伸ばそうとすると、レディはその手を掴んだ。

「悪いけど、計算がまだなの」

そう告げて、レディはもう一方のトランクを机の上に置き、蓋を開いた。そちらのトランク  
には、何も入っていない。

「まず船のチャーター代ね。それから船頭への支払い。これは経費だから報酬から引くわ」

レディはトランクの中の札束を無造作にいくつか取り出し、それをもう片方のトランクに移  
動させた。

「それから船で悪魔と交戦した分。これも予定外の労働だから、差し引く」

その時点で二つのトランクの札束は同程度の量になっていた。

「まだあるわ。港でトリッシュの手伝いをした分」

レディはさらにいくつかの札束を空だったトランクに移動させた。

「……ざっとこんなもんかしらね」  
 そう告げて、レディは七割方が奪い去られた方のトランクをダンテの方に押しやった。それを見て、トリッシュは少し不機嫌そうに、レディを見据えた。

「……貴方、誠意って言葉知ってる？」

レディは小さく肩を竦める。

それからダンテとトリッシュを見比べ、

「あ」

と声を上げた。

「忘れてた。トリッシュがスパードを持ち出したせいで話がややこしくなったんだって？」

ダンテは慌ててコミックに目を落とした。

視界の端で、トリッシュがダンテを睨んでいるのを感じた。結局トリッシュと合流するまでの間で、レディにあれこれ喋ってしまったのだが、その事をトリッシュには告げていなかったのだ。トリッシュにしてみればダンテの裏切りと感じる行為だろう。

「悪いけどそれも引かせてもらおう。そのせいでいろいろ私も働かされたわけだし」

レディは再びダンテの報酬であるはずの札束に手を伸ばし、それをもうひとつのトランクに放り込んだ。

結局、残されたのは札束がたったひとつだけだった。

レディはぎっしりと札束が詰められた方のトランクを閉じ、それを床に置いた。

「……何か意見は？」

ダンテとトリッシュ双方を見つめながら悪戯っぽく微笑む。

あらかじめ計算して札束ひとつだけを持ってくれればいいものを、わざわざ目の前で配分するのだから意地が悪い。報酬を持ってくるまでに妙に時間がかかったのも、金を用意する手間の問題だろう。

しかしレディがそんな下らぬ事に時間を費やしているという事は、レディもまた仕事にありついていない事を意味していた。フォルトウナの一件が影響しているのか、ここ最近、悪魔が出没したという話がまるで聞こえてこないのだ。

トリッシュもおそらくそれを分かっている。

それでもトリッシュはレディに噛み付き、

「あんまり納得はできないわ」

と言った。レディのこの行動を退屈凌ぎにするつもりなのだろう。それはそれで本人の自由だと思えば、ダンテはそのままコミックを読み進めていた。

「貴方も何か言って」

だが唐突にトリッシュが話を振ってくる。

「貰える物は貰えればいいさ。別に金のために悪魔を相手にしてるわけじゃない」  
 そう答えたが、トリッッシュは不服そうにダンテからコミックを取り上げた。

「貰方も、何か言つて」

同じ言葉を繰り返され、ダンテは仕方なくレディに目を向けた。

しかし別段、文句はないのだ。そもそもレディが持つてくる仕事でうまい目を見られた例などない。それに、フォルトゥナでの出来事に関して言えば、金では買えぬ報酬はあったとダンテは考えている。

「そう言えば、こつちから頼んだ仕事はどうなった？」

ダンテは不意にその事を思い出し、レディに尋ねた。

「ちゃんと言われた通り送つたわよ。その分は既に報酬から引いてるわ」

「だったらいい」

それはフォルトゥナでレディと遭遇した際に頼んでいた事だった。トリッッシュにはその事も告げていなかった。ダンテ自身、帰りのどきくさですっかり忘れていたのだから無理もない。

「それ、何の話？」

案の定、トリッッシュが食い付いてくる。

説明しようとダンテが口を開きかけた時、机上の電話が鳴り響いた。

受話器を取つたトリッッシュが、「デビルメイクライ」と事務所の名を告げる。

そして幾分の間があり、トリッッシュはダンテを見やつた。

「台言葉アリの客よ」

デビルメイクライは表向きには便利屋のような体裁を取っている。そのせいで、悪魔とは何も関係ない仕事が多い。舞い込む事もしばしばだった。そういう一般の客と、悪魔絡みの依頼をしてくる客とを区別するために、裏の世界に秘かに台言葉を流してある。台言葉アリの客はつまり、それが悪魔に関する仕事である事を意味していた。

客の話に耳を傾けていたトリッッシュが、再びダンテに目を向け、

「すぐ近くみたい。どうする？」

そう尋ねてくる。ダンテは迷う事なく立ち上がり、

「決まってる！」

と答えた。

壁に掛けてあるコートを羽織り、リベリオンを手取る。

銃の状態をチェックしながら出口の方に歩いて行くと、レディがそれを阻んだ。

「何だよ？ 報酬についてならこれ以上、文句はないぜ？」

そう告げると、レディは微笑んだ。

「私も手伝うわ、その仕事」

レディがそんな事を言い出すのも珍しい。どうやらこの一カ月の退屈は相当なものだったの

だろう。

「好きにしろよ。お前の嫌いなタダ働きでいいならな」

「実際のところ、趣味みたいなもんだからね、仕事は。お金は二の次」

そう口にして、レディはトリッシュの方に視線を送る。

「貴方もそうでしょ?」

その問いに、トリッシュは苦笑して、

「否定はしないわ」

と答えた。

ダンテはエポニーとアイポリーを指先で回しながら、蹴破らんばかりの勢いで扉を蹴り開けた。外には乾いた風が吹いている。その風が、とても心地良かった。

「ねえ」

レディはふと思いついたように口を開くと、事務所に置き去りにしたままの二つのトランクの方を振り返った。

「どうせなら勝負しない? 一番多く倒した人間が、あそこのお金を総取りで」

ダンテがそれに対し返答するよりも早く、ダンテの後ろのトリッシュが、

「いいわよ」

と答えた。ここ最近、刺激に飢えていたせいだろう。ただ悪魔を狩るだけでは物足りなさを

感じかねないが、そういう事なら話は別だった。

「こっちもオーケーだ」

笑いながらダンテは歩き出した。

そしてふと、遠いフォルトウナの地にいるネロの事を思った。

この場にネロもいればなお面白かろうに、そう考える。

だがいずれまた会う事になるだろうとダンテは感じていた。

ネロがダンテと同じようにスパイダの血を引き、そして悪魔を狩り続ける限りは。

「さて、行くか……!」

呟いて、ダンテは悪魔達を葬るために駆け出した。



俺は、孤児院の前に捨てられていたらしい。

だから俺の母親の事、父親の事を知る人間は、俺を含めて誰もいない。

俺の名を付けたのは、今ほもう亡くなった、当時の院長だと聞いた。捨てられていた俺が、

真っ黒な布に包まれていたからだという。だから黒、だ。まるで猫に名付けるみたいな簡単な理由だが、俺は自分の名前を嫌いだ。昔の聖人君子の名前を引用されるよりは、ずっと

俺らしい気がする。

父親も母親もいない事を、ガキの頃は素直に受け入れられなかった。何故自分は捨てられたのか、その理由ばかり考えていた。だが考えたところでそんな答え、出るはずなんか無い。昔、他の人間から指摘されたのは、おそらく俺の母親は流れ者の娼婦だったのではないかと、いう事だった。

フォルトゥナは、住民全員がほとんど顔見知りと言っているような小さな街だ。そこで誰かの子供を産めば、いくら人目を避けたところで嫌でも誰かの耳に入るだろう。

だが俺が拾われた時、フォルトゥナにそんな噂は何ひとつなかったらしい。ただその頃、フォルトゥナには外の街からよく娼婦が出入りしていたそうだ。

その流れ者の娼婦が、父親の分からぬ子を孕み、途方に暮れた挙げ句にその子供を孤児院に捨てた……。

いかにもありそうな話だし、実際そんなもんだらうと俺も思う。

その指摘を受けた時、俺はまだガキだったから、俺を娼婦の子と決め付けてにやにや笑うそいつをブン殴ったりもしたが、今となっては別段母親がどんな人間であれ、そして父親がどんな人間であれ、構わないと思えるようになった。

キリエやクレド、そして彼らの両親がいてくれたからだ。俺にとって実の家族以上に家族らしかったあの人達に出会えたから、俺は自分の出自に過度に投げやりになる事もなく、生きてこられた。

キリエの両親は亡くなり、クレドもまた命を落としてしまったが、キリエだけはどうか守る事ができた。その事に今更ながら安堵している。

俺の家族。

何より大切な人。

彼女がいるから、俺はこれからも生きていける。

人間として。

身体にどんな血が流れていたとしても、俺を人間と認めてくれる彼女がいてくれれば、俺はこれ以上迷いを抱く事もない。

そう思える。

「ネロ」

新しく借りた自宅兼事務所の掃除をしていると、キッチンに立っているキリエが俺の名を呼んだ。

振り返ると、エプロンを着けたキリエは俺を手招きする。

「料理ができたから運びたいの。手伝ってもらえる？」

その言葉に、俺は小さな溜め息を吐いた。

フォルトゥナはまだようやく復興の第一歩を歩み始めたばかりだ。家を失い、歌劇場で寝泊

まりしている者も多い。キリエは朝からそういう人達のために料理を作っていたのだ。正直、少しだけ呆れていた。一体どこまで他者に献身的なのだろうと思う。キリエ自身が人に尽くされてもいいくらいには、今回悲惨な目に遭っているはずだ。けれど彼女はそんな事を望む様子などこれっぽっちも見せず、今、フォルトウナ復興の手助けをするために働いている。

「了解、女神様」

呟いて、俺はキッチンに向かった。大きな鍋にできたばかりのスープが満たされていた。その鍋の取っ手に手を掛けると、キリエの「ありがとう」という言葉が耳に届く。

「どういたしまして」

俺は応えた。

しかしそうは言いつつも、皆の前に顔を出すのは少し、気が重い。

一連の事件について、人々に説明したのはキリエだった。嫌われ者の俺より、女神と慕われる彼女の言葉の方が人々を納得させやすいと思ったからだ。

実際、多くの人々は、キリエの言葉——教団がやろうとしていた悪行や教皇の暴走といった諸々の出来事——を信じようとしてくれた。俄かには信じ難いが、キリエはそんな嘘を吐くような人間ではない、と。

だがそれでも、全ての人間が彼女を信じたわけじゃない。妄信的に教団に付き従っていた一

部の教徒は、キリエの言葉に反発し、彼女に唾を吐きかける者すらあった。

彼らは魔剣教団が正義の集団だと信じて疑わず、教皇達は人々を守るために悪魔と戦って果てたのだと思ひ込んでいた。その聖人である教皇達を貶めるキリエは、悪魔に取り憑かれていないと罵るのだ。

その一因には、俺の存在があるのではないかと思う。

俺はあの日以来、右腕を隠す事をやめた。明らかに人ではない俺の腕を、悪魔と感じる人々もいる。それは承知の上で、それでも、俺はそうしなかった。その右腕がスパイダの血縁の証だからとか、そんな理由じゃない。神として崇められたりしたいわけでもない。

ただ、悪魔のような俺の腕もまた俺の一部なのだという事を、俺は誇りに思っていたかったのだ。

それをキリエに告げた時、キリエは優しく微笑み、そして、

「みんなもすぐ分かってくれると思う」

と賛成してくれた。

だがそんな腕をした人間がキリエの周りをうろついていれば、キリエが悪魔に取り憑かれてるなんて思われても仕方ない。

抱えていた鍋を一度床に置いた俺は、壁に掛けてあるコートに手を伸ばした。それを見たキリエが首を傾げる。

「外はいいお天気よ？ そんなもの着なくても……」

俺は言葉返さず自分の右腕を見つめると、キリエは何かを察したらしく俺に歩み寄った。

「駄目。隠さないって決めたんでしよう？」

俺が掴んでいたコートを奪い取ると、キリエはそれを丁寧に折り畳み、机の上に置いた。

「やっぱり嫌がる人間もいるさ……俺が嫌われるのはいい。だけどキリエがそのせいで悪魔の手先みたいに思われるのは、嫌なんだ」

その言葉に、キリエは少し悲しげな笑みを浮かべた。

「ありがとう……でも、大丈夫。みんなまだ戸惑ってるだけよ。さ、行きましよう？」

キリエと二人で大きな鍋を抱え歩いていると、匂いを嗅ぎつけたのか、数人の子供達が駆け寄ってくる。

「ネロ！ それ何？」

尋ねてきたのはアベルだった。アベルは俺が育った同じ孤児院にいる。俺と同じで両親の顔も知らない。

「スープだよ。キリエが作ったんだ」

わざわざ蓋を開けて中を見ようとするアベルの手を、俺は軽く叩いた。

「叩くなよ！」

口を尖らせるアベルの頬を、俺は右手で抓ってやった。

「痛い……痛いって！」

「行儀悪い事するな。それより先に歌劇場に行つて、シエスタにスープ皿の用意するよう伝えてくれ」

そう告げて手を放すと、アベルは逃げるように歌劇場の方に向かっていく。

そして途中で振り返り、わざわざ俺に向けて舌を出してからまた駆け出した。

「生意気だな、アイツ……」

俺がぼやくと、キリエがおかしそうに笑った。

「……何だよ」

「だって、ネロの子供の頃にそっくりなんだもの」

俺は思わず空を仰いだ。

「よしてくれよ。俺はもっと素直な子供だった」

「でも、アベルもいい子よ。ネロの右腕を怖がりたりしないし」

キリエはそう言つて、また笑った。

最近では、キリエの笑顔が増えてきた気がする。やっと、いろいろな気持ちが悪く落ちてきたのだから。

フォルトウナの街が大きく傷付いた事もそうだが、何より、クレドが亡くなった事がキリエを大きく落ち込ませていた。

正直なところ、俺もキリエも、クレドの死を目の当たりにしてはいない。

その上、クレドは天使と呼ばれる姿に変化していた。

そういう人間は、死体すら残らない。泡のように消えてしまうだけだ。

だから信じられないような気持ちでどこかにあって、死んでいないんじゃないかと思いたくなる気持ちが捨てられなくて、それが一層、辛かった。

だがもしクレドが生きているならば、きつと俺達の前に姿を現すだろう。

フォルトゥナの人々の前から姿を消しても、俺達には何か言い残していくはずだ。

それが分かっているから、俺もキリエも認めざるを得なかったのだ。クレドの死を。

二週間程前、皆で、亡くなった人々の墓を建てた。

荒地と化してしまっていた教団本部跡を整理して、そこを今後墓地にする事に決めた。

建てられた墓は本当に簡素なものだった。いずれ街の復興の目途が立ったら、きちんとした

墓を建てるつもりだったが、それがいつ頃の事になるかはまだ分からない。けれど決してその

日は遠くはないだろうと思う。

街は少しずつだが活気を取り戻し、気落ちしていた人々の顔にも生気が戻ってきた。

たくさん辛い事があったが、それでも、フォルトゥナの街が元通りになろうとしている事

は素直に嬉しい。

俺は横目でキリエの顔を見つめた。

少し前まで、と言うよりいろいろな事件が起こるまで、俺は正直なところ、フォルトゥナという街が決して好きではなかった。

堅苦しい習慣、排他的な気質。俺みたいな人間には息苦しい街だと思っていた。

それでも俺がこの街に居続け、そしてこの街を守ろうと思えたのは、キリエがいたからだ。

キリエがこの街を愛している事を知っていたから、俺はこの街を守りたかった。

けれど、今は違う。

今は、俺自身がこの街を愛していると胸を張って言える。

キリエが愛するこの街を、俺も愛していると。

「……どうしたの？」

俺の視線に気付いたキリエが、足を止めて首を傾げる。俺は首を横に振った。

「おい、ネロー！」

唐突に背後から名を呼ばれ、振り返ると妙に大袈裟な木箱を抱えたカルスが俺に向けて手を

振っていた。

「用事なら後にくれよ！ 今料理を運んでる！」

そう告げたのに、カルスは木箱を抱えてひょこひょここと近付いてくる。俺は溜め息を吐いた。

「お前に荷物が届いているぞ。忙しいんなら事務所に勝手に運び込んでくが、どうする？」

言われて、俺は眉を顰めた。



「……荷物？ 誰から？」

尋ねるとカルスは首を傾げて木箱の横に貼り付けられたタグを覗き込んだ。

「ダンテ……しか書いてないな」

「ダンテが？」

思わず俺もそのタグを覗き込んだ。

確かに、差出人の名はダンテと書かれている。

「なんでこんなもん送り付けて来たんだろうな……」

カルスの呟きに、俺は啞然とするよりなかった。

「中、見たのかよ……」

カルスは狼狽したように身体を震わせ、それから笑い出した。

「いや……悪いな。てっきり街への支援物資か何かだと思ってた」

「だったら俺の名前宛てでは来ないだろ……それで、何だったんだよ、中身」

気になって尋ねると、カルスは低く唸る。

「それがなあ、何て言うか、看板だ」

「……看板？」

「まあ、看板って言うよりネオンサインって言った方がいいんだろうけどな」

ダンテが俺にそんなものを寄越してくる理由が、俺にはよく分からなかった。思案する俺に、

カルスは頼みもしないのに木箱を地に下ろし、蓋を開け始める。

その箱の中に入っていたのは、確かにネオンサインだった。

今は点灯していないので何色に光るのかはよく分からないが、蛍光灯の筒が英語で文字を描

いているデザインだ。俺はその文字を読み上げた。

「Devil May Cry……」

その単語で、何となく、その贈物の意図が分かったような気がした。

俺はこのフォルトゥナの街で事務所を開こうとしている。

教団と共に消滅した教団騎士に代わって、悪魔を退治する事務所だ。

誰かがそれをやらなくてはいけないと思った。

フォルトゥナにはまだ時折悪魔が現れるからだ。

そしてどうやらダンテは俺がそう考える事を見通していたらしい。

Devil May Cry.

悪魔も泣き出す、って意味なのだとしたら、悪魔退治の事務所にはこれ以上ない名前だ。

このネオンサインは気を利かせて送ってくれたんだろう。勝手に名前まで決めて、だが。

「かなわねエ……」

俺がぼやくと、カルスもキリエも不思議そうな表情を見せる。

「じゃあ、とりあえず事務所に進んどくからな！」

木箱を持って去っていくカルスを見届け、俺とキリエは歌劇場へと向かった。

「……あの人に話したの？ 事務所を開くって」

キリエの問いに、俺は肩を竦めた。キリエにも、あのネオンが事務所に取り付けるものだと  
いう事は理解できたらしい。

「まさか。あれから一回も連絡さえ取ってないさ。勝手に送って来たんだよ」  
俺が答えると、キリエは苦笑する。

「じゃあ何でもお見通しなのね、あの人には」

「そうらしい」

全く、悔しいっただけじゃなかった。

戦って勝てる気がしないのは仕方ないにしても、こういうところまで人に先んじてくるん  
だから腹立たしい。

しかしまあ、貰える物は貰っておこうとも思った。

Devil May Cry

悪くない名だ。本当に。

そんな事を考えながら、俺はキリエと二人歌劇場までの道のりを歩き続けた。

空は晴れ渡っていた。

今日はいいい日だ。

そしてこれからも、こんな日が続いて欲しい。

そのために必要なら、俺は喜んで悪魔どもを屠ってやる。

キリエのために。そして俺の愛するこの街のために。

事務所に戻ったら早速あのネオンを取り付けよう。

そして皆に宣伝しなくてはならない。

悪魔退治なら「Devil May Cry」って事を。

あとがき　そして悪魔死すべしリターンズ

いかがだったでしょうか、『デビルメイクライ4』下巻。  
という質問をすると、おそらく何割かの方はこう答えると思います。

「とりあえず、薄い」

……大変申し訳ないです。

というのも、ゲーム版の『デビルメイクライ4』のシナリオのキリのいいところで上巻を終わらせた結果、実質ストーリーの7割ほどを使ってしまったわけで、まあ当然と言えば当然の結果です。最初からそれは考えとけよ、って話ですね。実際問題。

それでも割にゲーム本編に沿った形の上巻に比べ、下巻はオリジナル要素の配分が多くなっているのご満足頂ける内容になっているとは思いますが。

しかしちょっと物足りない。という方のために、ページも結構使えそうなので、『デビルメイクライ4』に関する裏話とかそういう事をこの場で書いてしまおうかと。

慣れない「ですます」調を使ってるのも、『デビルメイクライ4』公式スタッフコラム「悪魔死すべし」っぽい雰囲気でないかと思っただけです。コラム担当のマツさ

んお元気ですか。

ゲームを未ブレイの方にはひょっとすると何の話をしているのかさっぱり分からないかもしれませんが、まあこのあとがきで興味を持って頂けたら是非ともゲームをプレイして頂きたいな、と……。

というわけで、こんには。

『デビルメイクライ4』シナリオ担当のビンゴです。

ページが許す限りあれこれ書いていきますよ。

まずはネロの技名の秘密から。

お気付きの方も多いと思いますが、ネロの技名は概ねギャンブル関係の用語から取られています。ネロのキャラクター性を考えるとイチかバチか、みたいなギャンブルのイメージが結構ピッタリ来たんですね。

とりあえず例をあげるとこんな感じ。

ハイローラー…高額を賭けるギャンブル常習者。

ストリーク…ギャンブルなどで見られる「運の流れ」。

ハイローラーはダンテのハイタイムに似た技なので「ハイ」という言葉を意図的に用いています。ストリークは語感から、「流れ」っていうイメージも結構合ってるんじゃないかと。

スプリット…「裂く」とか「別れる」という意味ですが、ブラックジャックなどで用いられ

るルールのひとつでもあります。同じ数のカードが2枚手札に来た時に、手札を分けて別々の手として勝負できる、っていうやつです。真っ向から剣を叩き付けて相手を「裂く」っていうイメージでこういう名前にしてます。

ダブルダウン・ブラックジャックのルールのひとつ。賭け金を倍にする代わりにあと1枚しかカードが引けなくなる。

スプリットの上位技の名前です。一応、知らない人のために説明しておく、ゲーム中、ネロの技は「イクシード」という機構によってパワーアップさせる事が可能なのです。で、ほぼ全ての技は「EX」という技名なんですが、スプリットだけ別名になります。

これは技のモーションが大幅に変わるのでそうしました。剣を叩き付けるんじゃないくて「突き刺す」感じのイメージだったんで、スプリットという言葉の「裂く」感がなくなっちゃったんですね。

そこで同じブラックジャックルールからダブルダウンという単語を引っ張って技名にしてます。

空中から落下する技なんでダウンっちゃう響きでいいんじゃないかと……。何がダブルやねん、と言われるとちよっと困るんですが、ダウンしながら攻撃して敵もダウンするからダブルダウンみたいな。こじつけですが。

ルーレットスピニングなんかはもう見たまんまです。回転しながら斬るからルーレットです。

それからシャッフル。  
ご存知トランプのカードを切る動作の事ですが、この技のコマンドがね、「後ろ↓前」っていう入力なんです。それでネロ自身も1回バックステップして前進しながら斬る。そういうコマンドとか動きとかがシャッフルの交互にカードを出し入れする感じに似てないですか。似てますよね。反論は認めません。

ショウダウン、マキシマムベットもギャンブル用語から。  
ショウダウンはブラックジャックなどで手札を晒す時の言葉。切り札を見せてやる、みたいなイメージ。マキシマムベットは文字通り限度額いっぱい賭け金を賭ける事。こっちはフルパワーみたいなイメージで採用してます。

テーブルホッパーはサイドにシュッと避ける技ですが、カジノなんかであっちのテーブル行ったりこっちのテーブル行ったりする忙しい人をテーブルホッパーと呼ぶそうです。  
あと意外なところでちょっとだけギャンブル用語なものもあります。

それはキャリバー。  
空中で滑空しながら斬る技です。

Caliburというのはそれ自体は特に意味のない単語なんです。しかしカリバーと読めば、皆さん想像するのはアーサー王の伝説でおなじみのエクスカリバーでしょう。

そして実はギャンブルの聖地ラスベガスに「エクスカリバー」という名のホテルがあるんで

す！ あるいはいいんです。行った事ないけど。  
 ……まあ、何がキャンセル用語かって、それだけの話なんですけど。  
 ちなみに、だったらなんで「エクスカリバー」という技名にしなかったかと言うと、ネロにはイクシードがあるからです。

イクシードでパワーアップした技は前述の通り「EX」という技名になっちゃいます。そうなると「EXエクスカリバー」になって長いし、言い辛い……。

という事で、通常時の技名を「キャリバー」にして、イクシード時は「EXキャリバー」という事で落ち着きました。

つまりキャリバーはイクシードしてこそ真骨頂。

みんなも叫びながら技を出すといいです。

エクスカリバー！ 超カッコイイ！

以上でネロの技名の秘密編、終わり。

続いてダンテの技名の秘密編。

デビル4ダンテと言えどやはり「ルシフェル」であります。これも反論は認めません。

オーソドックスなりベリオン、パワータイプのギルガメスという順当な武器二つに比べ明らかに異彩を放つ武器、それがルシフェル。

ルシフェルそのものの名前の由来はですね、ダンテが装備した時に翼が生えたみたいに見えるからです。ルシフェルって俗に6対12枚の翼を持つと言われている堕天使なんです。ね。

で、そういうイカした名前に決定した後、まだルシフェルの入手デモってのができてなかったんですよ、確か。そんな折にデモのモーションやボイスを収録していた制作スタッフから連絡がありまして、演出としてちょっとエッチな感じにしたい、と。まあつまりこう、ベッドシーンを彷彿とさせるような単語を織り交ぜていきたいと。

それがかなり面白かったので、よっしゃよっしゃと採用されたわけです。

そのデモがどうなったかは、ゲームをやった方はご存知の通り。やった事ない方は、この小説では若干略してるところがあるので、ゲーム本編を購入して見てみて下さい。

そういう経緯もあって、「ルシフェルIIちよつとエッチ」みたいな感じになりました、じゃあ技名もそっち方向でいこうかな、という事になりました。ボクの中で。

というわけで、解説。

ピンナップ…壁などに張るいやらしいポスター。

のっけからコレ。まあ敵に剣を突き刺すわけだから、おかしくないと思います。

スプラッシュ…おもしろい。

いや、普通の意味もあるんですよ？ 「散らす」みたいな感じの……。でもスラングでスプラッシュって言われたら「おもしろい」なんです。らめええ！ みたいな感じの。空中で剣をい

っぽい撒き散らす技ですしね。おかしくないよね？ ね？

エクスタシー…絶頂。

これはまあ、突き刺した剣を爆発させる技ですし。大・興・奮！ みたいな感じで、  
ディシプリン…折檻。

SMにおけるお仕置きの感じですか。スティック入力方向に剣を再配置するという技ですが、  
敵にしてみたら、「えー、俺？ 俺がやられちゃうわけ？」みたいな感じなんじゃないかと思  
って……。

クライマックス…最高潮。

これはまあエクスタシーとかなり似た感じですよ。同じように剣を爆発させる技ですし、自分  
の周囲に剣を再配置するっていう意味でもなんかクライマックス！ 仮面ライダーとかに影響  
されたわけではないです。

ボンデージ…拘束。SMなどで着る窮屈なファッション。

敵の周囲に剣を配置しちゃう技。見たままですよ。キュッ！ って刺さるしね。剣が。

という感じなのでダンテでルシフェルを使ってプレイする際は是非ともそういうところを理  
解して遊んで頂きたいと思います。ハアハアしながら。

ちなみにルシフェルの技名を見たモーシオン担当の人さんは「もうちょっと格好良い名前にな  
らないの？」と仰いました。

「なりません」

とボクは言いました。

だって「ルシフェル||ちよつとエッチ」だから。

みんなもエッチなルシフェルを好きになって下さい。

ダンテの技名の秘密編、終わり。

次はネロの名前の秘密編。

小説では名前の由来なんかにも触れましたが、そういう設定上の理由とは別に制作側の理由  
ってのも存在するわけです。当然ながら。

ダンテに代わる主人公としてどういう名前が適しているのか。  
結局のところ常に争点はそれでした。

いろいろ出したんですよ。候補は。

ボクの中では最初「ロダン」でした。

「考える人」で有名な彫刻家の人の名前です。

この方、ダンテの「神曲」に登場する地獄門をモチーフに作品を作ってるんですね。デビル  
4に地獄門を登場させる事は決定していたし、ダンテとも縁がある人物の名前だから、結構い  
いと思っていたんです。

でもよくよく考えてみると、3文字の名前なのにダンテと2文字も被ってるのはどうなの？という事になりました。あとやっぱり日本では「考える人」のイメージが強過ぎて、ちょっと知的なイメージを喚起しちゃうんじゃないかと。

それから山ほど名前の候補は出したんです。

しかしどれも決定に至らない。

そのうちボクも半ば諦めて、「もういいや、名前は後回しで」って感じになりました。

当時まだシナリオが完成し切っていなかったんです。

だからとりあえずシナリオを完成させよう、と。キャラクターがもう少し固まったら名前もついてくるだろう、と。

しかし名無しのままではシナリオが書けないんで、仮に名前を付けました。

それが「ネロ」です。

何気なく付けた名前だったんですよ、本当に。

デビル1に出てくるネロアンジェロという敵キャラクター名の一部であり、暴君ネロから引用したところもあります。今回は邪悪な宗教を壊滅させる話だったので、それを少し皮肉っぽく、キリスト教徒を弾圧した暴君ネロに喩えてみたわけです。

この「ネロ(仮)」が、シナリオが完成に近付くにつれて、「あ、なんかコイツはネロだな。もうネロ以外の何者でもないな」って感じに皆に浸透していききました。

それは凄く意外な事でした。正直。

ボクの中で、なんとなくネーミングのルールみたいなものがあった、口にした時に格好良く聞こえる響きっていうのは「濁音」と「撥音」、それに小さい「ツ」などが入ってる傾向が強いんです。

ダンテ。

濁音と撥音(ン)が入ってます。

トリッシュユ。

小さいツが入ってます。

レディ。

濁音が入ってます。

パージル。

濁音が入ってます。

スパーダ。

濁音が入ってます。

で、ネロ。

濁音も撥音もないし、小さいツもない。言い方は悪いですが、ちょっとヌルツとした感じの名前です。口にした時に引掛かりがない。

でも、「ネロ(仮)」はそのまま「ネロ(決定)」になりました。それはボクを含めたスタッフが「これまでと違う何か」をネロに求めていたからかもしれません。ダンテと似てはいても、異なるキャラクター。だからネロはネロという名前になったんじゃないかと。

今振り返ると、なんであんなに名前について悩んでいたのかが不思議なんです。

ネロでいいじゃん。ネロがいいじゃん。

と思います。

まあ、時間が経ったせいや慣れもあるのかもしれないけどね……。

続いてデビル4の他のキャラクターの名前について。

これはキリスト教の聖歌から取りました。

それぞれクレド、キリエ、アニユス・デイ、グロリア、サンクトゥスですね。そういうカテゴリがあるんです。アニユス・デイだけ、響きと発音の問題でアグナスに変えました。それ以外はほぼそのまんまです。

宗教の問題ってナイーヴなので、海外からクレーム付いたりするんじゃないかというのがちょっと心配でしたが、特にそういうのはなかったようです。

ただ、教皇は最初「ベネディクト」という名前でした。

どっかで聞いた事あるなあと思ってたら現ローマ法王の名前だったので、これはさすがに変えました。悪の教団のボスの名前にローマ法王使ったら怒られると思って。

あまり長々と続けられないので秘密の話はこのへんで。

残りは少しだけあとがきらしい事を。

口調も急に変えるけど気にせず読んでね。

ボクがカブコンに入社したのは2002年。小説を書いてデビューしたのと同じ年だった。初めて関わったゲームは『デビルメイクライ2』。

それが半年ほどで終わって、すぐに『デビルメイクライ3』のチームに入った。

仕事としては、シナリオを書いたり企画をしたりしていたのだけれど、ボクの上司であるところの伊津野さんは結構早い段階で「コイツあかんな」と思っていたらしい。

そして『デビルメイクライ3』が終わった後、言われた。

「お前、企画の仕事やる時とシナリオ作業してる時の仕事のテンションに差があり過ぎるな」ボクは元來文筆家志向の人間だったので、テキストを書く作業は楽しかった。

しかしゲームの企画をする作業はとても辛かったのだ。何故って、ボクはどんなに世間でつまらないと言われるゲームでも面白いと思ってしまうから。

タイトルは伏せるが、会社の人が資料として買った海外のゲームがあった。



これがもう、かなり駄目なゲームだった。操作性も悪いし、ゲーム内容も淡泊だし、難度も理不尽だった。だからみんなちょっと触ってすぐにやめた。

ゲームの映像だけ見られればいいやって感じだった。だがボクはそのゲームを延々やった。なんならみんなが帰った後、会社に居残り徹夜でぶっ続けてやったりした。そしてクリアした。

会社の人はみんな、「面白い？」と聞いてきたけれど、ボクは迷わずこう答える。

「いや、意外と面白いっすよ」

こんな人間だから自分でゲームの企画して駄目を出された時に、

「いや、面白いですよ、これ」

と思ってしまう。実際自分は面白く遊べる自信があった。

でもゲームって自分のために作るものじゃないのだ。他人に面白いと思ってもらわないと意味がない。

ボクにはそういう事を考える能力が欠如していた。

だからそんなボクに伊津野さんは言った。

「お前次はシナリオとかテキストだけやれ」

で、『デビルメイクライ4』の開発が始まったのである。

最初はテキストだけやってれば良いという事実が大層嬉しかった。うひょー！俺スペシャリスト！みたいな感じだった。

しかしゲーム会社においてテキスト作業だけをやる人間の立場ってのは複雑だ。早い話、そういう人間が必要な時と必要ない時とがはっきりしているのだ。

シナリオを書いてテキストを書いたらする事が無い。延々次のテキストの仕事待ち。

「まっこん、ゲームの開発期間は長い。」

2年以上かかった、なんてのはザラだ。

例えばその2年で自分が必要な期間を考えると、ボクはどう考えても半分くらいいらぬ子になってしまふ事が分かった。

「会社辞めます」

とボクは言った。『デビルメイクライ4』の開発途中、シナリオも完成した冬頃の事だった。会社で時間を持て余しながら過ごすよりは、その間小説を書こうと思ったのだ。毎朝起きる

のも辛いし。しかしデビル4チームも当時人手が足りない状態だったので、ボクは会社を辞め

たけど仕事の手伝いをする謎の人物になった。無論、お金は貰って、だ。

テキスト作業とシナリオ調整という名目だった。

週2回会社に顔を出し、必要な作業をして帰る。

なんと自由人。フリーダム。

これ楽だわあ、と思った。

だがそのうち話が変わってきた。

「人手が足りないから、イベントシーンの振動入れてくれない？」

ある日急にそう言われた。

正直、断りたかった。

「いや、ボクはあくまでテキスト作業のためにここに来ているので。それはちょっとできかねますな！」

と言ってしまったかった。

だがこのチームは自分の古巣。スタッフ全員顔見知り。しかも本当に人手が足りてないのも凄く分かる。そういう時大変なのは過去に経験している。

「まあ、いいですけど……」

そう答えてからボクは「フリーの振動職人」になった。

会社に行ってイベントシーンの振動入れて会社に行ってイベントシーンの振動入れて。でも社員じゃないの。フリーランスなの。

会社の外で別のチームの知り合いと会うと、

「あ、どうも。フリーでイベントシーンの振動入れさせてもらってます。森橋です」と挨拶するようになった。

またある人には、

「君は辞めるって聞いたけどいつ辞めるんや？」

と聞かれる事もあった。

「もう辞めてるんです」

「……ならなんで会社来とんの？」

「イベントシーンの振動入れているんですよ」

その人は、寂しそうに笑って、頑張れ。と言って下さった。

ひよっとすると会社を辞めたにもかかわらず奴隷のように虐げられているボクを想像したのではあるまいか。と、今になって思う。

そんな事ないよ。大変アットホームな環境でお仕事させて頂いたんだよ。

まあ、どれもこれも、今となっては懐かしい思い出の数々だ。

何が書きたかったのか自分でもよく分からないけれど、そんないろいろもあつつ『デビルメイクライ4』は完成したという事だ。

そしてそんな『デビルメイクライ4』と『デビルメイクライ』シリーズを皆さん、今後ともどうぞよろしく願います。

という事であとがきを終わろうと思う。

この本を買って下さった皆さんありがとう。

ゲームをプレイした方が、この本でよりゲームを楽しめるようになったらとても嬉しい。  
 そしてゲームをプレイした事のない方が、この本をきっかけにゲームを手にとって下さった  
 らそれもまた嬉しい。

それで、自分の仕事が少しでもカブコンさんへの恩返しになればな、と思う。

いかなせん、不義理の息子みたいなもんだからさ。

それではまた、いつかどこかでお会いできる日を楽しみに。

ありがとう、さようなら。

森橋  
ビンゴ

## デビルメイクライ 4

デッドリー フォーチュン  
-Deadly Fortune-2

著/森橋ビンゴ  
原作/カブコン

小説ストーリー協力/安井健太郎



角川文庫 15768

© CAPCOM CO., LTD. 2008 ALL RIGHTS RESERVED

平成二十一年七月一日 初版発行

発行者 井上伸一郎

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一三三

電話・編集 〇三〇三三三八一八六九四

〒一〇二一八〇七八

発売元 株式会社角川グループパブリッシング

東京都千代田区富士見二一三三

電話・営業 〇三〇三三三八一八五二二

〒一〇二一八一一七七

http://www.kadokawa.co.jp

印刷所 旭印刷 製本所 B B C

装幀者 杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送

りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Bingo MORIHASHI 2009 Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

S 211-2

ISBN978-4-04-419223-5 C0193